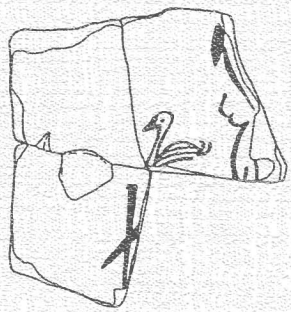
史跡斎宮跡

平成２年度発掘調査概報



1991

斎宮歴史博物館

第１図　平成２年度発掘調査地区

はじめに

昭和44年に始まった発掘調査は、今年で22年目を迎えましたが、140ヘクタールに及ぶ 広大な遺跡の11パーセントの調査を実施したにすぎません。しかし、これまでの調査は、幻の宮であった斎宮跡の実態を、徐々にではありますが、明らかにしつつあります。

特に今年度は、これまで通称中町裏で平安時代初めに造営されたとされてきた区画溝は、奈良時代末頃の光仁天皇期の酒人内親王もしくは桓武天皇期の朝原内親王の頃までの遡るのではないかと、文献に見られる斎王との関係で論じられるようにまでなりました。また史跡西部で検出していた奈良時代の東西に走る溝は、中町裏まで真っ直ぐに伸び、区画溝が整備されるまでの、伊勢への官道ではないかという可能性も出てまいりました。

一方、博物館の活動の一つである博物館講座では、第一線で活躍していられる研究者を招き、昨年に引き続き斎宮と深い関連を持つ「古代官衙」及び「国府」についての講座を開催いたしました。また、好評をいただいている「体験発掘」も、地元明和町ばかりでなく、県下全域に対象を広げ、多くの参加を得ました。

これらの成果は、ひとえに地元明和町の方々の献身的なご協力のおかげであります。ここに文化庁及び調査指導委員の諸先生の変わらぬご指導と、明和町をはじめとして関係各位のご理解に深く感謝を申し上げ、あいさつにかえさせていただきます。

平成３年３月29日

斎宮歴史博物館

館長　中林昭一

例　　言

1．本書は、斎宮歴史博物館が、国庫補助金を受けて平成２年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要である。

2．明和町斎宮跡保存対策室（平成３年１月からは明和町教育委員会）が、国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更等緊急調査報告書は別に明和町が発行している。

3．遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第６座標系を基準としている。方位の座標は座標北を用いた。

4．遺構の時期区分については、「斎宮の土師器（年報1984）」による。

5．遺構表示記号は次の通りである。

ＳＢ；建物　ＳＫ；土拡　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；柵　ＳＦ；道路　ＳＸ；その他

6．遺物実測図は、特に断わってない限り実物の４分の１である。

7．写真図版で使用した遺物番号は、各次数の遺物番号と一致する。

8．斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

財団法人京都府理蔵文化財調査研究センター理事長　福山敏男氏

椙山女学園大学名誉教授　久徳高文氏

国文化財保護審議会専門委員　坪井清足氏

京都府立大学学長　門脇禎二氏

名古屋学院大学教授　楢崎彰一氏

名古屋大学教授　早川庄八氏

皇学館大学教授　渡辺寛氏

千葉大学教授　北原理雄氏

三重大学教授　八賀晋氏

9．本概報の執筆・編集は、斎宮歴史博物館調査課の谷本鋭次、倉田直純、上村安生、御村充生、久保勝正があたり、中桐真紀、森脇景子、尾家恵がこれに協力した。

目　　次

Ⅰ調査の経過と概要…… 1
Ⅱ第86次調査…… 3
Ⅲ第87次調査……27
Ⅳ第88次調査……45

挿図・表目次

〔表〕 1．平成２年度発掘調査地区一覧…… 2
2．第86次調査時期別遺構分類表…… 4
3．第87次調査時期別遺構分類表……28
4．第88次調査時期別遺構分類表……46
5．掘立柱建物・塀一覧表……75・76
6．竪穴住居一覧表……77
7．斎宮跡発掘次数一覧表……78～81
〔図〕 1．平成２年度発掘調査地区位置図
2．第86次調査遺構実測図（1：200）……5・ 6
3．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6070・6065・6066・6030出土遺物）……11
4．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6030出土遺物）……13
5．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6015出土遺物）……14
6．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6015出土遺物）……15
7．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6005・6060出土遺物）……17
8．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6045・6071出土遺物）……19
9．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6039出土遺物）……20
10．第86次調査出土遺物実測図（ＳＫ6003・6007・6008・6013・6015・6030・6050・6060、pit、包含層出土遺物）……21
11．奈良時代後期～平安時代初期建物変遷図（1：1500）…… 24
12．第Ⅰ期の遺構配置図（1：1500）……26
13．第87次調査遺構実測図（1：200）…… 29・30
14．第87次調査出土遺物実測図（ＳＢ6125・6098出土遺物）……40
15．第87次調査出土遺物実測図（ＳＢ6105・6130出土遺物）……41
16．第87次調査出土遺物実測図（ＳＢ6110・ 161、ＳＫ6163・6140出土遺物）…… 42
17．第87次調査出土遺物実測図（ＳＫ6149・ 6167 ・164 ・165、ＳＤ 206、包含層 出土遺物）…… 43
18．第88次調査遺構実測図（1：200）…… 47・48
19．ＳＫ6226・6227土層断面図（1：40）……49
20．第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6225出土遺物）……55
21．第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6225出土遺物）……56

22. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6220・6228出土遺物）……58
23. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6226出土遺物）……60
24. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6226・6227出土遺物）……61
25. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6210出土遺物）……63
26. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6210・6221・6215出土遺物）……64
27. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ2798出土遺物）……67
28. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ2798出土遺物）……68
29. 奈良時代中期の土師器杯・皿……70
30. 第88次調査出土遺物実測図（ＳＫ6246・ＳＥ6240）……71
31. 溝ＳＤ 170及び古道推定線……73
32. 斎宮跡地区表示……82

写　真　図　版

1．第86次調査全景（北から）、第88次調査全景（南から）
2．第86次調査全景（北から）、第86次調査北半景（南から）
3．第86次調査ＳＦ6009（西南から）、ＳＢ6000（北から）
4．第86次調査ＳＢ6020（北から）、ＳＢ6055（北から）
5．第86次調査ＳＢ5924・ＳＫ6046・ＳＢ6048（北から）、ＳＢ6010・ＳＤ6050（北から）
6．第86次調査ＳＫ6030（北西から）、ＳＫ6011～ＳＫ6015（南から）
7．第86次調査ＳＫ6060他土坑群、ＳＫ6005、（北から）
8．第87次調査全景（北東から）、南調査区全景（西から）
9．第87次調査ＳＢ6090（西から）、ＳＢ6090・6091・6098～6100（南から）
10. 第87次調査ＳＢ6092（北から）、ＳＢ6098・6099（北から）
11. 第87次調査ＳＢ6123・ＳＢ6124・ＳＫ6128（北から）、ＳＢ6135・ＳＢ6105・ＳＢ161（北から）
12. 第87次調査ＳＢ6165（北から）、ＳＢ6180（北から）
13. 第87次調査ＳＤ 207（南から）、ＳＥ6101（北から）
14. 第88次調査全景（東から）、西半景・ＳＡ2800（北から）
15. 第88次調査ＳＤ2404（東から）、ＳＢ6237・ＳＢ6238（北から）
16. 第88次調査ＳＢ6233（南から）、ＳＢ6232（南から）
17. 第88次調査ＳＢ6234（東から）、ＳＢ6241・ＳＢ6242（東から）
18. 第88次調査ＳＢ2390・ＳＢ2391（東から）、ＳＢ6251・ＳＫ2397・ＳＫ2402（北から）
19. 第88次調査ＳＥ6240（東から）、ＳＫ6226・ＳＫ6227土層断面（東から）
20. 第86次調査出土墨書土器（大炊・官・府・水鳥の絵・本あるいは奉・豊兆ヵ）
21. 上段：第86次調査出土墨書土器（三・周）、中段：第87次調査出土石硯、陶硯、須恵器(1:3)
下段：第87次調査出土墨書土器（武・大）
22. 上段：第88次調査ＳＫ6225出土土器、下段：第88次調査ＳＫ6210出土土器
23. 上段：第88次調査ＳＫ2798出土土器（1：5）、下段：第88次調査ＳＫ6215出土土器（1：5）

Ⅰ　調査の経過と概要

昨年度西加座地区で実施した第83次・84次調査では、東西14間、南北12間の掘立柱塀による区画施設が確認されたのをはじめ、雨落ち溝あるいは薪垣のような施設の伴う大型掘形をもつ建物、東西130ｍの区画を二分する道路遺構、墨書土器「少充殿」など、遺構・遺物において数々の貴重な発見があった。

本年度第１回目の計画調査となった第86次調査は、このすぐ北側で約1.500㎡にわたって実施した。そのおもな目的は、掘立柱塀等による新たな区画の有無の確認と、昨年度調査で確認の掘立柱塀に囲まれた内部の建物群とこれに付随するであろう外部の建物群との関係、さらにはこれらの建物群の時期的な変遷を把握することであった。調査の結果、平安時代初期の大型柱掘形をもつ掘立柱建物を新たに７棟検出し、切り合い関係やその配置状況からこれらの建物が少なくとも４小期以上にわたり変遷することが確認された。ちなみに782年から809年の間に、朝原、布勢、大原、仁子の四人の斎王が卜定されている。４小期の建物をそれぞれの歴代斎王毎に建て替えられた建物とみれば、今まで平安時代初期と考えていた区画溝や大型で整然と配置された建物群の造営初源は、必然的に奈良時代末期あるいは後期まで遡せる必要が生じてきたことになろう。但しその画期を光仁朝まで遡らせるのか、桓武朝の長岡遷都と併行させるのかは、斎宮の土器編年観との問題もあり、もう少し検討したい。遺物では水鳥を描いた墨画土器や「大炊」「府」「官」「豊兆」といった墨書土器が注目された。

第２回目の第87次調査は、宮域西部の塚山地区で約1.500㎡にわたって実施した。当調査区は、古里地区から東へ延びる鎌倉時代の古道が北と南へ分岐することが予想された場所で、ちょうどそのコーナー部分に当たる。また当調査区の東側では、昭和63年度から５ヶ年計画で上園地区芝生広場整備事業を継続して実施しており、斎宮歴史博物館へのアプローチ道路に面したこの一画の遺構状況を事前に把握し、将来の環境整備事業に関するデータを得ておく必要があった。調査は夏の暑い盛りの７月17日から開始されたが、三度にわたる台風に見舞れ、調査は大幅に遅れ、終了したのは秋風の吹く10月22日であった。調査の結果、検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物・ 竪穴住居と鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物とに大きく二分され、宮域西部における普遍的な遺構状況であることがわかった。特に奈良時代前期の６間×３間の大型掘立柱建物や、溝により区画された中世の屋敷地を想定させる遺構が目を引いた。

毎夏開催している体験学習は、対象を明和町管内から松阪、伊勢管内在住の小中学生にまで広げ、公募という形をとり、８月１日～３日の３日間にわたり、父兄共ども40名の参加者を得て、当調査区及び斎宮歴史博物館内で実施された。またこれに先立ち７月25日から31日までは、

博物館実習生の現地実習も当地で行われた。

第３回目の計画調査となった第88次調査は、かつて区画溝、柵列、大型倉庫群などが確認され、鍛冶山地区の中でも重要な一画とされていた第46次調査区の南側で、約1.250㎡ の調査を実施した。調査の結果、柵列ＳＡ2800は、さらに南側へ７間分延び、第83次調査で確認の柵列ＳＡ5840よりさらに規模の大きな区画施設であることが確認されたほか、新たに２棟の大型柱掘形をもつ総柱建物の検出や、当初予想もしていなかった古里地区から東南東方向に１㎞以上にわたりまっすぐ延びる道路遺構の確認など多くの成果があった。また遺物では、奈良時代中期の良好な一括資料を出土する土抗群が多数検出され、この時期の土師器編年の基礎ができたことも大きな成果の一つとなった。

上記計画調査のほかに当博物館調査課では、別表のとおり第85－１次～８次調査におよぶ８件の現状変更等に伴う緊急の事前調査も実施した。特に祓川を見おろす竹川の台地縁辺部で実施した第85－８次調査では、飛鳥時代に遡る可能性のある柵列や、これと同方向の倉庫を中心とする掘立柱建物群が検出され、奈良時代以前の斎宮を考えるうえで貴重な成果が得られた。今後当該地区を含めた周辺地区での調査の進展が待たれるところである。

第１表　平成２年度発掘調査地区一覧

調査次数	調査地区	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	地区
85－1	6ABD 6ACD	303	2.7.10～ 2.11.2	明和町竹川字古里	三重県	県道南藤原 竹川線拡幅	3
85－2	6ACA －P	68	2.7.10～ 2.7.30	明和町斎宮字古里	松本　清	個人住宅新築	3
85－3	6ACJ －B・D	60	2.9.25～ 2.9.27	明和町竹川字東裏	明和町	町道側溝新設	3
85－4	6ABE	95	2.11.7～ 2.11.15	明和町竹川573-1	永納　一義	盛土	3
85－5	6AED －U	260	3.1.10～ 3.1.25	明和町斎宮字楽殿 2885-2	西山　嘉治	盛土	3
85－6	6AFH －B	120	3.1.21～ 3.2.6	明和町斎宮西加座	明和町	防火水槽設置	2
85－7	6ACB －C	121	3.3.1～ 3.3.18	明和町斎宮塚山 3276-3他	加藤　正彦	個人住宅新築	3
85－8	6ABI －N	370	3.2.26～ 3.3.30	明和町竹川字中垣 内427-1	小林　文男	耕作土の 天地返し	3
86	6AFH－ F～H	1500	2.4.18～ 7.7.2	明和町斎宮西加座 2679-1他	森下幸太郎 他	計画的面調査	2
87	6ACE－ N・Q・R	1500	2.7.17～ 2.10.22	明和町斎宮字塚山 3356他	加藤　正彦 他	計画的面調査	1
88	6AGN －C・D	1250	2.10.19～ 2.12.27	明和町斎宮鍛冶山 2411-1他	服部　幸生 他	計画的面調査	2

Ⅱ　第86次調査

6ＡＦＨ－Ｆ・Ｇ・Ｈ（西加座地区）

本年度第１回目の調査として実施した第86次調査は、史跡の東部にあたる通称中町裏、西加座地区で実施したもので、調査面積は約1,500㎡、現況は畑地である。基本的層位は Ⅰ；耕作土、Ⅱ；灰褐色土、Ⅲ；地山である。地山までの深さは0.2～0.3ｍである。調査地は昨年の秋から実施した第83次・第84次調査の北側にあたる。

昨年の調査では、掘立柱塀列と溝によって区画された東西41.44ｍ・南北35.52mの方形の区画が検出され、その中に同時期の掘立柱建物が２棟確認されている。これらは中町裏に想定されている基盤目状の区画溝・道路の方向と一致している。更に昨年の調査では奈良時代後期から平安時代後期までの掘立柱建物や井戸が検出されており、遺物においても「目代」・「少允殿」などといった遺構の性格を考える上で重要な墨書土器が出土している。

このような状況から周辺地域においてどのような建物の配置が見られるか、また、今回の調査区の北端には区画溝と道路が想定されるがその状況はどうかなどを確認する事を調査の目的とした。

（１）奈良時代後期の遺構

掘立柱建物１、土坑５、溝２、この２つの溝を側溝とする道路１がある。

ＳＢ6000は調査区の南側で検出した４間×２間の東西棟である。柱掘形は一辺0.8ｍ、 深さ0.6ｍの方形である。この建物の北側と南側でＳＤ6034とＳＤ6035の２条の東西溝を 検出している。更にＳＤ6034は途中で区切れており、その北に南北溝ＳＤ6033がある。この３条の溝はほぼ垂直に掘られた溝の壁がしっかり残り、水が溜まったり流れた痕跡が無い点、溝の所々に窪みがあり、この埋土も溝と同じ黒色土で溝と同時に掘られている点などから当初は雨落ち溝と考えたが、塀あるいは垣のような施設と考えられる。

ＳＫ6065・6066・6070は調査区の西側にある。長径3.0～3.6ｍ、短径2.0～3.0ｍ、深さ0.2～0.3ｍの不整楕円形を呈する。いずれも埋土は黒褐色土で土師器杯・蓋・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕等を含んでいる。ＳＫ6030は調査区中央東側で検出した南北3.0ｍ、東西 2.5ｍ、深さ0.4ｍの楕円形を呈する土坑である。遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯・蓋・広口壷・鉄鏃がある。ＳＫ5923は調査区の南端に第84次調査で検出されているものである。埋土は黒色土で、土師器甕が少量出土している。

ＳＤ6002・6050は幅1.8ｍ、深さ0.4～0.5ｍの東西溝である。溝の埋土は暗褐色土・黒褐色土である。この溝は史跡東部で想定している基盤目状の区画のうち、１番北と２番目を区画する

東西道路（ＳＦ6009）の北側溝と南側溝にあたる。この溝の間は心々で約12ｍある。ＳＤ6050からは土師器杯・皿・甕・鍋・竈、須恵器杯・蓋・甕・長頸壷が出土しており、「府」・水鳥の絵などの墨書土器もある。

（２）平安時代初期の遺構

掘立柱建物８、土坑10がある。

この時期の建物は３ヵ所で各々２～３棟重複して検出した。

調査区の北にはＳＢ6020・6021・6028がある。ＳＢ6020は区画溝ＳＤ6050から約５ｍ離れて建つ東西棟の建物で規模は５間×２間、南面に廂をもつ。柱間は桁行2.4ｍ、梁行2.4ｍ、廂柱間は2.7ｍである。柱掘形は一辺0.9ｍ、深さ0.7ｍの方形で、遺存状況の良い柱穴では建物の内側から東側に向かって柱抜き取り痕を検出している。ＳＢ6021はＳＢ6020の建て替えと考えられる東西棟の建物で規模は５間×２間である。柱間は桁行2.5ｍ、梁行2.4ｍである。柱掘形は一辺0.7ｍ、深さ0.7ｍの方形である。柱痕跡が良く残っており、径0.2ｍ程の柱が想定される。ＳＢ6028は更にＳＢ6021の建て替えと考えられる東西棟の建物で３間×２間と想定される。柱間は桁行2.0ｍ、梁行1.9ｍと規模が縮小される。

	遺構の種別		
	ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ
奈良後期	6000	6030・6065・6066・6070・5923	6002・6033・6034・6035 6050・6009（SF）
平安初期	6020・6021・6028 6037・6040・6055 6076・5920	6011・6012・6013・6014・6015 6018・6032・6046・6053・6054	
平安前Ⅰ期	6051・6063・6068 6077・5924	6005・6017・6060・6016・6064	
平安前Ⅱ期古	6010・6052	6041・6042・6043・6044・6045 6047	
平安前Ⅱ期新	6019・6022・6023 6024・6025・6029 6067・6074・6075 6079・6080	6003・6006・6007・6008・6027 6048・6056・6058・6071・6072 6073	
平安中期	6016・6026・6036 6038・6057・6059 6069・6078	6031・6039・6049・6062	
平安後期		6004	6001

第２表　86次調査　時期別遺構分類表

第２図　第86次遺構実測図（１：200）

ＳＢ6040はＳＢ6020より南約15ｍに位置する。４間×２間の東西棟の建物で、柱間は桁行が2.4ｍ、梁行2.7ｍである。柱掘形は一辺1.0ｍ、深さ0.6ｍの隅丸方形である。ＳＤ6000を建て替えたものと考えられる。ＳＢ6037はＳＢ6040の建て替えと考えられる東西棟の建物で規模は不明であるが、ＳＢ6021・5920と並ぶことから、５間×２間と想定される。柱間は、桁行2.5ｍ、梁行2.4ｍである。柱掘形は一辺0.8ｍ、深さ0.5ｍの方形である。

調査区の南にはＳＢ6055・5920がある。ＳＢ6055は東西棟の建物で、規模は４間ないし５間×２間である。南面に廂をもつ。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.4ｍで、廂柱間は2.4ｍである。柱掘形は一辺1.0ｍ、深さ0.5ｍである。ＳＢ5920は第84-2次調査で確認されている建物で今回の調査で時期を前Ｉ期から初期に変更した。５間×２間の東西棟の建物で柱間は桁行2.5ｍ、梁行2.4ｍである。柱掘形は一辺1.3ｍと比較的大型の方形で、深さは0.7ｍである。

ＳＢ6076は西調査区の南端で梁行の柱通りのみ検出している南北棟の建物である。梁行は、1.9ｍ、柱掘形は一辺0.7ｍ、深さ0.5ｍである。

以上、初期の建物は８棟あるが、柱通りの方向はＳＢ6028・6055・6076がＥ３°Ｎ、Ｎ３°Ｗ、その他がＥ４°Ｎである。

ＳＫ6011～6015は区画溝ＳＤ6050から５ｍ程離れた所にある重複した土坑である。埋土の切り合いはＳＫ6015→ＳＫ6013→ＳＫ6014、ＳＫ6015→ＳＫ6011→ＳＫ6012である。ＳＫ6015は東西約８ｍ、南北約３ｍ、深さは0.5ｍである。黒褐色土の埋土からは、土師器 杯・皿・蓋・高杯・甕・鍋・竈、須恵器杯・蓋・甕などが整理箱で11箱分出土している。ＳＫ6013は、ＳＫ6015の西から中央にかけて鍵の字状に重複する土坑である。埋土は茶褐色土で、出土する遺物の構成はＳＫ6015と同じで時期差もなく、整理箱で13箱分出土している。２つの土坑では杯・皿の供膳用土器の他に鍋・竈・甕の煮沸用土器が他の土坑より多く出土しているのが特徴的である。ＳＫ6015からはフイゴ羽口、ＳＫ6013からは「大炊」と墨書された土師器が出土している。なおＳＢ6020・6021はこれらの土坑が埋没してから柱穴が掘られている。ＳＫ6011・6012・6014は長径1.4～2.5ｍ、短径1.0～1.4ｍの不整楕円形を呈している。ＳＫ6012からは土師器甑や製塩土器が出土している。ＳＫ6018はこれらの土坑群の南約４ｍにある長径1.4ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.1ｍの不整楕円形の土坑 である。ＳＫ6032は、調査区のほぼ中央にある東西1.6ｍ、南北0.7ｍ、深さ0.2ｍの土坑、ＳＫ6053・6054は調査区の南西端にある土坑で更に西へ続く。埋土の切り合いからはＳＫ6054の方が古い。これらの土坑からの出土遺物は土師器杯・皿・甕の破片であわせても整理箱１箱に満たない。

ＳＫ6046は調査区の南東端にある土坑で南北5.2ｍ、東西は2.2ｍが確認されており、更に東へ続く。埋土は黒褐色土で、土師器杯・皿・高杯・甕・竈、須恵器杯・蓋・甕が整理箱で５箱分出土している。須恵器蓋の中には内面に墨痕が見られるものがある。

（3）平安時代前期の遺構

この時期の遺構が当調査区では一番多い。以下、前Ⅰ期・前Ⅱ期古・前Ⅱ期新に分け述べることにする。

平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物５、土坑５がある。

掘立柱建物の配置は初期の建物をかなり意識したようで、初期とほぼ同じ位置で検出された。ＳＢ6020と重複する位置でＳＢ6063、ＳＢ6076と重複するのがＳＢ6077、この２棟の間にＳＢ6068が位置する。これらの建物の柱掘形は一辺0.5～0.7ｍの隅丸方形を呈し、柱間は桁行2.2ｍ、梁行1.9ｍである。調査区の南端では第84-2次調査で検出されていたＳＢ5924とＳＢ6051が重複する。この２棟の建物は同じ位置での建て替えと考えられる。建物の規模は調査区の東に続くため定かでないが、ＳＢ5924は第83次調査で検出しているＳＢ5812と梁行の柱通りを揃えることから、５間×２間の東西棟の建物であろう。柱掘形は一辺1.0～1.2ｍ、深さ0.5ｍと比較的大型の方形である。柱間は桁行2.4ｍ、梁行2.5ｍである。柱掘形の切り合いはＳＢ5924の方が古い。

ＳＫ6061・6005は調査区の北端にあり、区画の東西道路ＳＦ6009を掘り込む。ＳＫ6061は東西5.7ｍ、南北1.8ｍ、深さ0.2ｍと浅い土坑であるが、ＳＫ6005は東西10.7ｍ、南北3.2ｍと大きく、深さも西で0.5ｍ、東の深い所で約１ｍある。一部は区画溝ＳＤ6050の埋土を切っており、この段階で既にＳＤ6050が埋まっていること、ＳＦ6009が道路としての機能を果たしていないことが窺える。暗茶褐色土の埋土からは、土師器杯・皿・甕・鉢・竈・甑、須恵器杯・蓋・甕が整理箱で７箱分の遺物が出土している。

ＳＫ6017・6064は南北1.3ｍ前後、東西0.5ｍ前後の土坑でどちらも深さ0.1ｍと浅い。

ＳＫ6060は調査区の南にある。長径6.0ｍ、短径4.0ｍ、深さ0.3ｍの不整楕円形の土坑である。埋土は上層が暗茶褐色土、下層が暗褐色土で堆積の違いで出土遺物に時期差は無く、土師器杯・皿・高杯・甕・短頸壷、須恵器杯・蓋・甕・長頸壷の他、３個体以上の製塩土器が北東の隅でまとまって出土している。

平安時代前Ⅱ期（古）の遺構

平安時代前Ⅱ期については、共伴する灰釉陶器から、黒笹14号窯式の新しい段階のものと黒笹90号窯式のものが混在する時期を古く、黒笹90号窯式だけが共伴する時期を新しく、２つの時期に分けて述べる。

掘立柱建物２、土坑６がある。

掘立柱建物はこの時期まで初期の建物を意識している。ＳＢ6010はＳＢ6020のすぐ西に建つ東西棟の建物で更に東へ続くため規模は不明であるが、柱掘形は一辺0.8ｍ、深さ0.4ｍの方形

である。柱間は桁行、梁行ともに2.3mである。ＳＢ6052は調査区の南端にあり、ＳＢ6051の建て替えと考えられる建物である。柱間は桁行2.0m、梁行1.9mと小さくなる。

土坑は前Ⅰ期のＳＫ6060のすぐ南にＳＫ6041～6045があり、ＳＫ6042→ＳＫ6043→ＳＫ6045、ＳＫ6042→ＳＫ6044という埋土の切り合い関係で重複している。遺物はＳＫ6045から土師器杯・皿・鉢・甕・竈、須恵器杯・蓋・甕が整理箱６箱分出土している。ＳＫ6047は調査区の南東隅にある土坑で更に東へ続き規模は不明である。

平安時代前Ⅱ期（新）の遺構

掘立柱建物11、土坑11がある。

掘立柱建物はＳＢ6080が調査区の南にある他は、調査区の中央に10棟が集中する。建物の規模は不明なものもあるが、概ね３間×２間で、柱間は1.7～1.9mとなり前代までよりも縮小される。また、柱掘形も0.4m前後の丸型となり小さくなる。ＳＢ6019とＳＢ6079 の２棟の南北棟建物が重複し、ＳＢ6022～6025の４棟の東西棟建物が重複することから少なくとも４時期くらいの建物変遷が考えられる。

土坑ＳＫ6003・6006・6007は調査区の北にあり、道路ＳＦ6009を掘りこんでいる。特にＳＫ6003は南北約８ｍ、東西約５ｍの不整楕円形を呈し、同時期の土坑がいくつも重複しているものと考えられ、深い所では1.3mもの深さがある。遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器壷、灰釉陶器椀・皿が整理箱で４箱分出土している。灰釉陶器皿の底部外面には「周」の墨書が見られる。また、ＳＫ6007出土の土師器杯の底部外面には「官」の墨書が見られるものがある。

ＳＫ6008はＳＫ6007の2.5m程南にある調査区の東に続く土坑で土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰釉陶器段皿、黒色土器椀が整理箱で１箱分出土している。

調査区の中央の掘立柱建物が集中しているあたりには、ＳＫ6027・6071・6072・6073がある。ＳＫ6071は東西、南北とも1.4mであるが、不整形な土坑で、深さは0.2mと浅いが土師器杯・皿を中心として、鉢・甕、須恵器蓋、灰釉陶器椀、緑釉陶器皿が整理箱で９箱分出土している。その他の土坑からの遺物は少なく、あわせても整理箱１箱分である。

調査区の南にはＳＫ6048・6056・6058がある。ＳＫ6048は南北4.3m、東西3.3mの不整楕円形の土坑で深さは0.3mである。土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀・段皿が 整理箱８箱分出土している。その他の土坑からの出土遺物はほとんどない。

（４）平安時代中期の遺構

掘立柱建物８、土坑４がある。

掘立柱建物は前Ⅱ期の新しい時期の配置を意識しているようで、調査区の中央にＳＢ6026・6036・6069・6078があり、更に北にはＳＢ6016、南にはＳＢ6038・6057・6059がある。これらの建物のうち、ＳＢ6038以外は前代の建物と規模、柱間、柱掘形の形など同じである。

ＳＢ6038は一辺0.6ｍ、深さ0.6ｍの方形の柱掘形をもつ建物である。東側の梁行は２間、西側の梁行は３間と不揃いである。桁行は３間であるが、南側の桁行のうち中の２穴は布掘りである。

土坑は調査区の北から南にＳＫ6062・6031・6039・6049が点在する。いずれも長径1.8ｍ、短径1.5ｍ、深さ0.2ｍの不整楕円形の土坑でＳＫ6031からは土師器杯・皿・甕、黒色土器椀、灰釉陶器椀が整理箱１箱分、ＳＫ6039からは土師器杯・皿・台付皿・甕が整理箱２箱分出土している。

（５）平安時代後Ｉ期の遺構

土坑１、溝１がある。

ＳＫ6004は調査区の北にある東西1.0ｍ、南北0.6ｍの小さな土坑である。少量の土師器杯・甕、灰釉陶器椀が出土している。

ＳＤ6001は調査区の北側にある溝で、溝の幅は更に北まで続くので不明である。溝の埋土はＳＤ6002の埋土を切っている。出土遺物には、土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀があるが整理箱１箱分と少ない。なお、この溝が完全に埋まるのは平安時代末期である。

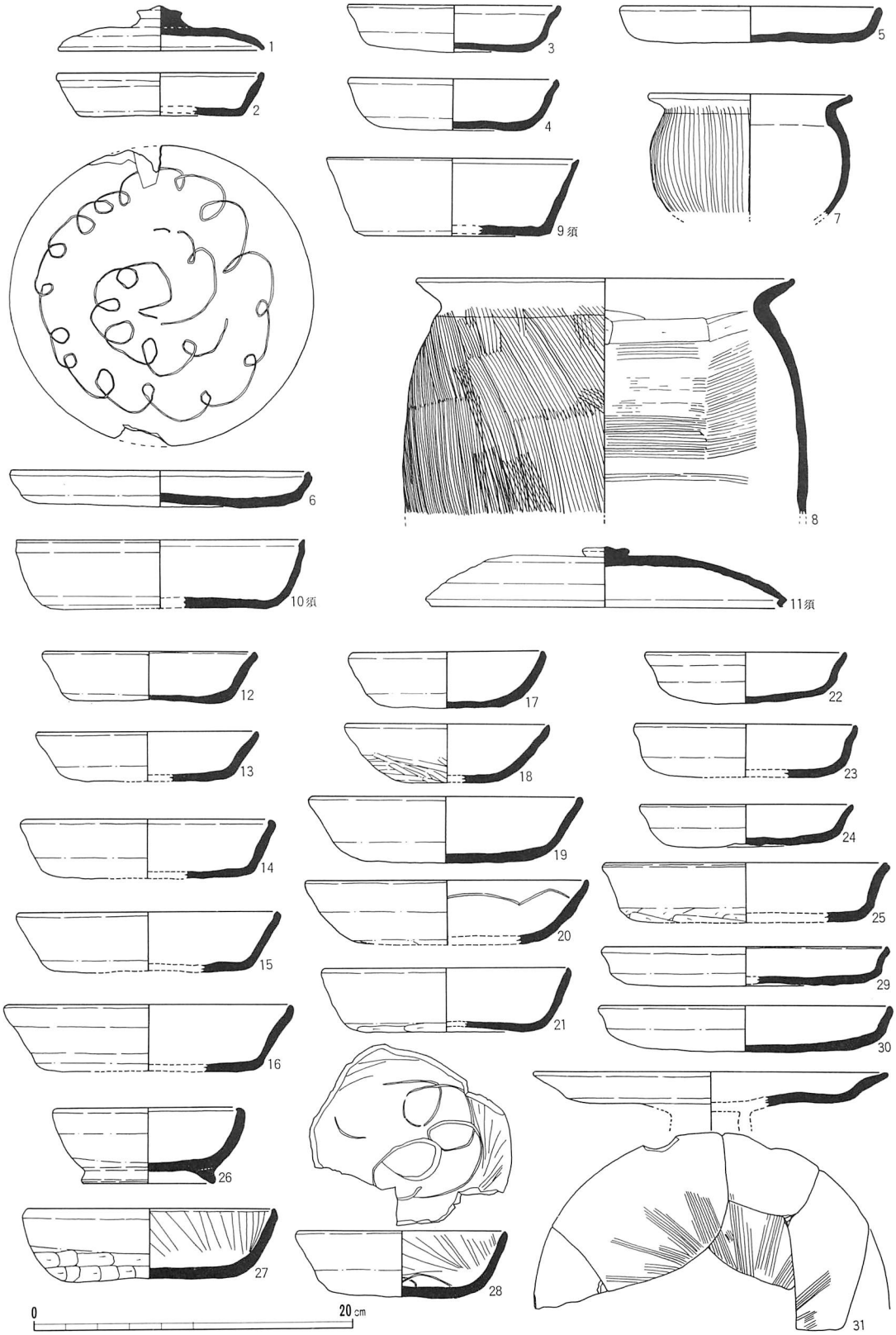
（６）遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約180箱ある。奈良時代後期から平安時代後期まで各時期を通して土坑からまとまった遺物が出土している。

ＳＫ6070出土の遺物には土師器杯・蓋・皿・甕・竈、須恵器杯・甕がある。杯・皿ともに底部をヘラケズリせず、ナデで調整し、口縁部のみヨコナデする奈良時代後期でも新しい様相を持つものである。杯には底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開く（２）と境は明瞭でなく、口縁端部が外反し受け口状になる（３）、口縁端部が内弯気味になる（４）がある。蓋（１）は外側がナデ調整されるもので、口径13.6㎝、器高2.8㎝である。皿には底部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁端部が丸く終わる（５）と境が 明瞭になる（６）がある。（６）は内面に螺施状暗文がある。甕には、口径12.8㎝と小型で丸い（７）と長胴甕（８）がある。須恵器には杯（９）がある。口径16.0㎝、器高4.9㎝のもので、折戸10号窯式の時期のものである。須恵器はこの他、ＳＫ6065から杯（10）が、ＳＫ6066から蓋（11）が出土している。いずれも、鳴海32号窯式の時期のものである。

ＳＫ6030出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・竈・鍋、須恵器杯・広口壺、鉄鏃がある。

土師器杯は底部と口縁部の境が明瞭なもの（12～16・25）とそうでないもの（17～24・27・28)、さらには高台が付くもの（26）に分けられる。（12・13）は口縁部が弱く外反し、端部は内弯気味となるものである。口径は13.0～14.0㎝で器高は3.0㎝前後である。（14～16）は口



第３図　第86次出土遺物ＳＫ6070；１～９、ＳＫ6065；10、ＳＫ6066；11、ＳＫ6030；12～31

縁部がほぼ直線的に外へ開き、端部は内弯気味となるものである。（14・15）は口径が15.0～17.0cmで器高が3.8cm前後の中型のものである。（16）は口径17.8cm、器高4.3cmと大型のものである。（17）はいなか風椀で、この時期くらいまでで消滅する。（18～20）は長めの口縁部が外方へまっすぐに開くもので、（18）は口径13.0cm、器高3.8cmと小型であるが、（19・20）は口径17.0～17.8cm、器高4.2cm前後と大型である。（21・28）は（18～20）ほど口縁部が外へ開かずにまっすぐのびるものである。（22～24）は口縁部が外反し端部は受け口状になるものである。口径は12.4～13.8cmで小型である。（24）は器高2.7cmと浅い。（27）は口縁部が内弯気味に立ち上がるものである。（25）は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は面をもつものである。明るい赤褐色をしており、焼成も硬くしまっている。これらの杯の器面の調整方法は（18・20・21・25・27・28）は底部外面をヘラケズリするｂ手法で、その他はナデ押さえするｅ手法である。（20）には螺施状暗文が、（27）には荒い放射状暗文があり、（28）には両方が見られる。

皿は杯の口縁部形態に対応して、外反しさらに端部がやや内弯する（29・30）がある。ただし、（29）は平坦な底部であるが（30）の底部は丸く全体に厚手である。

（31）は高杯で杯部の裏にはハケメがある。

甕は口径24.8～27.0cmの大型のもの（32～34）と口径16.0cmの小型のもの（35）があるが、（32・33）は長胴甕、（34）は球形に近い体部になるものであろう。

鍋は口径24cm前後のもの（36）、30cm前後のもの（37）、46cm前後のもの（38）と大・中・小の三種類があるが形態はすべて同じである。

須恵器には、蓋（39）、杯（40）、広口壷（41）がある。鳴海32号窯式の時期のもので、土師器の時期よりやや古いものである。

平安時代初期の土坑ＳＫ6015出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・鍋・竈、須恵器杯・蓋・甕がある。

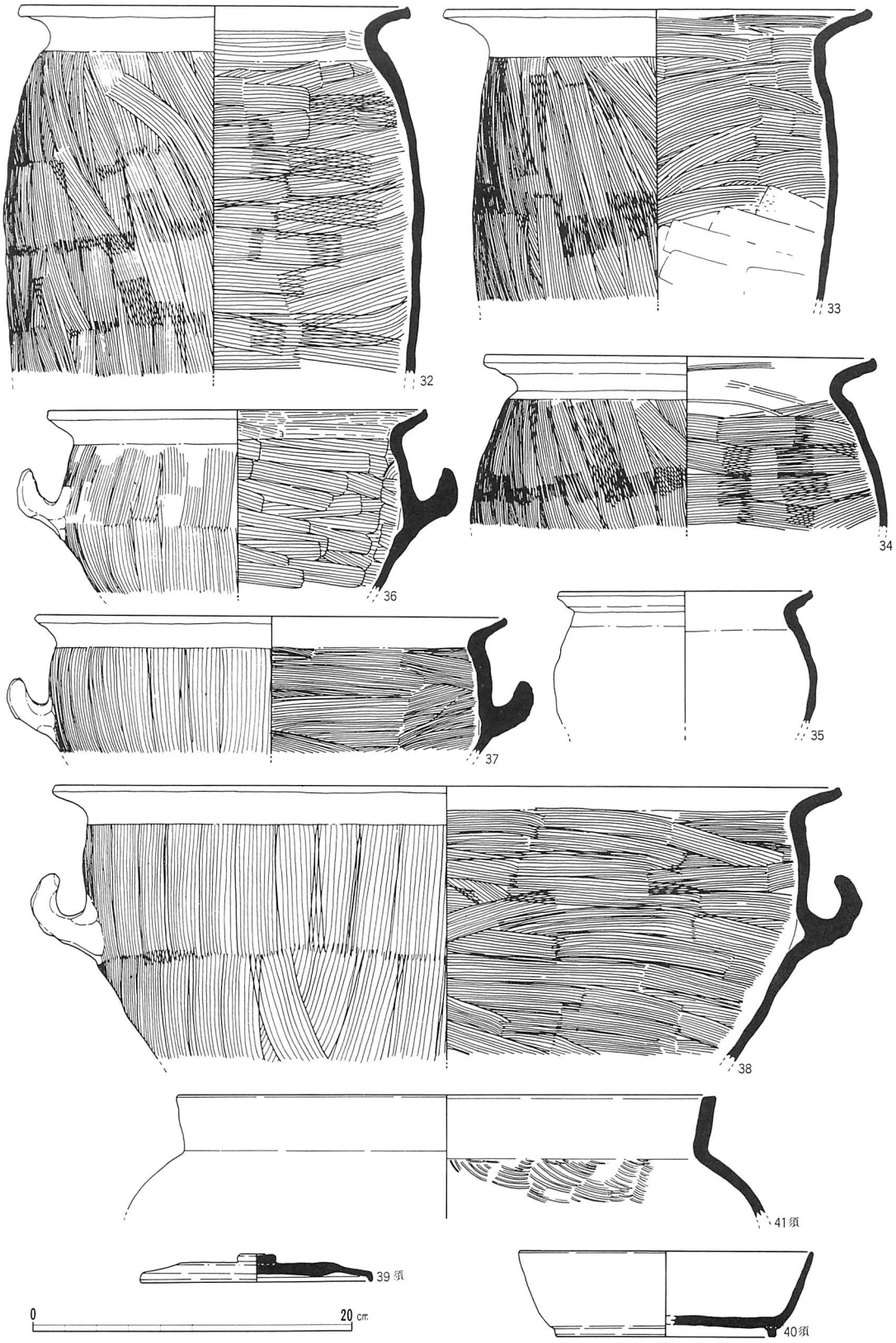
土師器杯には口縁部が外反し、端部が内弯する（42～45）、口縁部が直線的に外へ開く（48・49）、底部が丸く厚手で深い（46・50）、口径11.2cm、器高1.7cmとこぶりで浅い（47）がある。前代のものと比べ、口縁部が外反するものは屈曲が鋭くなる。また、器面の調整方法はｅ手法が圧倒的に多く、僅かにｂ手法のもの（45）が見られる。

皿は杯の口縁部形態に対応し、外反しさらに端部が内弯する（52）、端部に面をもつ（53）、奈良時代的な（51）がある。いずれも、ｅ手法で調整されている。

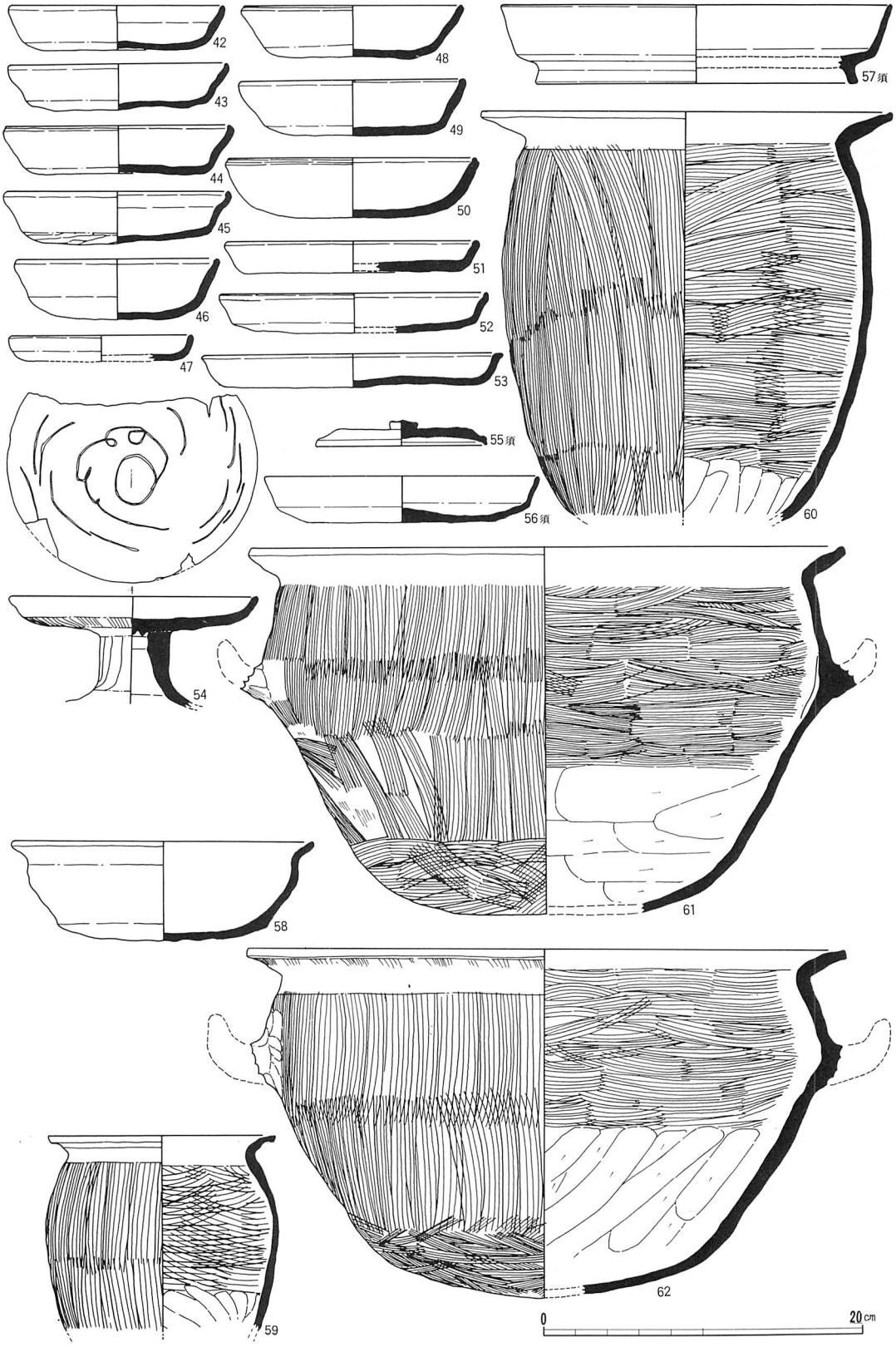
高杯（54）は面取りした短い脚をもち、杯部には螺施状暗文が見られる。

甕は（58～60）があるが、（58）は鍋に近い形態のもので外面には煤が付着している。

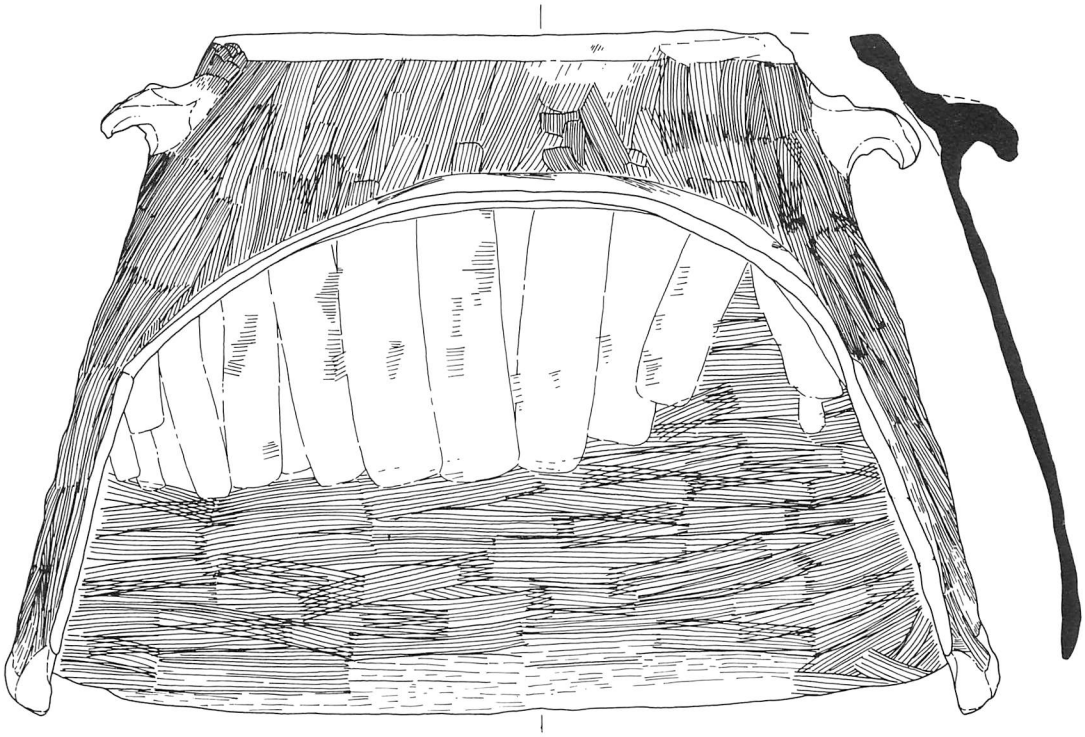
鍋は口径37cm前後、器高23cm前後の大型のもので（61・62）ともに体部外面は細かい縦ハケ

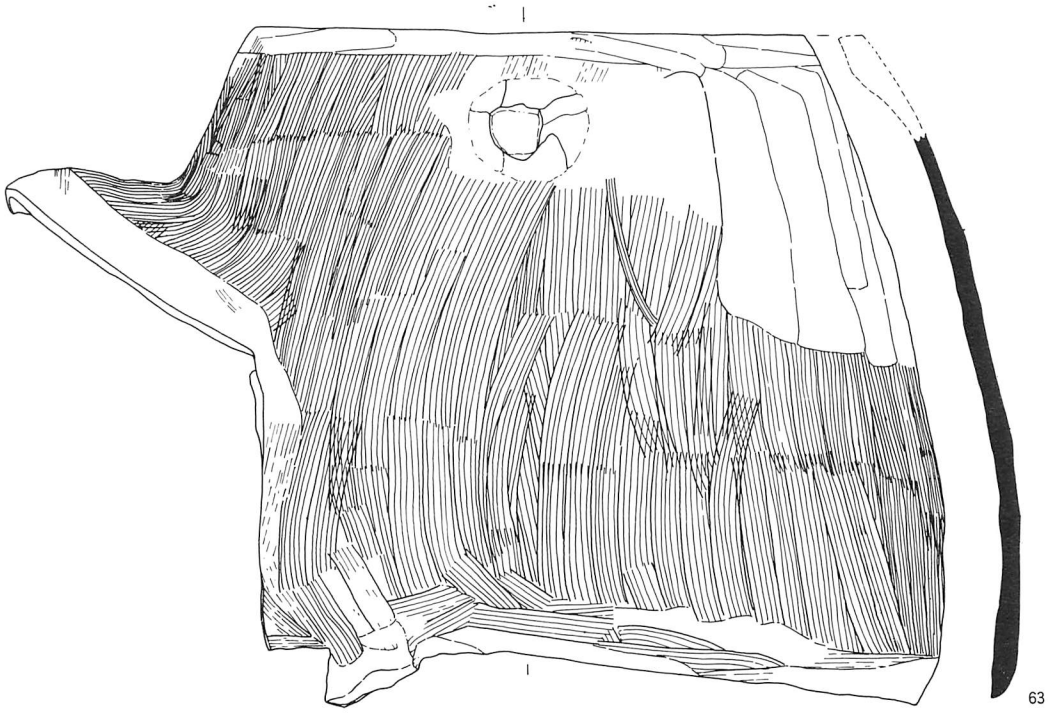


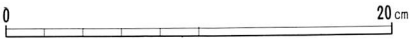
第４図　第86次出土遺物　ＳＫ6030；32～41



第５図　第86次出土遺物　ＳＫ6015；42～62







第６図　第86次出土遺物　ＳＫ6015；63

メ、底部もハケメ調整をする。内面は体部の上方を横方向のハケメ調整し、底にかけては縦方向のヘラケズリを施している。

竈（63）は器高35.9cmでほぼ完形のものである。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメの後、上半を縦方向にヘラケズリしている。

須恵器には蓋（55）、杯（56・57）がある。折戸10号窯式の時期のものである。

平安時代前Ⅰ期ではＳＫ6005・6060からまとまった遺物が出土している。

ＳＫ6005出土の遺物には土師器杯・皿・甕・鉢・竈・甑、須恵器杯・蓋・甕がある。杯には口縁部が外反する（64～69）、底径が小さく口縁部がまっすぐのびる（70～72）、口縁部が内弯気味に立ち上がり器高4.7cmと深い（73）がある。（64～69）は前代のものより口縁部の開きが外へ開くようになり（64・65）などは屈曲が大きくなる。器面の調整方法はすべてｅ手法に統一される。

皿（74）も外反するものであるが杯に対応して口縁部の開きは外へ開く。

甕（76）は口径16.4cmの小型の球形に近い甕である。

鉢（77・78）は体部の丸いものである。

黒色土器椀（75）は内面のみ黒い所謂、黒色土器Ａ類である。外面はヘラケズリの後、荒いヘラミガキを行っている。内面のヘラミガキは放射状に行われている。

須恵器には杯・蓋・甕があるが図示しえたのは甕（79）だけである。

ＳＫ6060出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・短頸壷、須恵器杯・蓋・甕・長頸壷、製塩土器がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐにのびるもの（80～89）が多く、口径により大中小に分かれる。口縁部が外反するもの（90～92）は少ない。（80～89）は口径が12.2～12.6cmで器高が2.9～3.3cmのもの（80～86）、口径が13.8cmで器高が3.5cmのもの（87）、口径が16.4cmで器高4.7cmと深いもの（88）、口径が16.6cmで器高が3.9cmのもの（89）に分かれる。

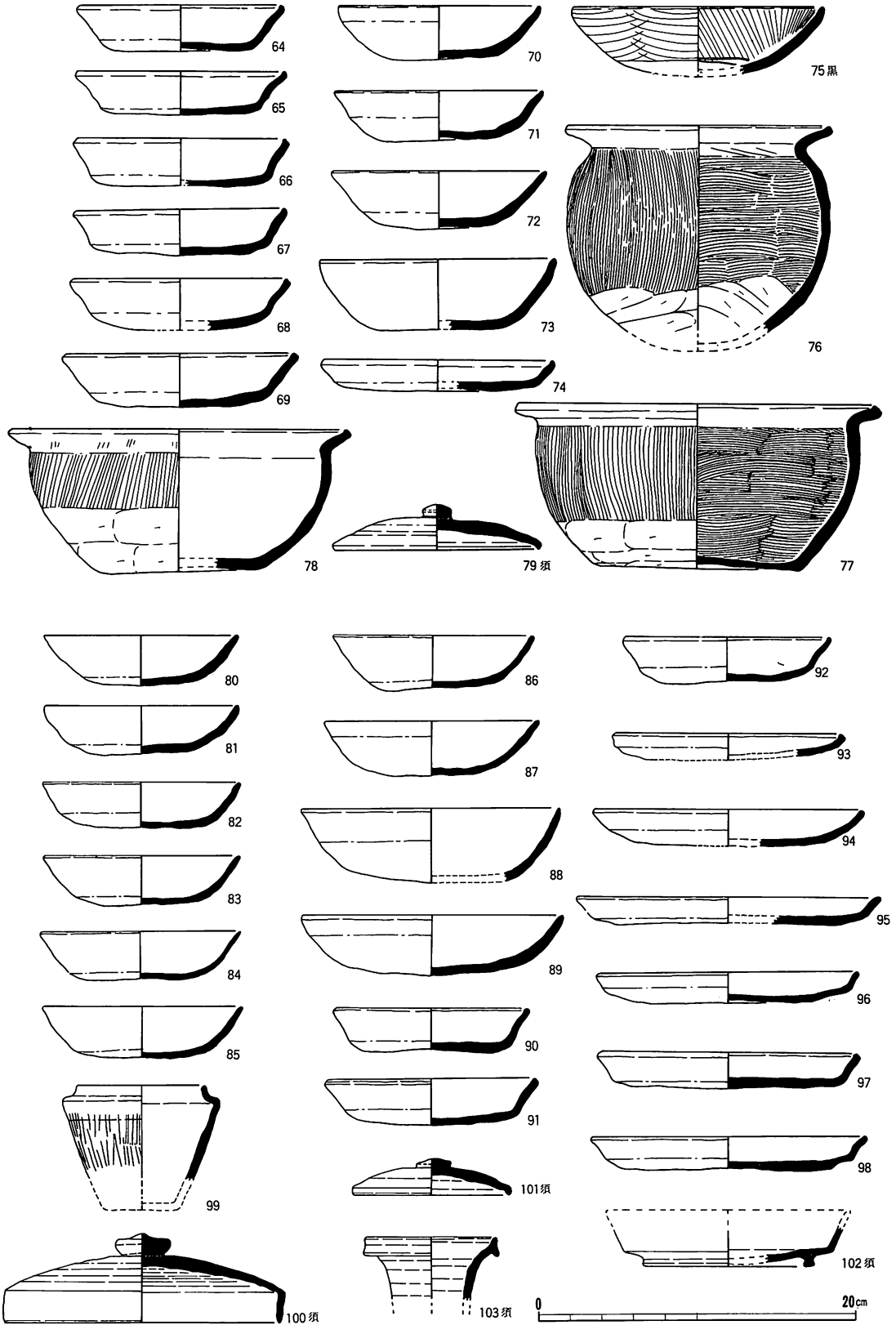
皿は断面弓状になるもの（93・94）が見られるようになる。口縁部が外反するものは、まっすぐのびるもの（95・96）、端部が内弯するもの（97）、底部と口縁部の境が屈曲するもの（98）に分かれる。器面の調整は杯・皿ともにｅ手法である。

短頸壷（94）は口径8.0cmで外面には粗いハケメが見られる。

須恵器には杯（102）、蓋（100・101）、長頸壷（103）がある。

ＳＫ6005とＳＫ6060の杯・皿を比べるとＳＫ6060出土の杯は口縁部がまっすぐのびるものが中心となり、しかも、薄手になっている。また、皿では断面弓状になるものが見られることなどからＳＫ6060の方が新しいと考えられる。

平安時代前Ⅱ期の古い時期ではＳＫ6045から、新しい時期ではＳＫ6071からまとまった遺物



第７図　第86次出土遺物　ＳＫ6005；64～79、ＳＫ6060；80～103

が出土している。

ＳＫ6045出土の遺物には土師器杯・皿・鉢・甕・竈、須恵器杯・蓋・甕がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐにのびるものが主体的になる。口径9.8～10.4cmで器高3.0cm前後のもの（104・105)、口径12.4～12.6cmで器高3.2cm前後のもの（106～108)、口径13.8cmで器高3.3cmのもの（109)、口径16.6cmで器高4.1cmのもの（110）に分かれ、前代のものと法量的には大差がなく、口径10cm前後の小型のものが新たに見られる。また、形態的にも古く、螺施状暗文をもつ（111・112）のような杯も僅かだがある。

皿は前代に一部見られた断面弓状になるものが主体的になる。口縁部がまっすぐのびる(113～117）のほか、底部が平坦で口縁部が内弯気味に立ち上がる（118)、まっすぐ外方に開く（119)、外反する（120）など古い形態のものも僅かに残る。(116・117）は口径が20cm前後の大型のものである。

須恵器には杯・蓋・甕があるが図示しえたのは甕（121）だけである。

ＳＫ6071出土の遺物には土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器蓋、灰釉陶器椀・段皿、緑釉陶器皿がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐのびるものであるが、口縁端部の形態によって外反するもの（122～126)、まっすぐなもの（127～133・138)、外反し端部に面をもつもの（134～136)、器高が5.1cmと深く椀に近いもの（137）がある。器面の調整方法はすべてｅ手法である。各形態とも口縁部のヨコナデの範囲が器高の３分の１のものと２分の１のものがありＳＫ6071出土の杯74個体中前者が31％、後者が69％ある。なお、外反し端部に面をもつものは形態として意図的なものか、ヨコナデの際の偶然によるものか判断し難いが、74個体中約８％に見られる。

皿（139～143）は杯の口縁部形態に対応する。（143）は器高が2.4cmと深く、口縁部が屈曲し外反するものである。杯と同様に口縁端部を外へ引き出すようにして面をもつものは49個体中約８％ある。鉢（144）は体部がやや直線的になる。

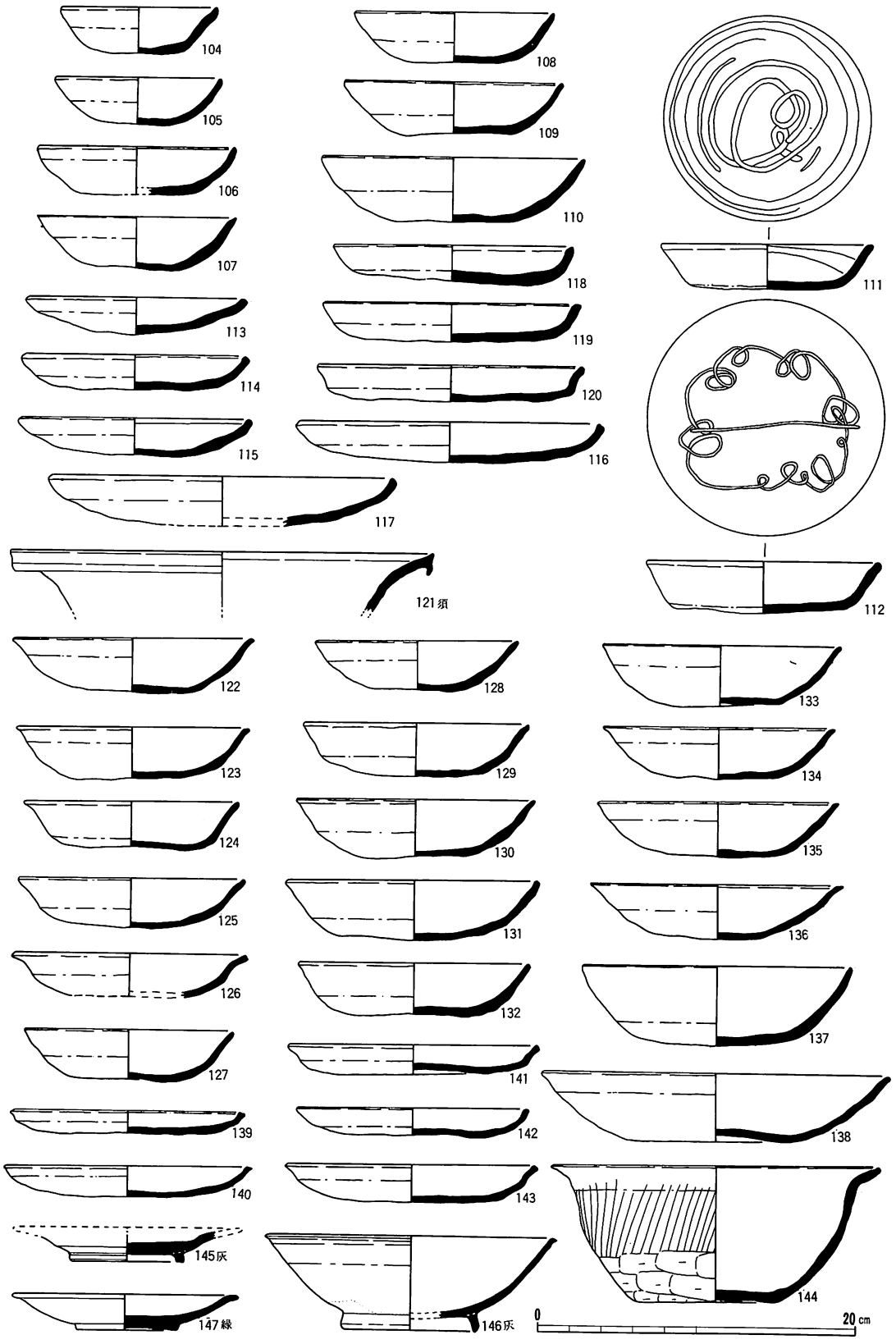
灰釉陶器には椀（146）・段皿（145）がある。いずれも黒笹90号窯式の時期のものである。

緑釉陶器皿（147）は京都産のものである。高台は平高台に削りだしている。

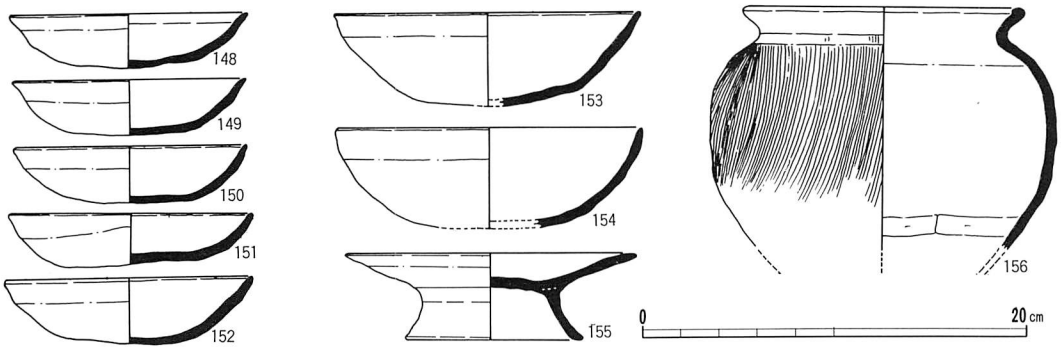
平安時代中期の遺物はＳＫ6039から土師器杯・皿・台付皿・甕が出土している。

土師器杯（148～154）は口縁部がまっすぐのびるもので、口縁部のヨコナデの範囲は３分の１と狭くなり、白っぽい色調のものが多い。(148～152）のように口径が12.0～12.8cmのものが主体的となり縮小化が進む。(155）は高台の付くものである。

甕（157）は口径14.0cmの小型で球形に近いものである。



第８図　第86次出土遺物　ＳＫ6045；104～121、ＳＫ6071；122～147



第９図　第86次出土遺物　ＳＫ6039；148～156

特殊な遺物には、墨書土器22点、ヘラ描き土器２点、緑釉陶器58点（うち印刻のあるもの１点）、円面硯５点、転用硯７点（うち朱の付着するもの２点）、鉄製品９点、瓦３点、砥石３点、尖頭器１点、フイゴの羽口５点、ミニチュア土器８点がある他、製塩土器が整理箱で２箱分ある。

墨書土器のうち判読できるものには「府」（161）・「二ヵ」（162）・水鳥らしい鳥の絵の墨書（183）－ＳＤ6050出土、「三」（158・159）－ＳＫ6015出土、「大炊」（157）－ＳＫ6013出土、「豊兆ヵ」（164）－ＳＫ6030出土、「官」（160）－ＳＫ6007出土、「周」（165）－ＳＫ6003出土、「本あるいは奉」（163）－包含層出土がある。これらの内、特に「大炊」の墨書は「炊部司」を実証する資料となる。

円面硯のうち（175）は海と陸の部分が約半分残存している。脚部には長方形の透かしがあったと思われ、その数は11と推定される。（176）は海と陸と脚の一部が残存しており、脚部には透かしと沈線が見られる。いずれも包含層から出土している。

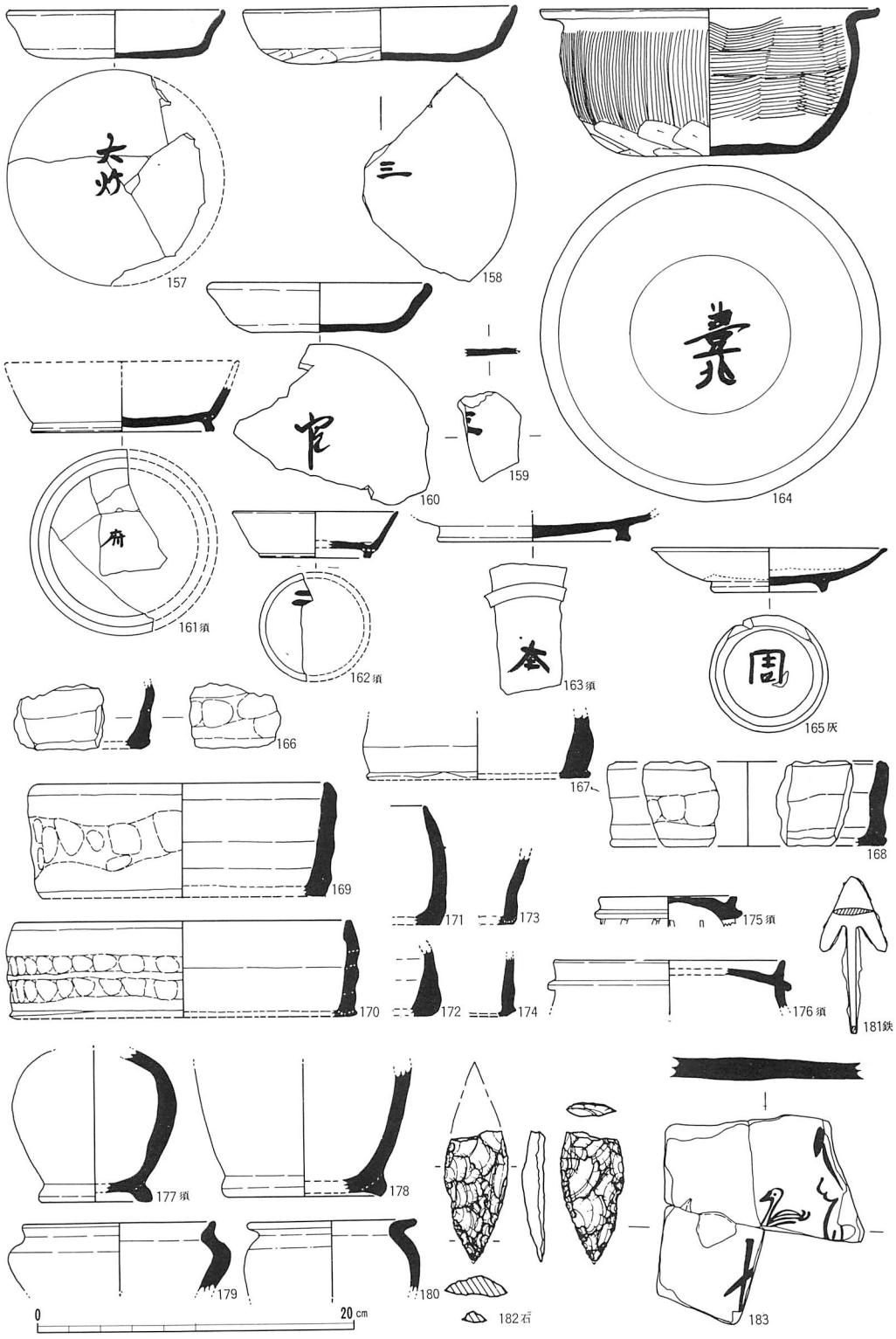
ミニチュア土器には、土師器壷（178）・短頸壷（179）・甕（180）・竈、須恵器壷（177）がある。（178）はＳＫ6013出土、（179）はＳＫ6045出土、（177・180）は包含層出土である。

製塩土器は整理箱で２箱分出土しているが、その中で平安時代前Ｉ期のＳＫ6060から出土しているものが過半数である。

奈良時代後期のＳＫ6030からは（174）が出土している。体部は粘土紐輪積みで体部と底部の接合方法は、底部端に体部をのせるものである。色調は黄褐色で胎土には１～２㎜の砂粒を含んでいる。時期的には８世紀第４四半世紀前半に属する。

平安時代初期のＳＫ6013からは（167）が出土している。成形手法は（174）と同じであるが、体部が外方へ開く。また、ユビオサエの痕が目立つ。色調は橙褐色で胎土には砂粒を含まず精良である。時期的には８世紀第４四半世紀後半から９世紀第１四半世紀前半である。

平安時代前Ｉ期のＳＫ6060からは（169～171）が出土している。土坑の北東隅でまとまって出土しているものである。（169）は口径18.2㎝、器高7.3㎝で体部は外反し口縁端部で最大径



第10図　第86次出土遺物　ＳＫ6003；165・167、SK6007；160、ＳＫ6008；168、ＳＫ6013；157・166・178、ＳＫ6015；158・159、ＳＫ6030；164・174・181、ＳＤ6050；161・162・183、ＳＫ6060；169～171、pit；182、包含層；163、175～177・179（177～180・182・183は１：２）

となる。色調は黄褐色で胎土には砂粒を殆ど含まず精良である。(170) は口径21.2cm、器高6.2cmで体部は僅かに傾斜し口縁端部は内弯する。体部の中央付近で最大径となる。色調は黄褐色で胎土には2～3mmの砂粒を多く含む。(171) は口径は不明だが器高は7.5cmである。体部は内弯するもので体部の中央付近で最大径になり、口縁端部は細くなる。色調は黄褐色で胎土は砂粒を殆ど含まない。成形手法は (174) と同じと思われ、 特に (170) は4段の粘土紐が輪積みされている。時期的には8世紀第1四半世紀後半から第2四半世紀である。

平安時代前Ⅱ期の新しい時期のＳＫ6003から (167)、ＳＫ6008から (166)、ＳＫ6048から (171・174) が出土している。(167) は底径が14.0cmで体部の下が厚く中央付近で 脹らみ、口縁端部で薄くなるものである。色調は橙褐色で胎土には2～5mm砂粒を含んでいる。粘土紐の接合が確認できないので板状の粘土で体部を作り、底部と接合したものであり、他の3点も同じである。(168) は口径16.6cm、器高5.4cmのもので体部は直立気味である。色調・胎土・成形手法は (167) と同じである。(172) は体部の下が厚く、口縁端部にかけて薄くなり、外面は内傾する。胎土は1～2mmの砂粒を少量含む。色調は乳褐色である。(173) は体部が外反し口縁端部で最大径となると思われる。色調は橙褐色で胎土には1～2mmの砂粒を多く含み、底部と体部の外面には籾穀痕がある。

鉄製品にはＳＫ6030から出土した鉄鏃 (181) の他に、釘、刀子等がある。

石製品には旧石器時代から縄文時代早創期に属すると思われる尖頭器 (182) がある。

（7）まとめ

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代初期の遺構・遺物に注目される成果があった。こられについて、昨年度実施した第83次調査、84-1次・84-2次調査の成果[①]もあわせて考えたい。

まず、奈良時代後期から平安時代初期の時期について再検討の結果、従来、奈良時代末期から平安時代初期と考えてきた土器の年代については長岡京の造営が始まる784年前後から、平安京遷都の794年までの所謂、長岡京の頃と考える。今回の調査ではＳＫ6030・6070出土の土器がこの時期にあたる。この時期に底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開くものや、口縁部が外反し、端部が内弯気味になる平安型の杯があらわれる。そして、この時期の器面の調整方法は、まだｂ手法が主体的であるがｅ手法のものが見られるようになる。これに対して、平安時代初期になるとｅ手法が主体的になり、底部と口縁部の境もより明瞭となり、口縁部の屈曲もより鋭くなる。また、底径が小さく長めの口縁部がまっすくのびる椀に近いものがこの時期から現れる。今回の調査ではＳＫ6015出土の土器がこの時期にあたる。このように今回の調査では奈良時代後期から平安時代初期にかけての斎宮の土師器の編年観については得るものがあった。また、後述の第88次調査では奈良時代中期の良好な一括資料を出土する土坑群を多数検出しており、斎宮の土師器編年の基礎資料を得ている。

このような年代観から、今回の調査地を含む通称中町裏と呼ぶ、史跡東部における奈良時代の遺構を検討した結果、中期の掘立柱建物が７棟、末期を含む後期の掘立柱建物が64棟あることが分かった。また、第84-1次調査で検出したＳＤ5870出土の遺物についても奈良時代のものが主体的であり一部は奈良時代中期の後半頃まで遡ると考えられるものもあることから、溝の掘削された時期は奈良時代後期まで遡ると考えたい。今回の調査で検出した区画溝（道路側溝）ＳＤ6002・6050もこの時期である。中町裏のこの時期の掘立柱建物の柱通りの方向は区画溝の方向と一致するＥ４°Ｎのものが多く、こういったことから、区画溝と道路によって基盤目状に区画された斎宮の造営の時期は奈良時代後期と考えられる。

昨年度の２次にわたる調査では、塀あるいは垣のような施設と考えられる溝を周囲に持つ掘立柱建物ＳＢ5780・5820とこれらの建物を取り囲む掘立柱塀による区画を確認し、この時期を平安時代初期と考えた。これは、溝および柱掘形から出土する遺物が殆どなく、区画溝と方向が一致することから区画溝の時期とあわせたためである。よって、この一郭の時期を奈良時代後期と考え直したい。

今回の調査では、奈良時代後期の掘立柱建物１、平安時代初期の掘立柱建物８を検出した。昨年度検出した建物を含めて、その変遷を考えたい。

まず、第83次調査ではＳＢ5780→ＳＢ5810、ＳＢ5780→ＳＢ5800、ＳＤ5832→ＳＢ5835という埋土の切り合い関係が認められる。第84-2次調査ではＳＡ5840→ＳＢ5920、第86次調査ではＳＢ6000→ＳＢ6040→ＳＢ6037、ＳＢ5920→ＳＢ6055、ＳＫ6015→ＳＢ6020→ＳＢ6021という切り合い関係が認められる。これらを建物の棟方向、柱通り、規模なども考慮して整理すると以下のようになる。（第11図参照）

Ⅰ期……周囲に溝をもつ建物の時期。

規模は４間×２間。Ｅ４°Ｎ、Ｎ４°Ｗの棟方向。

ＳＢ5780・5820・6000、ＳＡ5840、ＳＤ5832がある。

Ⅱ期……規模は５間×２間、４間×２間。Ｅ４°Ｎの棟方向。

ＳＢ5810・6020・6040がある。

Ⅲ期……並行して建つ建物群の時期

規模は５間×２間。Ｅ４°Ｎの棟方向。

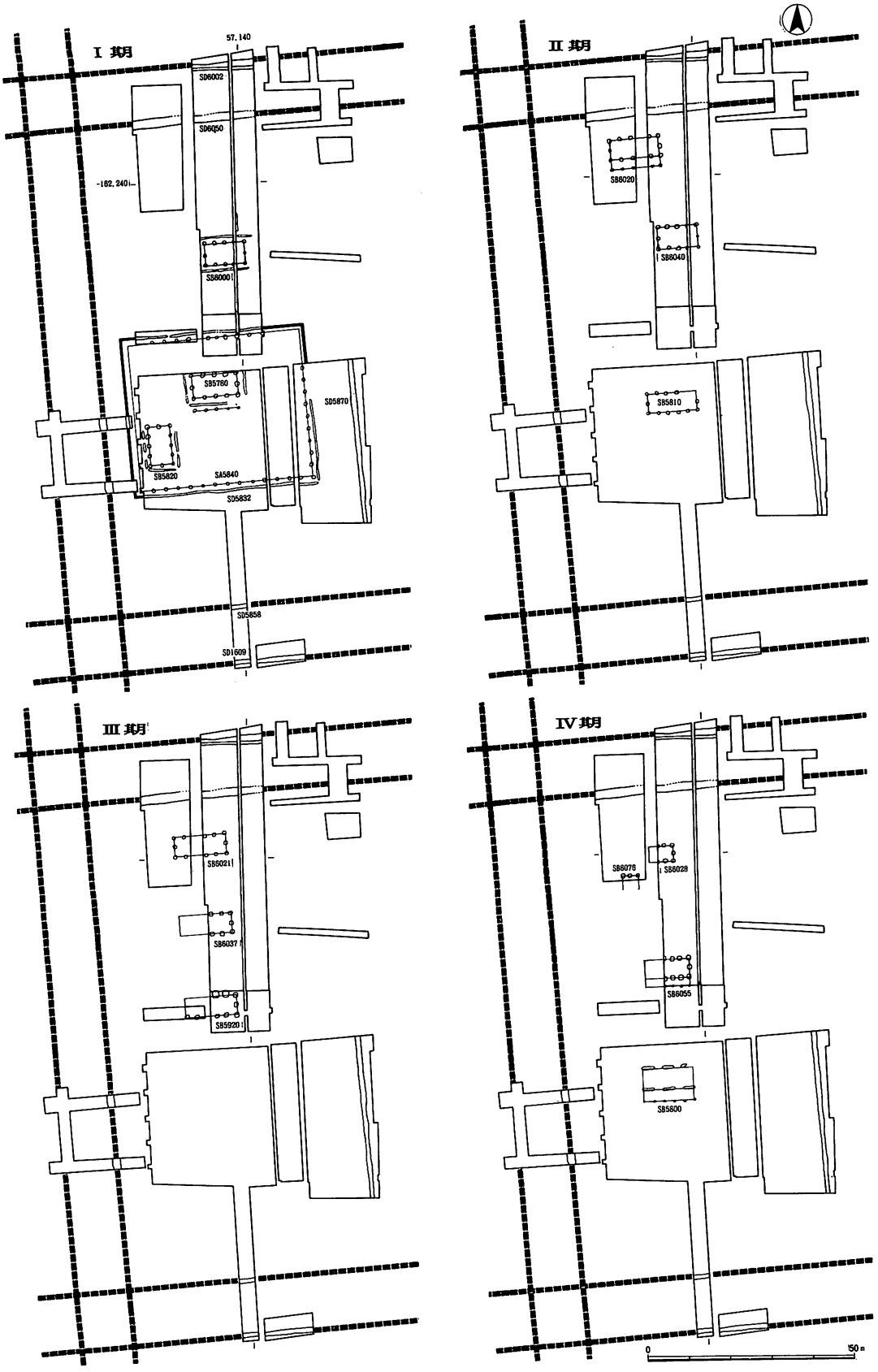
ＳＢ5920・6021・6037がある。

Ⅳ期……建物の方向が変わる時期。

規模は５間×２間、３間×２間。Ｅ３°Ｎ、Ｎ３°Ｗの棟方向

ＳＢ5800・6028・6055・6076がある。

以上のようにまとめられるが、ＳＢ6035については４間×２間の規模で棟方向はＮ０°でＩ期



第11図　奈良時代後期～平安時代初期建物変遷図（1：1500）

よりは新しいがどの時期になるか不明で他に同時期の建物はない。

さらに、周辺の他の区画もあわせて検討してみると、E1°N、E2°Nの棟方向でまとまる建物の時期がある。これらの建物の時期については、直接今回の建物の時期との前後関係は不明であり、奈良時代後期から平安時代初期にかけて6時期くらいの建物変遷があると推定される。

さて、この基盤目状の方形区画の造営の初現はいつ頃であろうか。そのひとつの考えとしては次のものがある。[2]

『続日本紀』の771（宝亀2）年11月18日の条には「鍛治正従五位下氣太王を遣して斎宮を造らしむ」とある。これが、造斎宮使の初見であり、また、遺構の分布、時期からいってもこの頃に造営されたと考えられる。光仁天皇が770年に即位し、称徳天皇・道鏡による仏教政治を排除しつつある時代であり、斎王の卜定さえなかった称徳天皇の時代から心機一転、斎宮寮を造営し直した可能性は十分考えられる。

今回の調査では少なくとも4時期の建物の変遷が考えられるが、このような建て替えは、斎王の交替、災害による倒壊、火事による炎焼、老朽化等が考えられる。

現在の斎宮の土器の編年観では平安時代初期を815年頃までと考えており770年頃から815年頃の間には酒人・朝原・布勢・大原・仁子の各内親王5人、光仁朝の浄庭女王を含めると6人の斎王がいたことになる。斎王が交替するたびに確実に建て替えが行われたとすれば、これだけで5ないし6時期ある。これらと発掘調査による建物の変遷がどう対応するかは区画全体を検討して考えていかなければならない問題である。ちなみに、今回の調査では奈良時代の酒人内親王から朝原内親王までの時期の建物はⅠ期だけで平安時代に入る布勢内親王以後の建物はⅡ期からⅣ期の3時期が考えられる。なお、この間『続日本紀』には775（宝亀6）年8月22日の条に「使を遣わして伊勢の斎宮を修理せしむ」、785（延暦4）年4月23日の条には「従五位上紀朝臣作良を造斎宮の長官となす」とあり、修理ないしは建て替えが行われていることは確実である。

今回の調査ではこの区画の北に走る東西道路を検出した。道路の幅は内々で約11mである。第83次調査ではこの区画の南に走る東西道路を検出しており、その道路の幅は内々で約12mであったことと比べると今回の道路のほうがやや狭い。これまでの調査で確認されている道路幅も概ね内々で約12mのものが多い。これは、斎宮の造営の基準尺と考えられる1尺＝29.6cmでほぼ40尺にあたる。なお、第83次調査で検出した東西道路の北側溝SD5858と今回の調査で検出した東西道路の南側溝SD6050の距離は内々で118.6mあり、ほぼ400尺にあたる。また、今回の調査で検出したⅠ期の遺構の配置は第12図のように規則的であることから、Ⅰ期の遺構は史跡東部での最初の斎宮造営によるものであり、それは、氣太王による斎宮造営と考えたい。

遺物については、墨書土器に注目される資料がある。

ＳＫ6013出土の土師器杯の底部外面に見られる「大炊」の墨書は炊部司を実証する遺物であるが、これまで炊部司に関連するものとしては第69次調査[③]出土の土師器杯に「炊」と墨書したものがあり、今回で２点目である。なお、第69次調査は今回の調査地より約400m東にあたる。ＳＤ6050からは鳥を描いた土師器が出土している。首の長い水鳥らしく斎宮跡では初めての出土である。

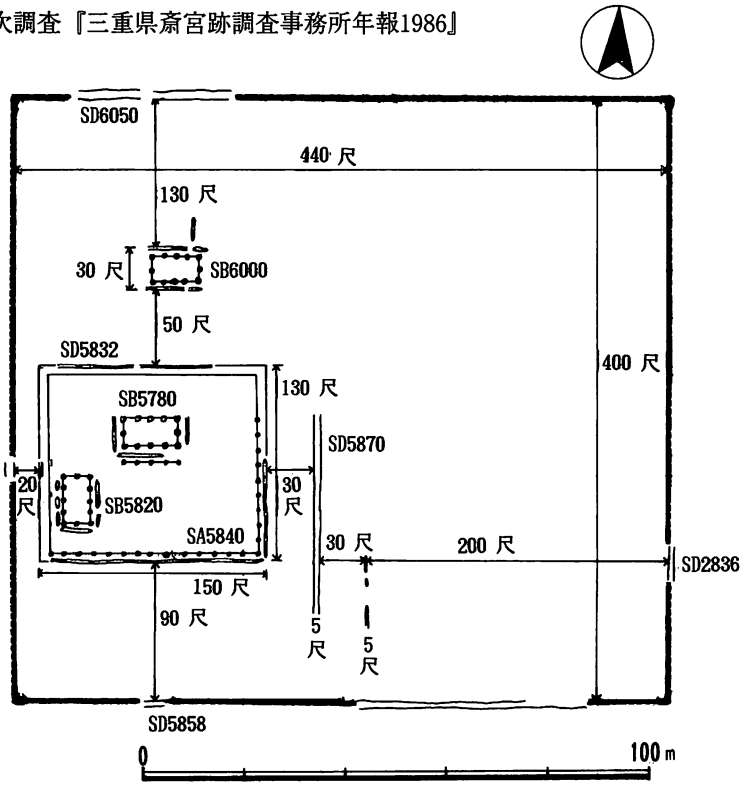
平安時代前Ｉ期の土坑ＳＫ6060からは整理箱１箱分の製塩土器が出土している。今回の調査では奈良時代後期の土坑ＳＫ6030からも製塩土器が出土しており、斎宮における出土例はこの時期までは遡れる。斎宮において製塩土器の出土する遺構、時期、出土量等の統計的な調査はしていないが、史跡の東部地区に多く見られ、前Ⅱ期の土坑からまとまって出土する例が多いようである。

〔注〕

① 第83・84-1・84-2次調査『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館1990

② 田阪　仁・泉　雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から－史跡東部の区画造営プランをめぐって－」『古代文化』第43巻第４号1991

③ 第69次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1986』



第12図　第Ｉ期の遺構配置図（1：1500）

Ⅲ　第87次調査

6ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ（塚山地区）

第87次調査は７月17日から史跡西部で字斎宮塚山3351番地他で実施した。現況は畑地である。過去の調査結果から区画溝の北西隅から延びる鎌倉時代の溝が当調査地付近で南側へ曲がるとされていたので、その事実を確認するためと、また、調査地の南側を走る古道沿いには、奈良時代、鎌倉時代中心の遺構が多く確認されていたのでその実態を再度確認するために当地が選ばれた。

周辺では、すぐ東側で第82次調査（平成元年度）、南東では第49次調査（昭和58年度）が、西側で、第32次調査（昭和55年度）などが実施され、調査地内で第8-7次トレンチ調査（昭和49年度）及び第8-5次トレンチ調査が実施されている。第82次調査では、奈良時代を中心とする掘立柱建物が14棟検出され、第49次調査では、奈良時代、鎌倉時代の掘立柱建物６棟と溝が検出され、この周辺が奈良時代及び鎌倉時代の斎宮を考えるうえで重要な地域であることが判明している。

調査区は、南北52ｍ、東西35ｍを設定した。調査面積は、約1500㎡である。なお、今回中央に畦を挟むため調査区は北調査区と南調査区に分かれる。遺構は、包含層（黒褐色土）直下の地山面で検出した。検出した主な遺構は、奈良時代、鎌倉時代を中心としたもので、奈良時代の掘立柱建物12、竪穴住居11、土坑10、平安時代の掘立柱建物８、土坑７、鎌倉時代の掘立柱建物11、土坑24、溝４、井戸３、室町時代の土坑13、溝10、井戸１があげられる。

(1)　奈良時代前期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物４、竪穴住居11、土坑９がある。

掘立柱建物ＳＢ6090・6091は北調査区の北端に位置する。ＳＢ6090は、６間×３間の大型の東西棟で、柱掘形は一辺0.5ｍ、深さ0.5ｍである。過去斎宮において奈良時代の掘立柱建物は、220棟検出されているが、６間×３間の規模を持つ建物の検出は初めてである。この建物からは、極少量の土師器片しか出土しなかったが、奈良時代前期の竪穴住居ＳＢ6098との埋土の切り合いにより竪穴住居より古いことを確認した。

掘立柱建物ＳＢ6091は、４間×２間の東西棟である。ＳＢ6090とほぼ同位置で検出したので、立て替えかと考えたが、埋土の切り合い関係がはっきりしなかったことと、出土した遺物が少量であったため不明である。しかし、柱掘形の埋土が同じで、しかも柱通りの方向が同じ向きを示すので、それほど時期差はないと思われる。

掘立柱建物ＳＢ6135は、北調査区の東部で検出した４間×２間の南北棟である。柱通りは、

N13°Wで、ＳＢ6090・6091と棟方向が直行する建物である。柱掘形は、一辺0.5ｍ、深さ0.5ｍである。埋土の切り合い関係によりＳＢ6135→ＳＢ6105と確認できた。

掘立柱建物ＳＢ6143は、南北方向に４間分検出したが、規模は調査区外のため不明である。

土坑ＳＫ6107・6110は、調査区の北調査区の中央に位置する。

ＳＫ6107は、長径2.9ｍ、短径1.6ｍ、深さ0.3ｍの不整楕円形を呈す。北辺を室町時代 前期の溝ＳＤ6108に削平される。遺物は、土師器杯・皿・甕等が整理箱に約１箱出土した。

竪穴住居ＳＢ6098・6099・6100は、北調査区北部中央に位置する。埋土の切り合い関係によりＳＢ6090→ＳＢ6098→ＳＫ6171である。ＳＢ6098・6099はともに長軸方向はＥ７°Ｓである。

		遺構の種別			
		ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＥ
奈良時代	前期	6090・6091・6098 6099・6105・6121 6125・6130・6135 6143・6146・6168 161	6107・6110・6113・6117 6118・6128・6129・6133 6171		
	中期	6123・6124	6137		
	不明	6092・6109・6112 6116・6144・6158 6201			
平安時代	後Ⅱ期	6131・6155・6157 6159・6160	6132		
	末期	6106・6111・6150	6103・6161・6163・6164 6175・6192		
鎌倉時代	前期	6170・6174	6115・6140・6149・6172 6173・6176・6177・164		6189 6190
	中期	6119・6120	6093・6104・6122・6126 6148・6182・6197		
	後期	6134・6162・6165 6180・6185・6186 6187	6094・6114・6136・6138 6151・6169・6181・6200 162	207	
	不明		6127・6147・6139・6102	6097・6141・6195	6145
室町時代			6095・6152・6153・6154 6156・6167・6178・6179 6183・6184・6196・6198 165	6096・6142・6108 6166・6193・6194 6199・6188・206	6101

第３表　第87次調査　時期別遺構分類表

第13図　第87次遺構実測図（１：200）

竪穴住居ＳＢ6098は、規模が4.0ｍ×3.2ｍで東壁にカマドをもつ。これまでの調査によってこの時期の竪穴住居は、北壁か東壁にカマドがあるのが一般的で、今回もそれにあてはまる。カマドの南半分はＳＢ6099によって削平される。床面は固くひき締まっていた。遺物は土師器杯・甕等が整理箱にして約１箱出土した。

竪穴住居ＳＢ6099は、4.0ｍ×3.5ｍの規模で東壁にカマドがつく。南西隅を室町時代の井戸ＳＥ6101によって削平されていた。また、カマドのすぐ東側で多量の炭と煙道らしき土坑を検出した。遺物は、カマド付近で土師器甕・杯、須恵器杯等を整理箱で約１箱分が出土した。

竪穴住居ＳＢ6100は、隅丸方形で2.9ｍ×2.6ｍの規模である。今回確認した竪穴住居の中では一番小形である。カマドは北壁で検出され、中央部から底部を欠く土師器甕が逆さまの状態で出土した。支柱石の代用と考えられる。竪穴住居の長軸方向はＮ14°Ｅですぐ西側で確認したＳＢ6098・6099のカマド位置とは異なる。遺物は、土師器杯・甕等を整理箱にして約１箱出土した。ＳＢ6121・6130は、北調査区中央部北端に位置する。ＳＢ6121は、奈良時代前期の土坑ＳＫ6118によって北西コーナーを削平される。カマドは北壁の中央で検出した。そのカマドの内部から焼土に混じって甕片が出土したが、明確なカマドの形状は確認できなかった。住居の規模は3.1ｍ×2.8ｍで隅丸方形を呈す。

竪穴住居ＳＢ6130は、5.1ｍ×3.9ｍで、今回確認した竪穴住居の中では最大級のものである。カマドは北壁で検出し、カマドの内部から４個体の甕が焼土と粘土に混じって出土した。このＳＢ6130は平安時代後Ⅱ期の土坑ＳＫ6132によって削平されていたが、床面まで掘り下げた段階で北東隅コーナーを確認することができた。周溝及び柱穴は確認できなかった。

竪穴住居ＳＢ161・6105・6125は、北調査区北東部中央に位置する。

竪穴住居ＳＢ161は、第8-4次トレンチ調査によって平安時代の土坑とされていたが、今回の調査によって奈良時代前期の竪穴住居に修正した。規模は3.3ｍ×3.3ｍ。東側でＳＢ6105と切り合い、新旧関係はＳＢ161→ＳＢ6105である。カマドは東壁で確認した。土師器甕が焚口付近の壁面に張り付いており、カマドの壁の補強材として使用されたと思われる。

竪穴住居ＳＢ6105は、東壁と南壁を鎌倉時代の土坑群によって削平されていたが、カマドの跡は、辛うじてそれらの土坑群から破壊を免れ、東壁で検出した。遺物はカマド付近から多く出土しており、土師器杯・いなか風椀・台付皿・長胴甕等が整理箱にして約２箱出土した。

竪穴住居ＳＢ6125は、北側を東西に走る室町時代の溝ＳＤ6108と鎌倉時代中期の土坑ＳＫ6126によって削平される。規模は4.3ｍ×4.0ｍで隅丸方形を呈す。カマドは北壁で検出され、その両脇で貯蔵穴らしきものを検出した。遺物は、ほとんどがカマド付近からの出土によるもので、土師器杯・いなか風椀・皿・長胴甕、須恵器杯・蓋等が整理箱にして約２箱出土した。

竪穴住居ＳＢ6168は、南調査区北部中央で、ＳＢ6146は、南調査区南西隅で検出されたが、両

方とも新しい遺構に破壊され、調査区外へ延びるため規模は不明である。

土坑ＳＫ6110は、長径2.7ｍ、短径2.6ｍ、深さ0.4ｍの隅丸方形を呈す。中央部を室町時代前期の溝ＳＤ6108に削平される。規模から考えて、当初、竪穴住居かと考えたが、カマドを確認できなかったことと、床面積が小さいことも考え合わせて土坑と判断した。遺物は土師器杯・いなか風椀・甕、須恵器杯等が整理箱にして約２箱出土した。

土坑ＳＫ6117・6118は、北調査区の南方に位置する。埋土の切り合い関係によりＳＫ6117→ＳＫ6118である。

ＳＫ6117は、長径4.4ｍ、短径3.4ｍ、深さ0.1ｍの浅くて大きな土坑で円形を呈す。西側部分を鎌倉時代の溝ＳＤ6097と室町時代の溝ＳＤ6096によって削平される。遺物は、土師器杯・甕・土錘が、上面の包含層で常滑産の壷、山茶椀等が出土している。

ＳＫ6118は、ＳＫ6117と折り重なるように検出された土坑で、長径4.4ｍ、短径4.2ｍ、深さ0.1ｍの規模である。遺物は、土師器杯・甕片等が出土した。

土坑ＳＫ6128・6129・6133は北調査区南方中央に位置する。ＳＫ6128は、長径2.9ｍ、短径1.6ｍ、深さ0.3ｍ。ＳＫ6129は、長径4.0ｍ、短径2.2ｍ、深さ0.3ｍである。ＳＫ6128は、南半分がＳＢ6130と重複し、埋土の切り合いよりＳＫ6128→ＳＢ6130の順を確認した。埋土は黒褐色土で、遺物は土師器杯・皿・甕等が整理箱に約１箱出土した。

ＳＫ6133は、長径3.2ｍ、短径1.8ｍ、深さ0.2ｍで、西側部分を平安時代末期の土坑ＳＫ6132に削平される。北側部分は一段深くなっている。

（２）奈良時代中期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物２、土坑１がある。

掘立柱建物ＳＢ6123・6124は、北調査区南部中央に位置する。ＳＢ6123は、南北棟であるが、南側の約３分の１が調査区の畦の下のため、桁行４間以上、梁行２間を確認するにとどまった。竪穴住居ＳＢ6130とは埋土の切り合いによりＳＢ6130→ＳＢ6123である。

ＳＢ6124は、３間×２間の東西棟で、桁行8.0ｍ、梁行4.0ｍの規模をもつ。柱掘形は、一辺0.3ｍ、深さ0.3ｍである。

土坑ＳＫ6137は、北調査区西部中央に位置し、竪穴住居ＳＢ6105内で検出した。規模は長径0.8ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.4ｍ。奈良時代前期の掘立柱建物ＳＢ6135との埋土の切り合い関係によりＳＢ6135→ＳＫ6137である。遺物は少量の土師器片を出土した。

（３）その他の奈良時代の遺構

奈良時代で時期細分できなかったものに掘立柱建物ＳＢ6092・6109・6112・6116・6158・6201、竪穴住居ＳＢ6144がある。

ＳＢ6092は、北調査区北部西方で、ＳＢ6201は、東方で、ＳＢ6109・6112・6116は、北調査

区東端で、ＳＢ6158は、南調査区中央付近に、東端にＳＢ6144が位置する。

ＳＢ6092は、桁行、梁行4.3ｍ×4.0ｍの総柱建物で、埋土の切り合いから竪穴住居ＳＢ6098よりは新しいと考えられる。

ＳＢ6109・6112は、ともに南北４間分を検出したのみで規模は調査区外のため不明である。

ＳＢ6116は、大型の南北棟で、梁行は３間と確認したが、桁行は調査区外のため規模は不明。

ＳＢ6158は、南調査区で唯一の奈良時代の掘立柱建物で５間×２間の東西棟である。柱通りはＥ11°Ｓで柱掘形一辺0.6ｍ、深さは0.3ｍである。

ＳＢ6201は、北半分が調査区外のため規模は不明。

ＳＢ6144は、西側半分が、調査区外のため規模は不明である。

（４）平安時代後Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物ＳＢ6131・6155・6157・6159・6160がある。

ＳＢ6131は、北調査区南部中央に位置する。このＳＢ6131は、南東隅に土坑を持つ４間×３間の東西棟である。柱穴内には、こぶし大の偏平な川原石が見られた。柱掘形は、一辺0.4ｍで、深さは、0.1～0.3ｍとばらつきがみられた。これまでの調査で、計10棟の南東隅に土坑をもつ掘立柱建物を確認しているが、平安時代後Ⅱ期のものは初めてで、最も古い例である。

ＳＢ6155・6157・6159・6160は、南調査区北部西方にまとまって位置する。４棟とも柱掘形の切り合い関係がないために、同時期での前後関係は不明である。

ＳＢ6155は、４間×２間の東西棟である。柱通りはＥ14°Ｓを示す。この調査区のすぐ南側を走る鎌倉時代の古道は、東に対して約13°～14°南に傾いているので、道路の向きを意識して建てたと考えられる。

ＳＢ6157は、西側半分の柱列を室町時代の溝ＳＤ6142によって削平されているので規模は不明である。

ＳＢ6159は、３間×２間の南北棟、ＳＢ6160は、３間×２間の東西棟である。桁行、梁行は、ＳＢ6159が、6.3ｍ×4.4ｍ、ＳＢ6160が、6.0ｍ×4.1ｍである。柱通りの方向は、ＳＢ6159が、Ｎ13°Ｅ、ＳＢ6160がＥ12°Ｓで、この両棟は、道路を意識して建てたと考えられる。

（５）平安時代末期の遺構

この時期の遺構として掘立柱建物3 、土坑7がある。

掘立柱建物ＳＢ6106は、北調査区のほぼ中央で検出された３間×２間の東西棟である。西側妻柱は、鎌倉時代後期の土坑ＳＫ6126によって削平されていて検出することは出来なかった。柱掘形は、一辺0.4～0.5ｍ、深さ0.3ｍ。柱通りはＥ7°Ｓ。掘立柱建物ＳＢ6131と埋土の切り合い関係によりＳＢ6131→ＳＢ6106である。

掘立柱建物ＳＢ6150は、南調査区北西方向で検出された４間×２間の東西棟である。鎌倉時

代前期の土坑ＳＫ6149と埋土の切り合い関係により、ＳＫ6149→ＳＢ6150と確認できた。

土坑ＳＫ6103は、北調査区北部中央で検出され、規模は、長径1.6ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.3ｍ。埋土は暗褐色土である。遺物は、土師器杯、山茶碗・山皿等が整理箱にして約１箱出土した。

土坑ＳＫ6132は、掘立柱建物ＳＢ6132に伴う南東隅土坑である。掘形は、逆台形状を呈し、規模は長径3.8ｍ、短径1.8ｍ、深さ0.3ｍである。この土坑はＳＤ6132の２間×１間の東柱内におさまる。遺物は土師器皿・鍋・高杯、山茶椀が出土した。

土坑ＳＫ6161・6163・6164は、南調査区北部西方に位置する。

ＳＫ6161は、長径4.4ｍ、短径2.2ｍ、深さ0.3ｍで、楕円形を呈す。遺物は土師器杯・皿・鍋、山皿等が整理箱にして約１箱出土した。

ＳＫ6163は、長径3.9ｍ、短径2.4ｍ、深さ0.2ｍの比較的大きな土坑である。形状は、隅丸方形を呈し、掘形は逆台形状である。掘立柱建物ＳＢ6158、6159との埋土の切り合い関係によりＳＢ6158→ＳＢ6159→ＳＫ6163である。遺物は、土師器鍋・小皿・甕、山茶椀・山皿等が整理箱にして約１箱出土した。

ＳＫ6164は、長径0.7ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.3ｍの規模の小型の土坑である。遺物は、土師器甕片、山茶椀片が出土している。

土坑ＳＫ6175は、南調査区のほぼ中央に位置し、長径1.8ｍ、短径1.2ｍの土坑で埋土は灰褐色土である。この土坑の中央部で、埋土の切り合い関係により鎌倉時代前期の掘立柱建物ＳＢ6174の柱穴を確認できた。遺物は、土師器杯・皿・甕・鍋、山茶椀が出土した。

土坑ＳＫ6192は、南調査区東部中央に位置する。規模は長径3.6ｍ、短径2.2ｍ、深さ0.1ｍの浅くて大きい楕円形の土坑である。遺物は、土師器杯・甕・鍋・高杯、山茶椀が出土している。

（６）鎌倉時代前期の遺構

この時期の遺構は、掘立柱建物２、土坑８、井戸２がある。

掘立柱建物ＳＢ6170・6174は南調査区北部中央に位置する。ＳＢ6170は、身舎が3 間×2 間の四面廂の建物で、鎌倉時代前期の四面廂は、今回の検出例が初例である。柱掘形内には、偏平な川原石を伴う。このＳＢ6170とほぼ同じ位置でＳＢ6174を検出した。埋土の切り合いからＳＢ6170→ＳＢ6174である。ＳＢ6170の建て替えと考えられる。規模は4 間×4 間で、ＳＢ6170と同じように柱穴内に偏平な川原石を伴う。

土坑ＳＫ6140・6149は南調査区北部西方に位置する。

ＳＫ6140は長径3.2ｍ、短径0.2～0.5ｍの不整楕円形を呈する。検出時には、一つの土坑と考えていたが、底まで掘り下げると二つの土坑であった。同時期に重複して掘られたものであろう。この土坑からは、遺構検出の段階から土器が多量に出土している。土師器杯・鍋・甕・羽釜、山茶椀・山皿、白磁等が整理箱にして13箱出土した。

ＳＫ6149は、長径3.4ｍ、短径2.9ｍで、隅丸方形を呈す。遺物は、土師器杯・甕・鍋・羽釜、山茶椀が整理箱にして約１箱出土した。

土坑ＳＫ6172・6173・6176・6177は、南調査区東部中央に位置する。

ＳＫ6172は長径0.8ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.3ｍ、ＳＫ6176は長径1.8ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＫ6177は、長径1.4ｍ、短径1.0ｍ、深さ0.1ｍである。遺物は、ＳＫ6172が、土師器杯・皿を、ＳＫ6176・6177が土師器杯・皿、山茶椀を出土している。

北調査区南部東方に位置するＳＫ164は、昭和49年度の第8-4次トレンチ調査で、確認されていた土坑である。今回の調査によって長径5.6ｍ、短径3.9ｍ、深さ0.3ｍの規模であることが判明した。出土した遺物は、土師器杯・皿・高杯・鉢・羽釜、山茶椀・山皿、水注、砥石、青磁、白磁が整理箱にして約２箱出土した。

井戸ＳＥ6189・6190は、南調査区南端中央に位置し、ＳＥ6189が長径1.1ｍ×1.0ｍの円形を呈し、ＳＥ6190は長径2.0ｍ×短径1.6ｍの楕円形を呈する。ＳＥ6189・6190はともに1.0ｍ掘り下げた所で、出土する遺物量も少なかったことと、安全性を考慮して未完掘のままである。

（７）鎌倉時代中期の遺構

この時期の遺構は、掘立柱建物２、土坑７がある。

掘立柱建物ＳＢ6119、6120は南調査区南端に位置する。ともに柱穴内に偏平な川原石を伴う総柱建物である。

ＳＢ6119は、桁行8.1ｍ、梁行5.8ｍの東西棟で柱掘形も一辺0.4ｍ前後、深さ0.2ｍと小さい。桁行柱間には少しばらつきがある。

ＳＢ6120は、南東隅土坑ＳＫ6122を伴う桁行6.3ｍ、梁行4.7ｍの３間×３間の東西棟建物である。これまで確認された南東隅に土坑を伴うもので最大級のものは、昭和62年度の第68次調査のＳＢ4430である。規模は６間×６間、桁行、梁行12.6ｍ×10.7ｍである。単純に今回確認したＳＢ6120とＳＢ4430の床面積を比較すると前者が29.6㎡、後者が135㎡である。

ＳＫ6093は、北調査区北部西方で確認された。遺物は、少量の土師器杯・鍋片を出土した。

ＳＫ6104は、北調査区東方に位置し、長径2.2ｍ×短径1.0ｍ、深さ0.1ｍで隅丸方形を呈し、南部を室町時代の溝ＳＤ6108に削平される。

ＳＫ6126は、奈良時代前期の竪穴住居ＳＢ6125と切り合う不整楕円形の土坑で、長径1.5ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.3ｍである。遺物は、土師器杯・甕・鍋、渥美産壷、山茶椀が出土した。

ＳＫ6148は、南調査区北西部に位置し、鎌倉時代前期の土坑ＳＫ6149と切り合うＬ字形の土坑である。規模は、長径1.6ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.2ｍである。

ＳＫ6182は、南調査区中央部南端に位置し、長径2.6ｍ、短径2.2ｍの隅丸方形の土坑で少量の土師器片を出土した。

ＳＫ6197は、南調査区西方に位置し、長径2.6ｍ、短径2.4ｍ、深さ0.2ｍの隅丸方形の土坑で少量の土師器片を出土した。

（８）鎌倉時代後期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物７、土坑８、溝１がある。

掘立柱建物ＳＢ6180・6185・6186・6187は、南調査区中央部東方に、まとまって位置する。

ＳＢ6180は、３間×３間の総柱の建物である。柱穴内部に偏平な川原石を伴う。大きさを床面積で表現すると29.6㎡、約９坪で、これまで斎宮跡で確認された鎌倉時代の総柱建物の床面積の平均値が約40㎡であるので、少し規模の小さい建物といえる。前述以外の総柱建物の床面積は、平安時代後Ⅱ期のＳＢ6131が52㎡、鎌倉中期のＳＢ6119が47㎡、ＳＢ6120が29㎡である。

ＳＢ6185は、４間×２間の東西棟、ＳＢ6186・6187は、共に３間×２間の南北棟である。３棟とも柱掘形が径0.3ｍ前後と小さい。

ＳＢ6165は、南調査区南西部に位置する南東隅に土坑を伴う5 間×5 間の総柱建物である。柱穴内に偏平な楕円形の川原石を伴う。前述の床面積で大きさを表現すると71㎡で、今回の確認した総柱建物の中では一番大きい。なお、この建物に伴うＳＫ6181からは多量の焼土、炭、スラグ、釘、砥石が出土しており、工房を伴う建物であった可能性も考えられる。

土坑にはＳＫ6094・6114・6136・6138・6151・6169・6181・6200・162がある。なかでも第8-4次調査で確認されていたＳＫ162は、今回の調査によって規模が長径5.8ｍ、短径5.2ｍ、深さ0.1ｍの大きさであることを確認した。遺物は土師器杯・鍋・甕、須恵器蓋（混入遺物）を出土した。

溝ＳＤ207は南北調査区の西端部を南北に走る大溝である。ＳＤ207は昭和49年度第8-5次調査で確認されている幅約1.5ｍ、深さは現地表面から北で2.0ｍ、南で1.5ｍもある非常に大きな溝である。今回の調査によって古道に付随する溝が調査区の南東隅で北上し、更に北調査区の北東隅で東へ曲がることを確認した。塚山と上園の字界でもある現況の道とほぼ同じコースをたどると考えられる。遺物は、整理箱にして土師器杯・鍋・高杯、常滑産壷、山茶椀が約２箱出土した。

（９）その他の鎌倉時代の遺構

鎌倉時代で時期細分できなかったものに土坑４、溝３、井戸1 がある。

土坑ＳＫ6102・6127・6139は北調査区で、ＳＫ6147は南調査区で確認された土坑で、いずれも土師器片、山茶椀片を少量出土したのみである。

溝ＳＤ6097・6141は北調査区に位置する。

ＳＤ6097は、北調査区北西部から南下する幅0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍの比較的浅い溝である。

ＳＤ6141は、北調査区の南端を走る溝である。ほとんどの部分が南北調査区の畦の下である

が、おそらくＳＤ6097の続きと考えられる。

ＳＤ6195は、南調査区の南端部東方でＳＥ6190に接続する形で検出した。幅0.6ｍ、深さ0.1ｍである。いずれの溝も少量の土師器片を出土したのみであるので、時期判定の材料を欠く。

ＳＥ6145は、南調査区南端で確認した直径1ｍの小型の井戸で、少量の土師器片を出土するにとどまった。

(10) 室町時代の遺構

この時期の遺構に土坑13、溝10、井戸１がある。

北調査区にＳＫ6095、南調査区の中部西方にＳＫ6152・6153・6154・6156が、中部南方にＳＫ6167・6178・6179・6181・6183・6184が、東方にＳＫ6196・6198・165がある。

なかでも、ＳＫ6167は、長径3.8ｍ、短径2.8ｍ、深さ0.5ｍと比較的大きな土坑で、室町前期のものである。出土した遺物は、土師器杯・鍋・羽釜、山茶椀、白磁などが整理箱にして約１箱出土した。

溝はＳＤ6096・6108・6142・6166・6188・6191・6193・6194・6199・206を確認した。

なかでも、第8-5次調査（昭和49年度）で確認されていたＳＤ206は、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍで、総延長約160ｍを測る。この溝は屋敷地を周回してめぐる溝と考えられるが、時期決定の基準となる土器が出土しなかったため不明とした。

井戸ＳＥ6101は、遺構検出の段階では、竪穴住居ＳＢ6099と切り合う室町時代の土坑と考えていたが、1ｍ位掘り下げたところで、井戸であることを確認した。

(11) 遺物

今回出土した遺物の時期は、遺構の時期と対応して奈良時代～室町時代と多期にわたるが、遺物の量から見れば奈良時代と鎌倉時代に集中する。

（1 ～12）は、奈良時代前期の竪穴住居ＳＢ6125から出土したものである。

(1)は、いなか風椀で口径11cm、器高4.4cm、体部外面に粘土巻き上げ痕をのこす。杯(3)、(4)は、口縁端部をヨコナデをし、底部をヘラケズリするｂ手法のものである。(3)は体部内面に放射状暗文を施し、(4)にはハリツケ高台がつく。甕（７～10）はカマド内部から折り重なって出土した。（７・８）は体部が長い長胴甕、（９・10）は体部が球形になる小型の甕である。それぞれ体部外面を細かいタテハケメ調整、体部内面をヨコハケメ調整、内面下半をヘラケズリ調整する。

（11～12）は同じくカマド内部から出土した須恵器杯及び蓋である。(11)は口径12.8cm、器高4.4cm、(12)は口径14.6cm、器高4.4cmで、ともに色調は青灰色である。

(13～19)は奈良時代前期の竪穴住居ＳＢ6098から出土したものである。

(13),(14)はカマド内部から、他は床面上面から出土した。(15)は口径15.4cm、器高3.0cmで、ロクロ水挽き技法による。外面底部には回転糸切り痕を残す。甕(16～19)は、何れも体部外面

に細かいタテハケを施し、内面には横方向にヘラケズリをするものとヨコハケをするものの二種類ある。口縁端部はいずれもくの字状となる。

(21～28)は奈良時代前期の竪穴住居ＳＢ6105からの出土である。(21～28)はすべて床面上面で出土した。(21・22)は体部内面に放射状暗文と螺施状暗文を施す土師器杯で共にｂ手法によるものである。土師器皿については、内面に放射状暗文を施す(23・24)と施さない(25・26)がある。甕については、体部が長い長胴甕(28)と底部が球状となる小型の甕(27)が出土した。小型甕(27)は口径13.4cm、器高10.7cmで体部外面上半をタテハケ調整、下部をヘラケズリをした後ハケメ調整をする。体部内面は上部をヨコハケ調整をし、下部にヘラケズリを施す。

ＳＢ6130からは土師器杯(29・31)、皿(32～34)、いなか風椀(30)、甕(36～38)が出土した。すべて奈良時代前期の中におさまる土器と思われる。

奈良時代前期の土坑ＳＫ6110からは、斎宮標式遺構SK3000に相当する須恵器杯(41)、蓋(42)が出土した。須恵器杯(41)は口径17.2cm、器高3.6cmでロクロ水挽き手法によるもので、体部外面には乳灰色の自然釉がみとめられる。須恵器蓋(42)は口径17.6cm、器高3.8cm、技法はロクロ水挽きによるもので、天井部外面をロクロ回転ヘラケズリ、天井部内面をナデている。土師器蓋(43)は擬宝珠形のつまみを３分の２ほど欠損するが、天井部内外面にきれいなヘラミガキを施す。

平安時代の遺物に関しては、平安時代後Ⅱ期と平安時代末期に限られる。

なかでも、平安時代末期の土坑ＳＫ6163からは一括資料とまでもいかなくても、良好な資料が得られた。斎宮標式遺構でいえば第50次調査ＳＤ3052に担当する。

土師器杯(46・47)は非ロクロ製の土師器である。この時期の特徴である口縁端部のみをヨコナデをして、その下端部を肥厚させる手法が見られる。(46)が口径15cm、器高3.1cm、(47)が口径15cm、器高2.8cmで共に色調は淡茶褐色である。(48～52)は土師器小皿で、(48～50)は非ロクロ製、(51・52)はロクロ製土師器である。山茶椀は小型の(53)と口径が16.8cmもある大型の(54)が出土した。

鎌倉時代の遺物に関しては、前期のＳＫ6140出土土器があげられる。土坑の規模のわりには比較的多くの土師器、山茶椀が出土した。

土師器杯(55～64)は口径13cm前後、器高３cm前後、器壁６mm前後とほぼ法量が一致する。土師器皿(65～71)に関しても鎌倉時代前期の特徴（口縁端部が内弯気味に立ち上がり、端部が肥厚する）が窮える。土師器鍋としては(72・74)が残りの良いものとして あげられる。(74)は口縁端部を内弯気味におさえて折り曲げ、口縁はヨコナデをする。体部外面は部分的に細かくて浅いハケメが残り、内面には１cmに８～10本ほどの横方向にハケメがみられる。外面底部にはすすが付着する。鍋(72)は(74)よりひとまわり小振りで、体部内面だけを横方向にヘラケズ

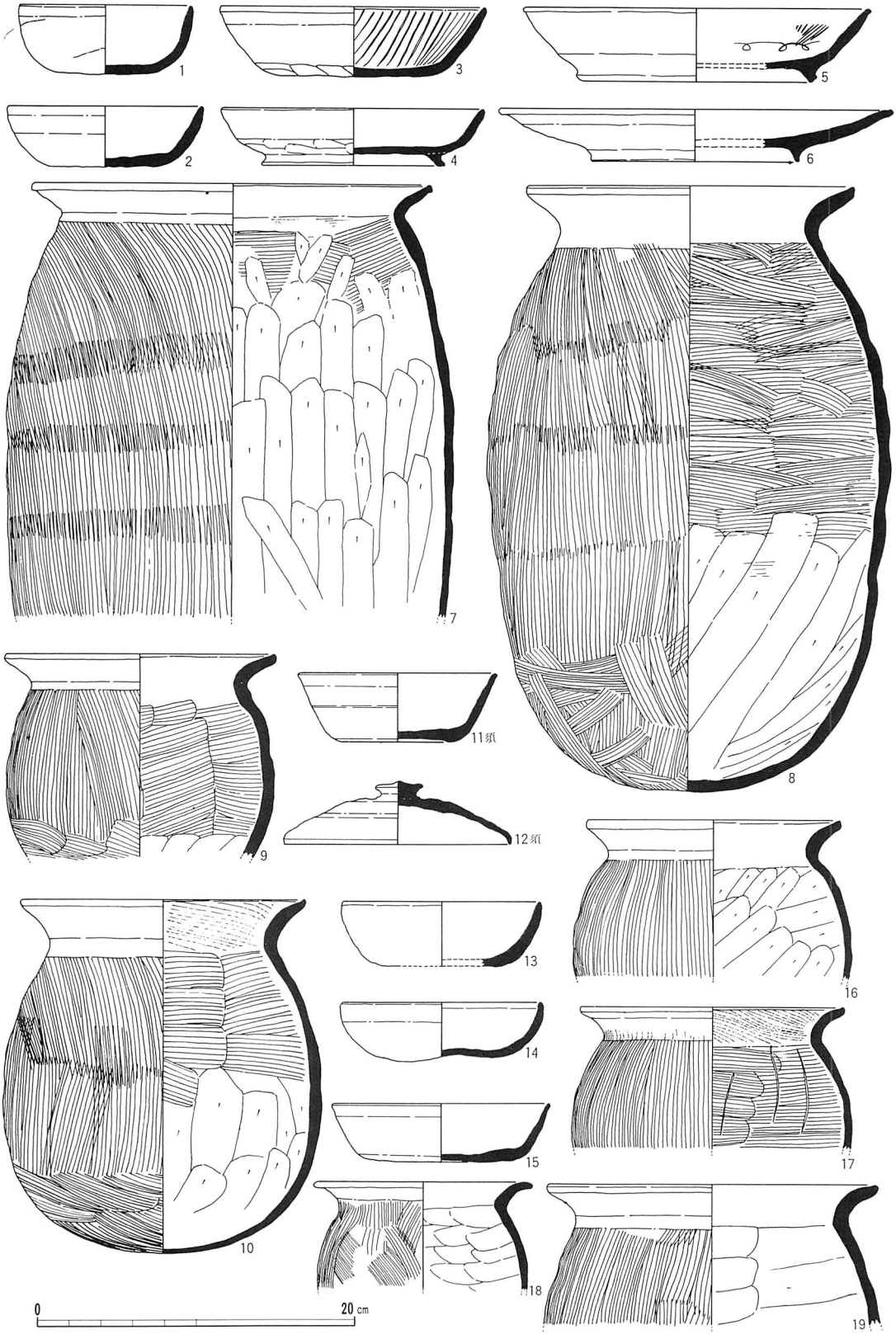
リを行っている。山茶椀(76～79)は口径16cm前後、器高 は4.0～5.0cm前後である。いずれもヨコナデにより口縁端部は丸みを帯びている。底部に関しては、糸切り未調整のもの(76～78)、底部を糸切りをした後、高台をはりつけ、糸切り痕をナデ消すもの(76)とがある。藤澤氏による瀬戸窯山茶椀編年のⅢ－５～Ⅲ－６に比定できそうである。なお、(78)には体部外面下方に墨痕らしきものがみられた。

(79・80)は鎌倉前期の土坑ＳＫ6149から出土した大型の羽釜と鍋である。(79)は口径36cm、器高31.7cm、と今回の出土遺物の中では最大級のものである。口縁端部は上端部で内側に向かって面をつくり、上端部を指先でおさえてナデているために口縁上端内面に沈線ができる。鍔の形状も上方向につまみ上げてナデているため上向きかげんである。体部外面に細かいハケメ、体部外面下部にヘラケズリがみられる。(80)は、いわゆる伊勢型鍋と呼ばれるものである。底部は欠損しているため器高は不明だが、口径は36.6cmと大きい。体部外面下方ですすの付着がみられた。

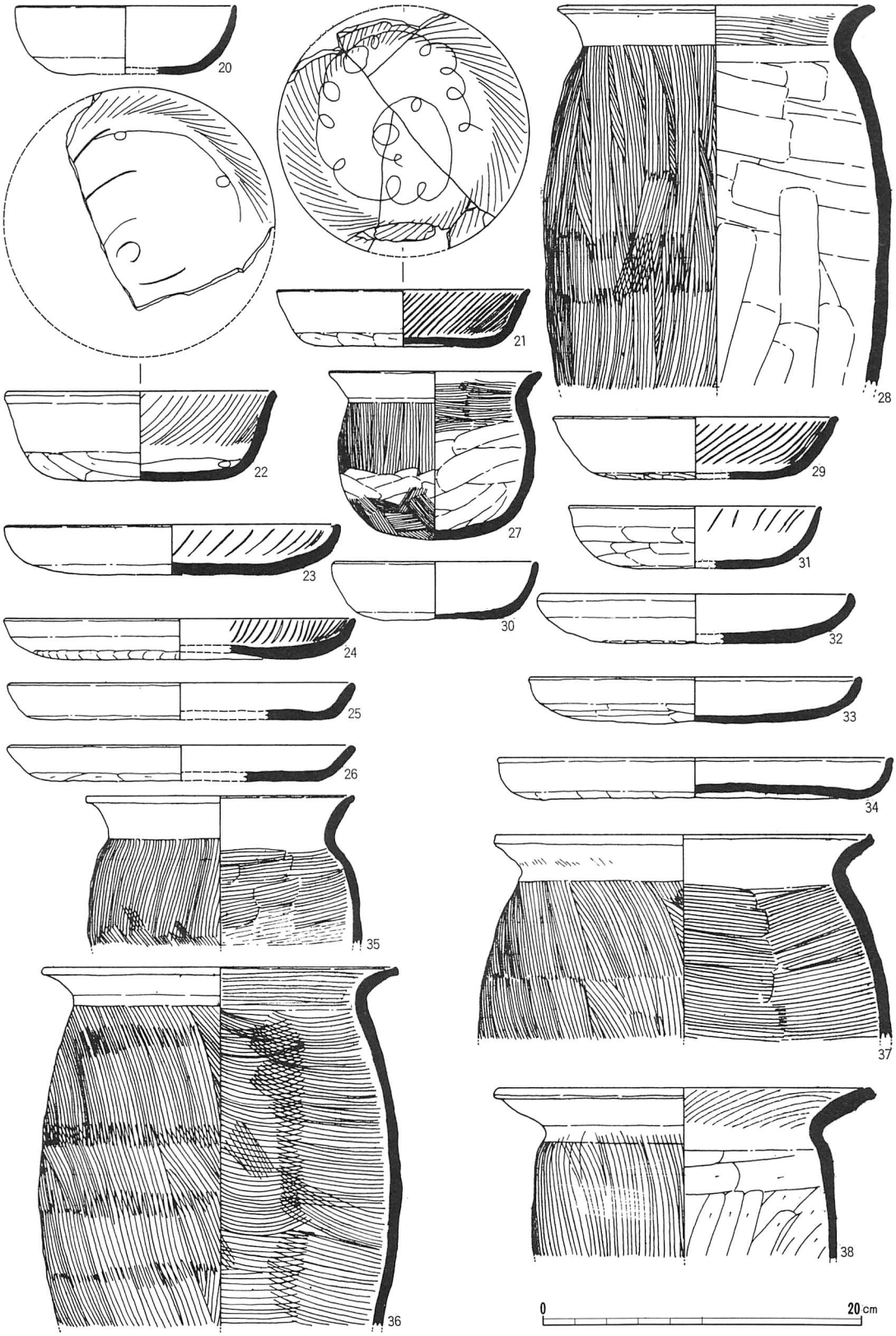
特殊遺物は縁釉陶器片12、墨書土器９、瓦片３、ミニチュア土器3 、青磁片45、白磁片16、土錘３、石硯１、陶硯１、製塩土器片１、石鍋２、鉄斧１、釘20等が整理箱にして７箱出土した。墨書土器(81・82)は「武」,「大」と読める。陶硯(83)は体部を約２分の１欠損する。硯面にはヘラケズリの痕、底面にはナデとオサエ、側面にはヘラケズリがみられる。胎土は非常に緻密で、色調は灰白色である。石硯(84)は黒色粘板岩製で下半部を欠損する。上端の渕より一段低くなっており欠損後、再加工した痕跡がある。砥石(85～91)はすべて凝灰岩製で目の粗い物、密なものとがある。砥石の使用面は、ほとんどが表裏面であるが、なかには側面も使用したものが存在する。ミニチュア土器には室町時代前期の土坑SK6167から出土した(92)と室町時代前期の土坑ＳＫ165の上面で出土した (93)がある。(92)は土師器鍋のミニチュアで、口径8.0cm、器幅3.3cmである。口縁端部をヨコナデをし、体部外面に指オサエを施す。(93)は須恵器合子と考えられるが確証はない。口径5.6cm、現存高は1.6cmである。(94)は鎌倉時代前期の土坑ＳＫ164から出土した 須恵器水滴である。美濃系の須恵器と考えられる。他、今回の調査では青磁、白磁片が多く出土しているが、青磁に関しては龍泉窯系の小椀、杯片が多くみられた。

(12) まとめ

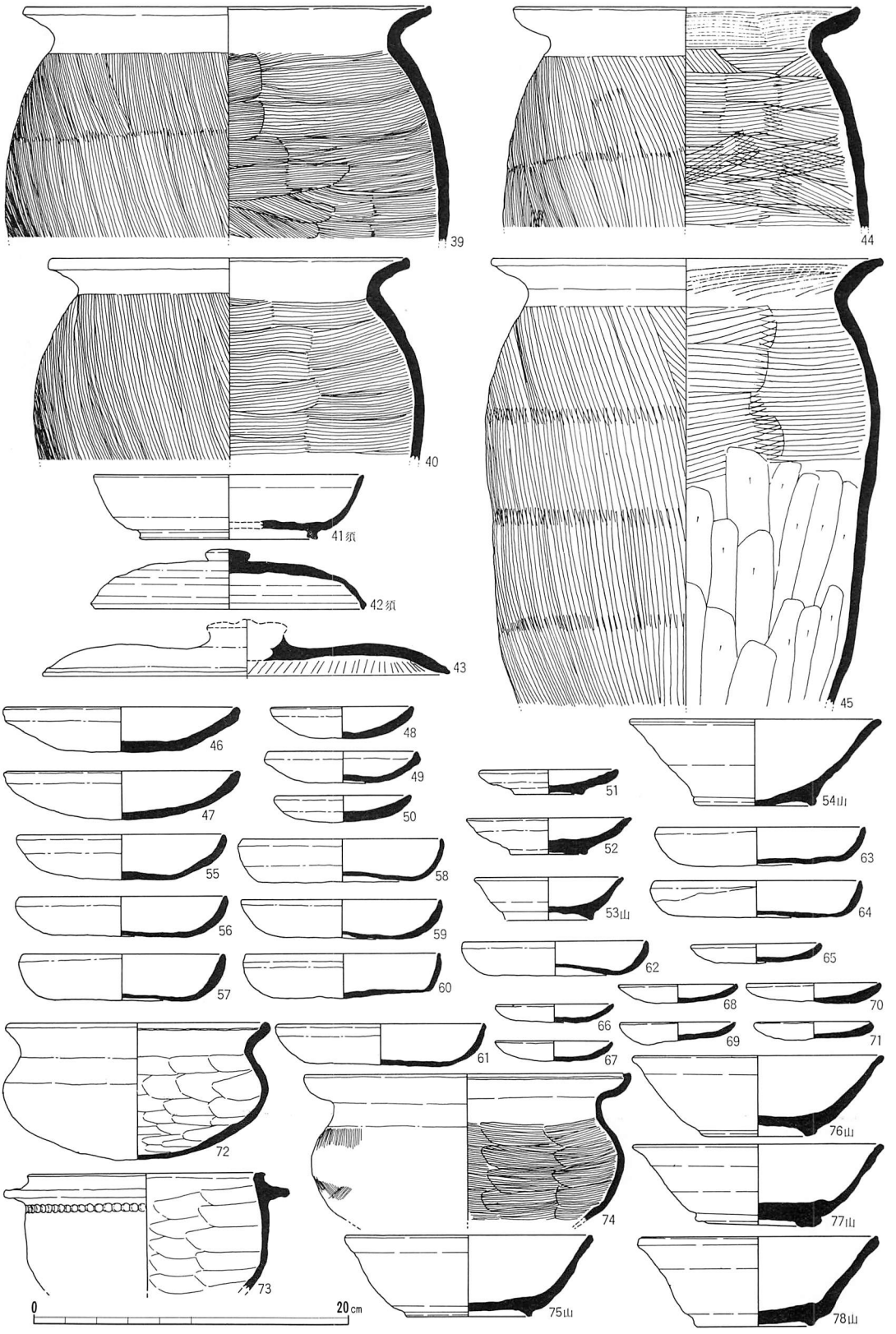
今回の調査によって、従来から古道沿いには奈良時代及び鎌倉時代の遺構が多いとされていたことをより補強する結果となった。特に古道沿いに走る鎌倉時代後期の溝ＳＤ207が東方に広がる中町地区の碁盤目状の方形地割りを意識するように、西から東へ進んできた溝が今回の調査区の南東隅あたりで現況の地割りである現道に沿って北上し、更に現道に沿って緩やかに東へ曲がっていくことを確認できたことは大きな成果である。中町地区に存在していた斎宮寮



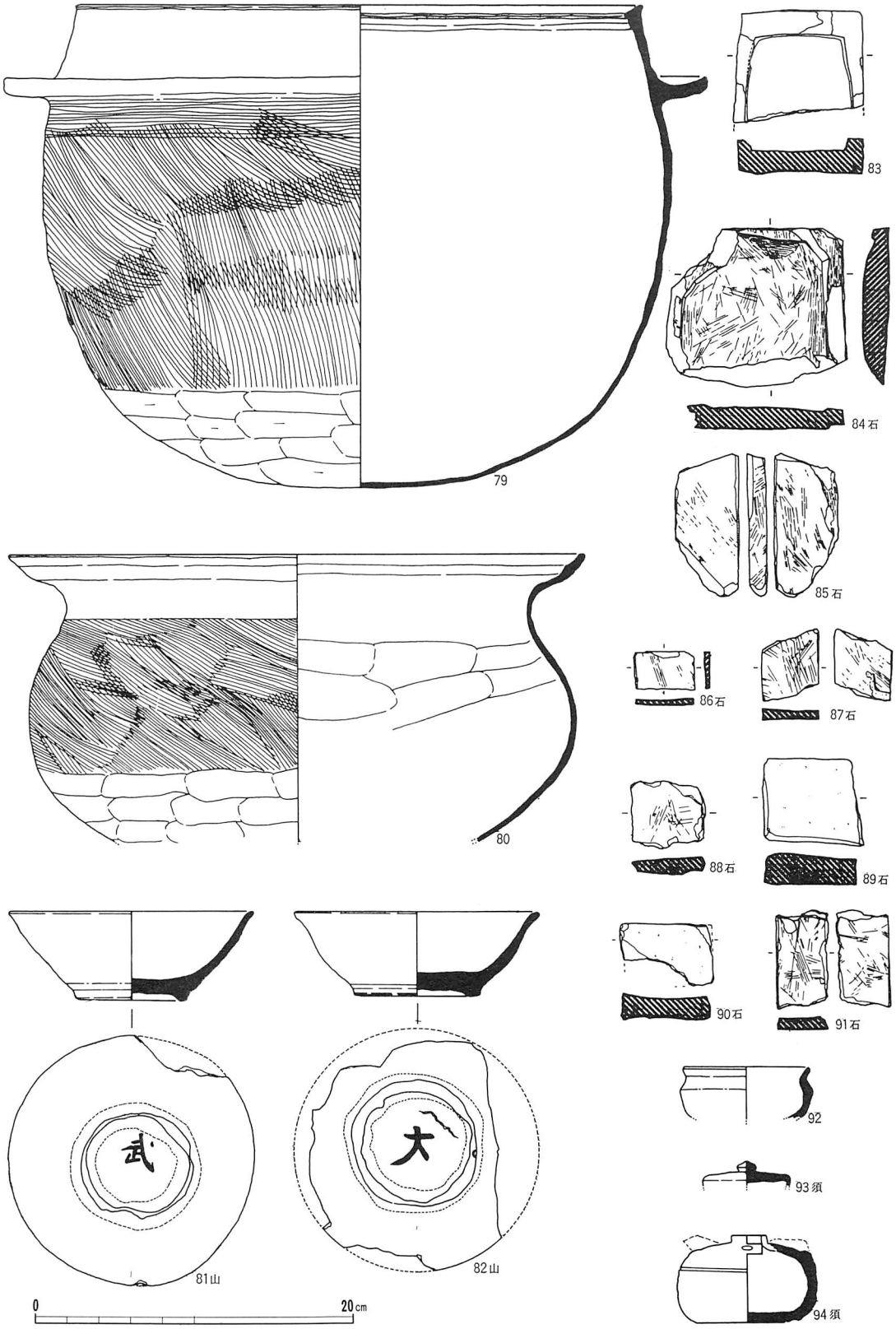
第14図　第87次出土遺物　ＳＢ6125；１～12、ＳＢ6098；13～19



第15図　第87次出土遺物　ＳＢ6105；20～28、ＳＢ6130；29～38



第16図　第87次出土遺物　ＳＢ6110；39～44、ＳＢ161；45
ＳＫ6163；46～54、ＳＫ6140；55～78



第17図　第87次出土遺物　ＳＫ6149；79・80、包含層；81～85・88～91
ＳＤ206；86、ＳＫ164；87～94、ＳＫ6167；92
ＳＫ165；93

がこれまでの調査によって平安末期ぐらいには中枢部でなくなることが明らかになりつつあるが、にもかかわらず鎌倉時代後期の溝ＳＤ207は、碁盤目状の方形地割りの手前で、あたかもそれを意識するかのように曲げられている。つまり、鎌倉時代においても史跡東部が斎宮寮の中枢部であったという意識が働いていたためだと考えられる。

今回の調査で検出した奈良時代前期でも古いほうに比定できる大型の掘立柱建物ＳＢ6090は、中町地区で検出されている大型の掘立柱建物群と比べても、柱掘形こそ小さいが、規模だけをみれば遜色のないものである。現在まで奈良時代の掘立柱建物は総計220棟検出しているが、そのほとんどが３間×２間(26.8%)、もしくは３間×３間(11.8%)であることを考えてみても今回確認された６間×３間の掘立柱建物ＳＢ6090の発見の意義は大きい。このことは、塚山地区の存在する史跡西部における奈良時代前半の斎宮跡の究明に明るい材料を得たと思われる。

それと今回の調査で注目したいのは、鎌倉時代の総柱建物群とそれらを取り囲む溝の検出である。いわゆる屋敷地遺構である。今回のような屋敷地の遺構の例は亀山市大薮遺跡・正知浦遺跡、玉城町楠ノ木遺跡・蚊山遺跡、白山町家野遺跡など、最近県下各地で確認され、中世村落の実体が明らかになりつつある。屋敷地を有する造営主体者がいかなる階層に属する者であるのか、その解明は今後の課題であるが、斎宮においてもこの種の遺構が検出されたという事実は、確実に荒廃期に向かっていた斎宮寮の一端をよく反映したものとして理解されよう。しかし史跡東部の基盤目状区画の中では、未だ１棟も中世の民家風建物は検出されておらず、この時期になっても依然として神聖化された場所という意識が強く働いていたものと考えられる。

Ⅳ　第88次調査

6ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ（鍛冶山地区）

史跡東部に溝や道路によって区画された一辺120ｍ四方の基盤目状区画が存在することが提唱されて以来約10年が経過したが、調査次数を重ねるたびに、その実体がより明確なものとなってきている。今回の調査地はその中の北から３列目、東から２列目の区画の中の北西部分に当たり、約1,250㎡の調査を実施した。

当調査区の北側では、昭和57年度に第46次調査①が実施され、東西方向の区画溝ＳＤ2400、柵列ＳＡ2800、大型掘形をもつ倉庫ＳＢ2780・ＳＢ2810などが確認されているほか、すぐ西隣りで実施した第21-1次調査②でも、小規模な現状変更に伴う調査ではあったが、奈良時代中期の土器の標式遺構となっている土坑ＳＫ1098が検出されているなど、従来から重要な区画の一つであると考えられていた。

今回の調査の主要な目的は、柵列ＳＡ2800の南への延長部分とこれに取り付くであろう門跡の存在を確認すること。さらに柵列に囲まれた区画内での建物や大型倉庫に付随する他の関連建物群などを明らかにすることであった。

遺構面までの基本的な層序は、耕土→灰褐色土→地山の順で表土下30cmで地山に達した。なお調査区西端では、中世以降の攪乱を受けているため、灰褐色土下に明茶褐色土が厚く推積している状況が認められた。遺構面の絶対高は北で9.1ｍ、南で9.2ｍを測り、ほぼ平坦である。

（１）奈良時代前期の遺構

調査区の中央部を西北西方向から東南東方向に走る溝ＳＤ2404とこの溝の南を並走する溝ＳＤ6252がある。

ＳＤ2404は、幅0.9ｍ～1.3ｍを測り、部分的に深く掘られる場所があるが、平均して深さ20cmほどである。溝方向はＥ15°Ｓでほぼまっすぐに走る。溝底の絶対高は西で9.0ｍ、東で8.8ｍを測り、排水は西から東へ向かって緩やかに流れたものと思われる。

ＳＤ6252は、幅0.7ｍ～0.9ｍで、深さ10cm前後の浅いもので、部分的にしか確認できなかったものである。

なお詳細は後述することにするが、ＳＤ2404は、宮域西部にあたる古里南部地区や塚山地区で確認の溝ＳＤ170の延長線上にのる可能性が強く、おそらくＳＤ6252とに狭まれた部分が道路遺構になるものと考えられる。

（２）奈良時代中期の遺構

掘立柱建物１棟、土坑20がある。

調査区北側で実施した第46次調査で確認の総柱建物ＳＢ2780は、今回の調査で４間×３間の東西棟建物であることが確定した。柱掘形内の出土遺物は土師器甕の細片ばかりで時期決定が難しいが、奈良時代末期～平安時代初期に位置付けられているＳＡ2800の柱掘形がこの建物の柱掘形を切っており、この時期より以前であることは確実である。また周辺に奈良時代中期の土坑群が多数検出されているにもかかわらず、この時期の建物が１棟も確認されていないというのも不自然である。以上のような点を踏まえ、確たる証拠はないものの、最も規模の大きいＳＢ2780を当地区における初源的な建物と考え、一応この時期に属する建物と考えた。

土坑の多くは、調査区西部と調査区北辺中央やや東寄りに集中している。土坑の規模は大小様々で、小さなものは径1.2ｍから大きなもので4.0ｍほどを測り、概ね不整円形を呈するものである。

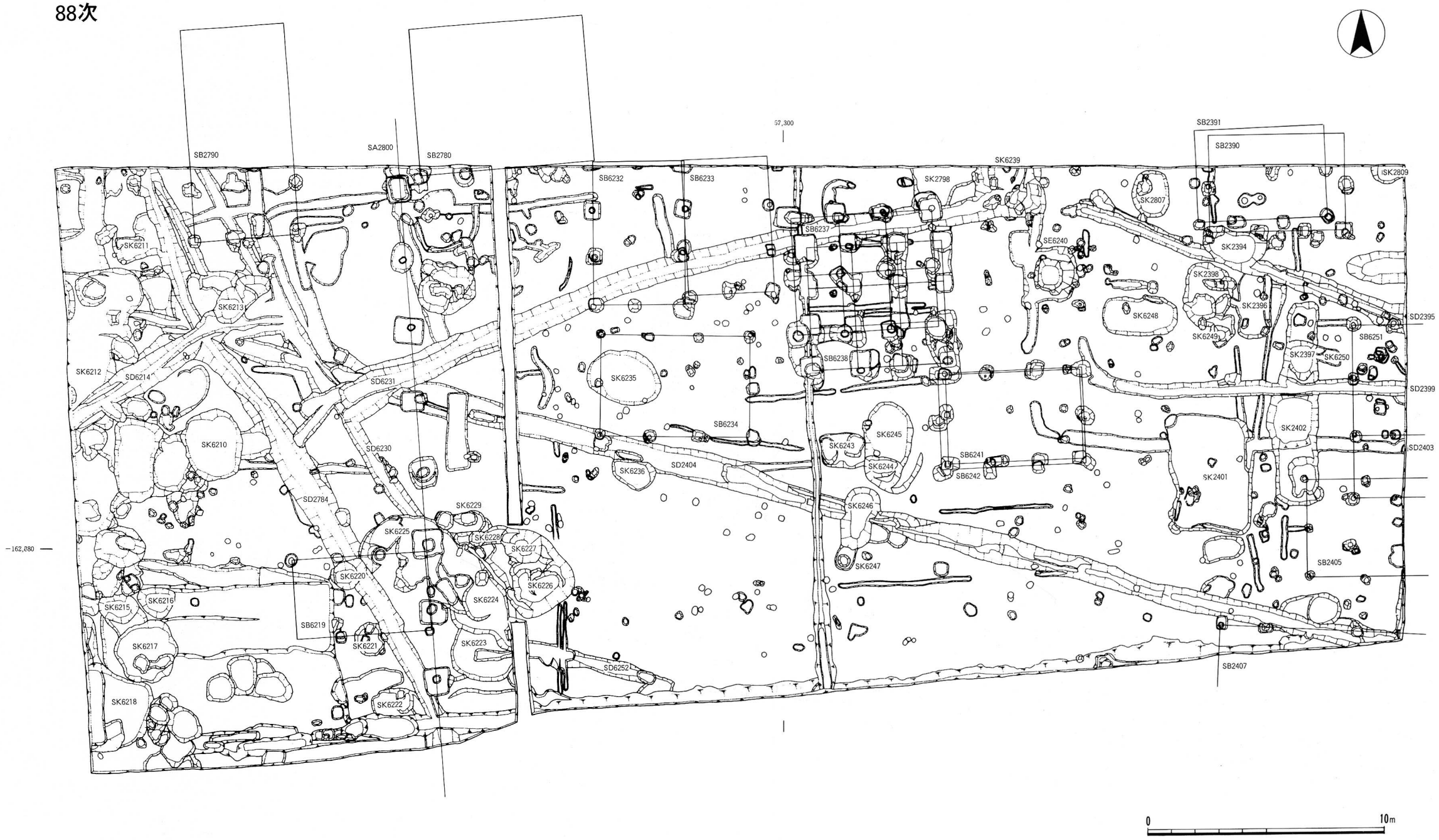
調査区北西部のＳＫ6211・ＳＫ6213はいずれも小規模な土坑で、遺物は少量出土したにとどまる。またＳＫ6212は大半が中世以降の攪乱を受け、その形状を十分とどめていないが、底近くの埋土、暗褐色土層より須恵器杯蓋、土師器甕片が少量出土した。

ＳＫ6210は径2.9ｍ×2.4ｍの楕円形を呈し、深さは80cmを測る大きな土坑である。焼土や炭化物の混入した土坑埋土下層から、土師器杯・皿・椀・高杯、須恵器杯・蓋・大型浅鉢など多量の食器類が出土した。なお、この土坑の西側に南北に長い土坑が２基認められるが、遺物は

		遺構の種別			
		ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＥ
奈良時代	前期			2404・6252	
	中期	2780	2798・6210・6211・6212 6213・6215・6216・6217 6218・6220・6221・6222 6223・6224・6225・6226 6227・6228・6229・6239		
	後期	6237・6238	2394・2396・2401		
平安時代	初期	2391・2780・2790 6232・6233・6234 6241・6242・2800	6235・6236・6243・6244 6245・6246		
	前Ⅰ期	6251	2397・2402・6247・6248		
	前Ⅱ期	2390	2398・2807・2809	2399・2403	6240
	末期		6250	2395・6214	
鎌倉時代				2784・6231	
不明		2405・2407・6219	6249	6230	

第４表　第88次調査　時期別遺構分類表

88次



第18図　第88次遺構実測図（1：200）

ほとんど出土しておらず、土器以外の廃棄土坑と思われる。

調査区南西部には、ＳＫ6215～ＳＫ6218の４つの土坑が集中する。このうちＳＫ6215～ＳＫ6217は近世の瓦粘土採掘のため、かろうじて土坑の底部分が残存していたものである。ＳＫ6215・ＳＫ6218は土師器よりも須恵器の出土の割合が高いことが注目される。

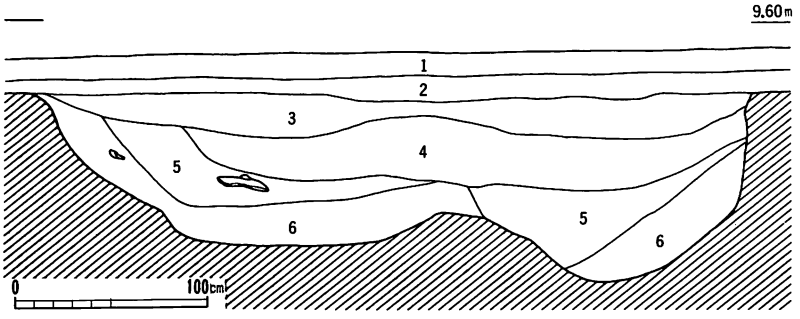
粘土採掘穴の東側は、遺構検出をした段階で、7.5ｍ×8.5ｍの範囲に明茶褐色土や暗褐色土の広がりがあり、随所に焼土のブロックや炭、黄色砂質土の混入ヵ所が認められるなど、いくつもの土坑群が複雑に切り合う土坑群の集まりであろうと予想された。しかし平面プランでは、明確な切り合い関係を確認するまでには至らず、徐々に埋土を掘り下げながらの調査となった。その結果比較的多くの遺物を含んでいた土坑としてＳＫ6220～ＳＫ6229の10基が確認された。

ＳＫ6220は、径1.5ｍ×1.2ｍの土坑ながら深さは1.0ｍもあり、多くの土師器杯・皿類、須恵器杯類が出土した。埋土上層は遺構面から20cmほどの厚さで焼土混じりの茶褐色土であったが、これより以下では炭化物や灰の混じった灰褐色となっており、出土遺物の大半がこの層から出土した。

ＳＫ6225は北壁のみ確認できたもので、復元すると径４ｍ前後の大きな土坑である。深さは30cm～50cmを測り、多器種にわたる土師器、須恵器の食器類や、須恵器甕・鉢などの大型製品が出土した。

ＳＫ6225の東にあるＳＫ6226～ＳＫ6228は当初１つの土坑として認識されたが、調査の過程で少なくとも３つの土坑に分かれることが判明したものである。このうち断面観察によりＳＫ6226→ＳＫ6227の順を確認したほか、ＳＫ6228の底のレベルが第19図の４層の底のレベルに近いところから、ＳＫ6226・ＳＫ6227の埋土を切るＳＫ6228がおそらく最も新しいものとなろう。ＳＫ6228出土遺物の中に、他の２つの土坑出土遺物と接合する資料が何例か認められるのはこの証であろう。

ＳＫ6226は径2.5ｍ、深さ80cmの不整形土坑。ＳＫ6227は1.8ｍ×1.4ｍ、深さ１ｍの楕円形土坑で、いずれの土坑からも暗文やヘラミガキが多用化された土師器杯・皿類のほか、大型の須



1．暗灰色土（耕土）
2．灰褐色土
3．暗灰褐色土
4．黒褐色土
5．黄色土混入茶灰色土
6．炭化物混入黒褐色土

第19図　ＳＫ6226・6227土層断面図（１：40）

恵器製品が多く出土した。

調査区北辺にあるＳＫ2798とＳＫ6239は、その大部分が第46次調査で確認されていたもので、今回その南側への延長部分を確認した。その結果、ＳＫ2798は南辺と東辺を鎌倉時代の溝ＳＤ6231に切られるものの、一辺４ｍ前後の方形土坑であることが判明した。ＳＫ2798からは、土師器杯・皿・椀や大型の鉢・ほぼ完形のカマドが出土したほか、須恵器甕・浅鉢などの大型製品が出土した。なおこの土坑北側に集中している第46次調査で確認のＳＫ2797・ＳＫ2808・ＳＫ2811・ＳＫ2812の出土遺物についても再度見直したところ、ＳＫ2798出土遺物と大差ないので、今回奈良時代中期まで遡せておくことにする。

（３）奈良時代後期の遺構

調査区中央部で掘立柱建物２棟と東部で土坑３を検出した。

重複する２棟の掘立柱建物は、いずれも倉庫と考えられる総柱建物で、切り合い関係よりＳＢ6238→ＳＢ6237の順を確認している。

ＳＢ6238は３間×３間の東西棟建物で、柱掘形は一辺70cm四方のものから長辺120cmの南北に長いものまで規模・形状は様々である。掘形の深さは、四隅のものが80cm前後、他は40cm～60cmを測る。西から第２列目の柱列を除き、柱掘形２個分を一単位とする南北方向の布掘りが認められた。また南西隅の柱掘形には、南東方向への柱抜き取り穴が確認された。

ＳＢ6237は、３間×２間の東西棟建物で、柱掘形は、北側柱柱列、南側柱柱列ともに一辺１ｍ前後とＳＢ6238の掘形同様大きなものであるが、中央の柱列はこれより一回り小さい。柱掘形の深さは80～100cmで、柱痕跡もよく残っており、柱の太さは30cm前後のものである。ただ北西隅の柱とこの東側の柱については、柱抜き取り痕が認められ、東の方向に抜き取られたことがわかる。なお北東隅の柱掘形が奈良時代の中期の土坑としたＳＫ2798とわずかに切り合うが、調査段階ではこの前後関係について確証が得られなかったものの、柱掘形内出土の土師器カマド片と須恵器甕片が、残存状況の良好であったＳＫ2798出土のものに接合したことから、この土坑よりも新しいことがわかり、またＳＢ6238の南東隅の柱掘形を切るＳＢ6241が平安時代初期の建物として位置付けられるところから、これら２棟の建物を一応奈良時代後期のものと考えておきたい。

これらの建物の東方で検出した土坑ＳＫ2394、ＳＫ2396、ＳＫ2401は既に第41次トレンチ調査[3]で確認されていたものである。なおＳＫ2401は南北4.9ｍ、東西3.5ｍの方形土坑で、南壁に沿って周溝らしき遺構が認められるところから竪穴住居の可能性もある。

（４）奈良時代末期～平安時代初期の遺構

掘立柱建物７棟、柵列１、土坑５がある。

柵列ＳＡ2800は既に第46次調査で北東隅部分を確認し、東西５間以上、南北５間以上である

ことがわかっていた。今回その南北の延長部分で新たに7間分を検出し、南へ12間（約35.5m）以上延びることがわかった。柱掘形は一辺1.0m～1.4mの方形で、深さ80cm前後である。柱間は2.96mと一定で、柵列の造営に際しては当時の一尺＝29.6cmの物差しを基準にしたものと考えられる。時期的には、奈良時代中期としたＳＢ2780やＳＫ6225の埋土を切っており、これらより新しいことは確実であるが、この柵の造営がどこまで下るのかは、出土遺物からだけでは確証が得られなかった。ただ柵列の方向が区画溝の方向であるＥ4°Ｎと一致しており、一応ここでは奈良時代末期～平安時代初期のある時期に造営されたものと理解しておきたい。

ＳＢ2790は、柵列に囲まれた区画内における唯一の掘立柱建物で、柵列内の北東隅に位置する4間×2間の南北棟建物であることが確認された。

その他、柵列の外側にある掘立柱建物については、いずれも3間×2間の小規模なものである。

調査区中央にあるＳＢ6232とＳＢ6233は南北棟建物で、ＳＢ6232の東側柱通りとＳＢ6233の西側柱通りが重複し、柱掘形の切り合いからＳＢ6233→ＳＢ6232の順を確認した。その結果、第46次調査で確認の東西棟建物ＳＢ2795やその東側のＳＢ2796は存在しないことが判明した。ＳＢ6232の柱掘形は一辺70cmの方形を呈し、桁行・梁行ともＳＢ6233より一回り大きい。

これらの建物の南にある東西棟建物は、柱掘形が同時期の土坑であるＳＫ6235の埋土を切つおり、これより新しい。

ＳＢ6241とＳＢ6242は、柱位置をわずかに移動しただけの同一場所における建て替え関係にある東西棟建物で、柱掘形の切り合い関係からＳＢ6241→ＳＢ6242の順を確認した。いずれの建物も柱掘形は60cm～80cmの隅丸方形を呈する。

調査区北東隅にあるＳＢ2391は、既に第41次調査、第46次調査で確認済の東西棟建物である。この建物と柱通りの方向が同じで、建物の規模も比較的近い数値を示す建物に前述のＳＢ6233、ＳＢ6241があり、しかもＳＢ2381の北側柱通りとＳＢ6233の北妻柱通りが揃うところから、これらの3棟は同時期に存在していた可能性が強い。そしてこれら3棟の建物に先行する建物として、第46次調査で確認の総柱建物ＳＢ2810があり、3棟の建物より新しい一群の建物として、新しく建て替えられたＳＢ6232やＳＢ6242がある。ＳＢ6242の北には、第46次調査で確認のほぼこれと同規模で柱通りを揃えるＳＢ2805や、ＳＢ2805の東側にもこれと同規模で柱通りを揃えるＳＢ2389があり、これら4棟が同時期の建物であろう。したがって奈良時代末期から平安時代初期の中で少なくとも3小期の建物群の変遷が考えられる。

土坑は調査区の中央部に集中しており、ＳＫ6235・ＳＫ6236・ＳＫ6243～ＳＫ6246がある。土坑の規模は大小様々で楕円形を呈する。長軸が東西方向を示すものと南北方向を示すものがある。出土遺物は圧倒的に土師器杯・皿類が多いが、土坑の大きさの割には、全体的に出土量

が乏しく破片が多い。切り合い関係が判明しているものにＳＫ6243→ＳＫ6245がある。

（５）平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物Ⅰ棟と土坑４のみである。

ＳＢ6251は、大半が調査区東側へ延び、全体の規模は不明であるが、南側に廂をもつ東西棟建物と思われる。

この建物の西妻柱通りと並行する南北に長い土坑ＳＫ2397・ＳＫ2402は、この建物に関係する遺構であろうか。ＳＫ2397・ＳＫ2402の規模は、それぞれ3.4ｍ×1.3ｍ、深さ30cmと4.6ｍ×2.0ｍ、深さ20cmを測る。このほか東西に長い楕円形土坑ＳＫ6248や、調査区の中央部に径1.0ｍほどの小土坑ＳＫ6247がある。

（６）平安時代前Ⅱ期の遺構

掘立柱建物１棟、土坑３、井戸１、溝２がある。

調査区北東にあるＳＢ2390は３間×２間の東西棟建物で、南側と西側にこの建物を囲うように並行する２条の溝、ＳＤ2399とＳＤ2403が検出された。溝幅はいずれも60cm前後であるが、深さは、ＳＤ2399が30cmであるのに対し、ＳＤ2403は10cm足らずと浅い。これらの溝は西で北へほぼ直角に折れ、北へ向かうが、徐々に浅くなるため、痕跡をとどめる程度になっている。そのため第46次調査では、これらの溝の延長部分が確認されていない。

井戸ＳＥ6240は方形の素掘り井戸で、上面を2.2ｍ四方で、深さ10cmほど浅く掘り窪め、さらにその中心部分を1.2ｍ四方で垂直に掘削している。深さは遺構面から3.7ｍで井戸底に達し、絶対高は5.35ｍを測る。残念ながら木製品の出土を見なかったが、深さ180cm以下から土師器杯・皿・甕・黒笹90号窯式の灰細陶器が出土した。

土坑はＳＢ2390の周辺で、ＳＫ2807・ＳＫ2809・ＳＫ2398の３基が確認された。

（７）平安時代末期の遺構

調査区の北東で小土坑ＳＫ6250、溝ＳＤ2395を、調査区の西でＳＤ6214を確認したのみである。

ＳＤ2395は幅70cm～80cm、深さ20cm前後で、鎌倉時代の溝ＳＤ6231が急に北へ向きを変える地点の手前で終わる。

ＳＤ6212は上端で幅1.5ｍ、下端で30cm前後を測る法面の緩やかな溝である。南西に向かって徐々に深く掘られ、北東端は、ＳＤ6230に合流するような形で終わる。

（８）鎌倉時代の遺構

調査区の西で十字に交叉する南北溝ＳＤ2784と東西溝ＳＤ6231を確認したのみである。

ＳＤ6231は、溝幅１ｍ前後、深さ45cmを測る。ＳＤ2784の手前で一端浅くなるが、ＳＫ6210の埋土を切って、再び南西方向に延びる。一方東端は、急に北へ折れ曲がり、第46次調査で確

認の南北溝ＳＤ2799に接続する。

（９）時期不明の遺構

調査区南西部の３間×２間の東西棟建物は、奈良時代中期の土坑ＳＫ6255や、奈良時代末期～平安時代初期の柵列ＳＡ2800の柱掘形を切り、これより新しく、鎌倉時代の溝ＳＤ2784に切られ、これより古いものであるが、平安時代のどの時期に属するかは、出土遺物からは判断できなかった。

調査区南東部の東西棟建物ＳＢ2405、ＳＢ2407も、同様に柱掘形内出土遺物が細片のため、時期決定ができなかった。なお、ＳＢ2405は、平安時代前Ⅰ期の土坑ＳＫ2402を切っており、これより新しいことは判明している。

このほかＳＤ2784の東側を並走するＳＤ6230は、奈良時代中期の土坑群の埋土を切り、これより新しいが、出土遺物が乏しいため、時期不明とした。

(10) 遺　　物

遺物は整理箱（テンバコ）で総数127箱が出土した。この内の72箱が奈良時代中期の土坑から出土したものである。同じ鍛冶山地区でも、当区画の西の区画で実施した第44次調査では、平安時代前Ⅰ期～前Ⅱ期の土器が大半を占めており、出土遺物の様相に大きな違いをみせている。ここでは、奈良時代中期の土坑一括資料を中心に概述することとし、加えて、平安時代初期に位置付けられるＳＫ6246出土土器、ならびに平安時代前Ⅱ期のＳＥ6240出土土器についても若干触れておきたい。

Ａ．ＳＫ6225出土土器（１～42）

土師器椀・杯Ａ（高台の付かないもの）・杯Ｂ（高台の付くもの）・皿Ａ・皿Ｂ・蓋・高杯・甕・須恵器杯蓋・短頸壷蓋・無台盤・有台盤・高杯・甕Ａ（頸部が長く、口縁部がラッパ状に大きく開くもの）・甕Ｂ（口頸部が短い広口のもの）がある。

土師器椀（１～５）は、淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む通称「いなか椀」と呼んでいるものである。粘土ひも巻き上げ痕跡をとどめるものが多くみられ、たいてい左回りに巻き上げて成形される。口径12.2cm～13.6cm、器高3.4cm～4.0cmで、径高指数25～29を示す。椀（５）の底部には、焼成後に穿孔された径１cmほどの穴があく。

土師器杯Ａ（６～11）には、杯部の浅いもの杯Ａａと杯部の深いもの杯Ａｂがあり、さらに法量の違いにより大小がある。口径18.1cm、器高3.7cm、径高指数20を示す（11）が 杯ＡａⅠ、口径15.0cm～16cm、径高指数22～23を示す（６）～（９）が杯ＡａⅡ、口径16.0cm、器高4.2cm、径高指数26の（10）が杯ＡｂⅡに相当しよう。器面の調整は底部をヘラケズリするｂ手法が主流を占めるが、口縁部外面をヘラミガキするもの（11）や、外面全面をヘラケズリするｃ手法のものも若干みられる。またｂ手法といっても底部から体部の中ほどまでヘラケズリするもの

が大半を占める。内面の暗文については、器面の保存が悪いため、その有無について明瞭でないが、底部に螺施暗文・口縁部内面に放射状暗文を施すもの（８・11）や、底部中央から描き始めた螺施暗文が口縁部中ほどまでおよぶもの（10）がみられる。

土師器杯Ｂ（12）は、口径11.5cm、器高3.2cmの小型品。底部に低くて幅の広い高台が付き、外端で接地する。

土師器杯蓋（13～15）は、天井部が平坦で、偏平な鈕を有するものである。口径21.4cmの大（15）、口径18.2cmの中（14）、口径13.8cmの小（13）がある。天井部はいずれもヘラミガキされるものと思われるが、器面が磨滅しており調整はよくわからない。蓋（16）は偏平な杯を俯せたようなものに、縦に偏平な紐の付く特殊な蓋で外面を丁寧にヘラミガキした赤褐色を呈する粗土精良な土器である。

土師器皿Ａ（17～21）には、口径23.8cm、器高2.5cmの皿ＡⅠ（21）と、口径21cm前後、器高2.4cm～2.9cmの皿ＡⅡ（18～20）、口径16.2cm、器高2.2cmの皿ＡⅢ（17）がある。器面の調整はｂ手法が主体的で、ｃ手法のもの（19）も若干みられる。内面の暗文については、器面の保存が悪く、不明なものが多い。

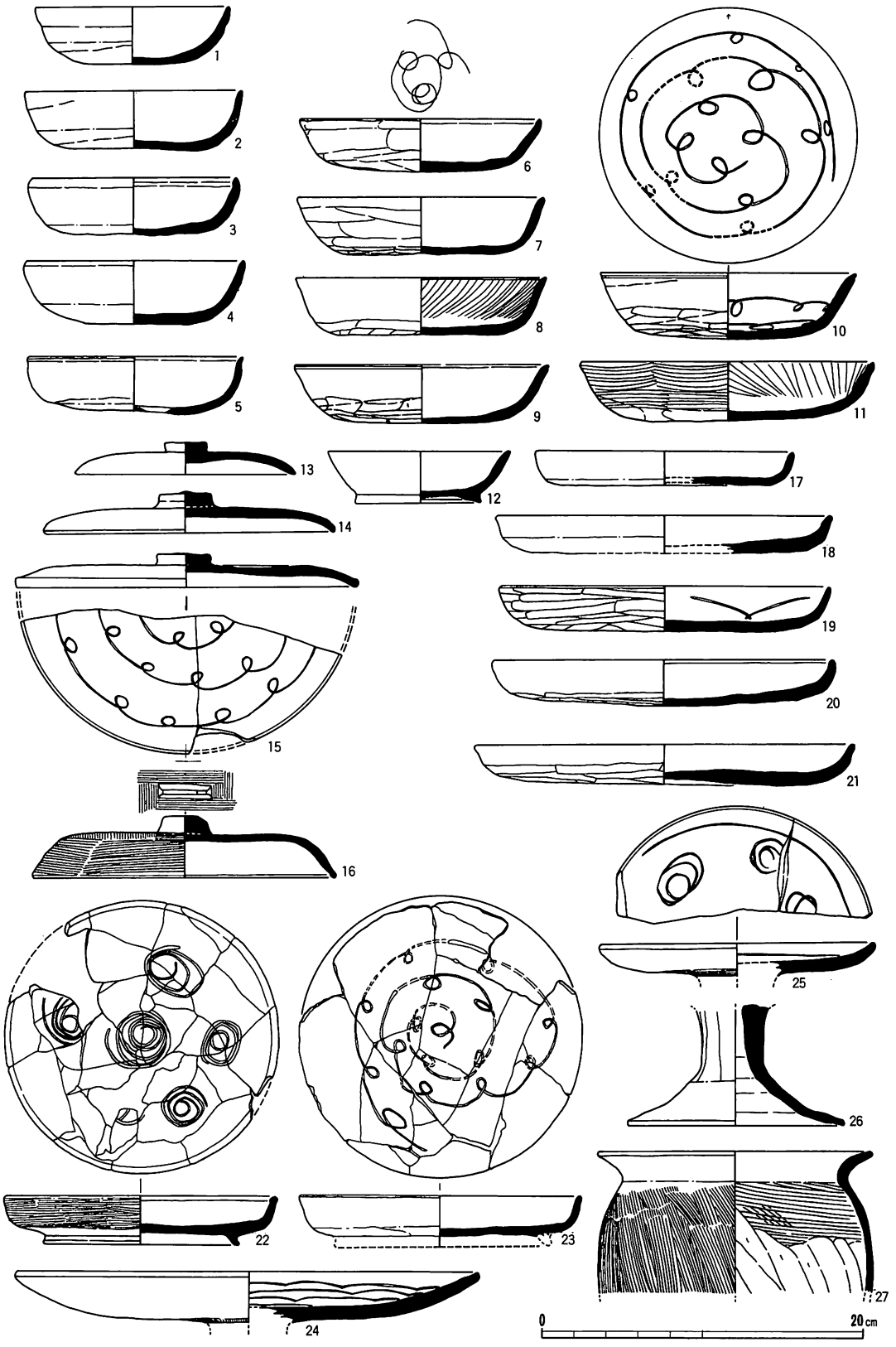
土師器皿Ｂ（22・23）は、皿Ａに八の字形に開く低い高台の付くもので、口径17.2cm～17.8cmと皿ＡⅢより一回り大きい。外面を丁寧にヘラミガキするもの（22）とヘラケズリするもの（23）がある。（22）は底部内面に渦巻状の暗文を中央とその周辺に５ヶ所以上に配し、（23）は底部内面外縁から中央部に向かって螺施暗文を３重に施す。

土師器高杯は、口径29.0cmの大型のもの（24）と17.0cmの小形のもの（25）がある。（24）の内面には５重の連弧状暗文を、（25）には皿Ｂ（22）と同様の暗文を施す。

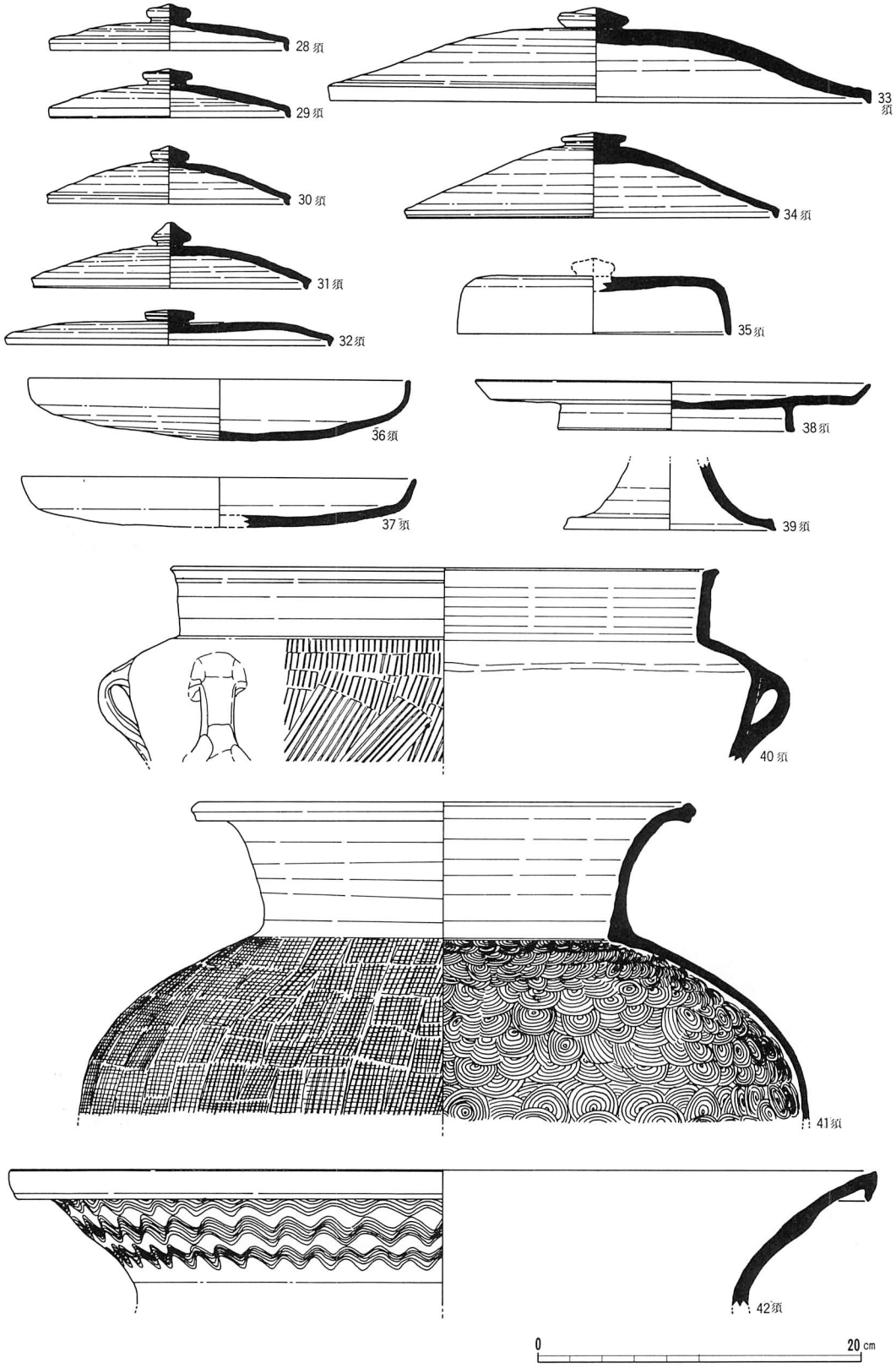
土師器甕（27）は体部上半部のみであるが、口径17.0cmで、口縁部がくの字形に外反し、端部が丸く終わるものである。器面は、外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整し、体部下半はヘラケズリする。

須恵器杯蓋（28～34）には、口径33.6cm、器高5.9cmの超大型品（33）、口径23.0cm、器高5.3cmの大型品（34）、口径16.8cm～20cmの中型品（31～32）、口径14.7cm～15.0cm の小型品（28～30）があり、バラエティーに富む。これらの中には、天井部が極端に低いもの（32）や宝珠形の紐が付くもの（31）もみられる。天井部のロクロヘラケズリは、小型品では中心と外縁との中間あたりまでおよぶが、大型品では、天井部のほぼ全面をヘラケズリする。なお、これらの杯蓋に対応する杯類がみられないのが疑問として残る。蓋（35）は短頸壷の蓋となろう。

須恵器無台盤（36・37）は、底部が丸く、口縁部との境に明瞭な稜線を有しないものである。（36）は口径23.6cm、器高3.8cm。（37）は口径24.4cm、器高3.1cmで、底部は幅４㎜前後の細かいロクロヘラケズリが行われる。



第20図　第88次出土遺物　ＳＫ6225；１～27



第21図　第88次出土遺物　ＳＫ6225；28～42（41は１：６）

須恵器有台盤（38）は、底部が平坦な盤に比較的高い高台が付くもので、口径24.4cm、器高3.0cmを測る。

須恵器高杯（39）は、脚裾部外縁に面をもつ高杯脚部片と思われる。

須恵器甕B（40）は、まっすぐ立ち上がる短い口縁部に、短く張り出す肩部がつくものである。口縁端上面にやや内傾する平坦な面をもち、肩部と体部の境の体部側に環状の把手が付く。

須恵器甕A（41・42）は、口縁部がラッパ状に大きく外側へ開くものである。(41）は口径47.0cmで、口縁端部を三角形に肥厚させている。(42）は口径53.6cmで、口縁端部を下方へ垂下させ、外縁帯を作り出している。口頸部に3条の櫛描波状文が巡る。

B．ＳＫ6220出土土器（43～70）

径1.5m×1.2mの小土坑から出土したもので、他の土坑との切り合いがなく、資料的に一括性が高い。おもなものに土師器椀・杯Ａａ・杯Ａｂ・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｂ・蓋・高杯・甕、須恵器杯・蓋・無台盤などがある。器種構成、法量、器面の調整の点で基本的にＳＫ6225出土土器と大差ないので、ここでは特筆すべきことのみ記述することにする。

土師器杯Ａの中で、新たに口径14.8cm、器高2.7cm、径高指数18を示す小型で浅い杯ＡａⅢ（47）と、口径19.4cm、器高5.7cm、径高指数29を示す大型で深い杯ＡｂⅠ（51）がみられる。

土師器杯Ｂ（52）や蓋（54）は小型品ながら外面を丁寧にヘラミガキし、内面を放射状暗文や、放射状のヘラミガキで飾る胎土精良な優品である。また杯蓋（55）の内面には、2重以上の螺施暗文が薄く残る。

土師器高杯（63）は、水平に近く開いた浅い皿部に短い脚部の付く小型品である。脚柱部はヘラによる8面の面取りがなされる。

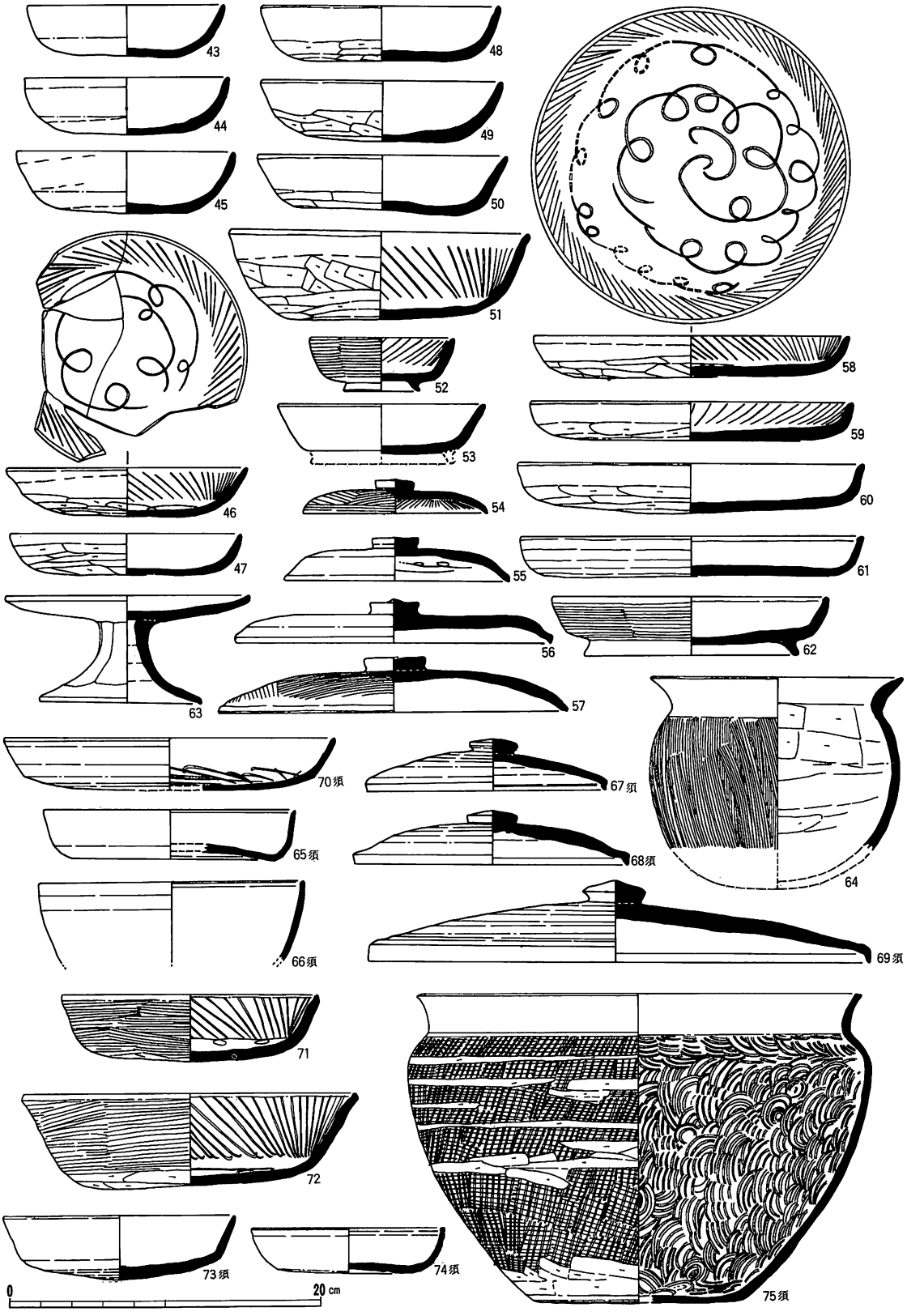
須恵器杯には、口縁部が内弯気味に立ち上がる深いもの（66）と、口径に対し浅いもの（65）がある。(65）は口縁部の歪みが著しく、底部中央部がへこむ不良品である。腰が張り、口縁端部に外傾する面を有する薄手の土器で、底部はロクロヘラケズリがなされる。

須恵器無台盤（70）は、ＳＫ6225出土の（36）や（37）に比べて底部と口縁部の境が明瞭で、口縁部の長さもやや長い。口径21.2cm、器高3.4cmを測り、底部内面には、幅2mmほどの粗いヘラミガキが認められる。

C．ＳＫ6228出土土器（71～75）

ＳＫ6226及びＳＫ6227出土の土器が混入している可能性が高く、純粋の一括資料とは見なし得ない。おもな器種には、土師器椀・杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｂ・蓋・把手付甕、須恵器杯・甕Ｂなどがある。

土師器杯Ａ（71・72）は、口縁端部を弱く外反させ、端部外側に内傾する面を作るもので、底部をヘラケズリし、口縁部外面を先端の丸い棒状の工具で丁寧に磨くものである。底部内面



第22図　第88次出土遺物　ＳＫ6220；43～70、ＳＫ6228；71～75（75は１：８）

には、中央部から外側に向かう３重の螺施暗文を施し、口縁部内側には、右下りの放射状暗文を施す。いずれも明茶褐色を呈する胎土精良な完形品で、成形、調整法、暗文の施文の仕方に共通点が見られるところから、おそらく同一工人の手によるものと思われる。(71) は、口径16.4cm、器高4.3cm、径高指数26を示し杯ＡｂⅡに、(72) が口径21.4cm、器高6.0cm、径高指数28を示し杯ＡｂＩに分類できよう。

共伴する須恵器には、底部が丸くてロクロヘラケズリするもの (73) と、底部が平坦で糸切り後、外縁を手持ちヘラケズリするもの (74) がある。(73) は愛知県日進町岩崎25号窯[4]出土の杯Ｂに分類されたものに相当し、糸切りの出現や、杯Ｂの出現は、８世紀中葉の岩崎25号窯式から始まるとされているところから、本資料の年代の一端をこの頃に求めることができよう。

約半分が残存する須恵器甕Ｂ (75) は、口径57.6cm、器高40.4cmを測る大型の広口甕である。口縁部は弱く外反気味に立ち上がり、口縁端部上面に平坦な面を作る。器面の調整は内外面を叩き締め、底部及び体部の一部をヘラケズリする。

Ｄ．ＳＫ6226出土土器 (76～103)

おもな器種に土師器椀・杯Ａａ・杯Ａｂ・蓋・皿Ａ・皿Ｂ・把手付大型浅鉢・甕・把手付甕・片手甕、須恵器杯蓋・無台盤・大型浅鉢・甕Ｂ・台付広口甕などがある。

土師器椀 (76～79) には、口径13cm以下のものが見られず、ＳＫ6225・ＳＫ6220出土のものに比べて底部の平坦なものが多い。

土師器杯Ａでは、杯ＡａⅢ (81) よりさらに口径の小さい杯ＡａⅣ (80) や、口径14.6cm、器高4.2cm、径高指数29を示す杯ＡｂⅢ (82) がみられる。

土師器皿Ａでは、底部が比較的平坦なもの (91～93) と、底部がやや丸く、口縁部が内弯するもの (89・90) がみられる。

器面の調整は個体数が少ないので断定はできないが、土師器杯・皿ともｂ手法のほかｃ手法も多く認められ、外面をヘラミガキするものや、暗文を施すものは少ないようである。

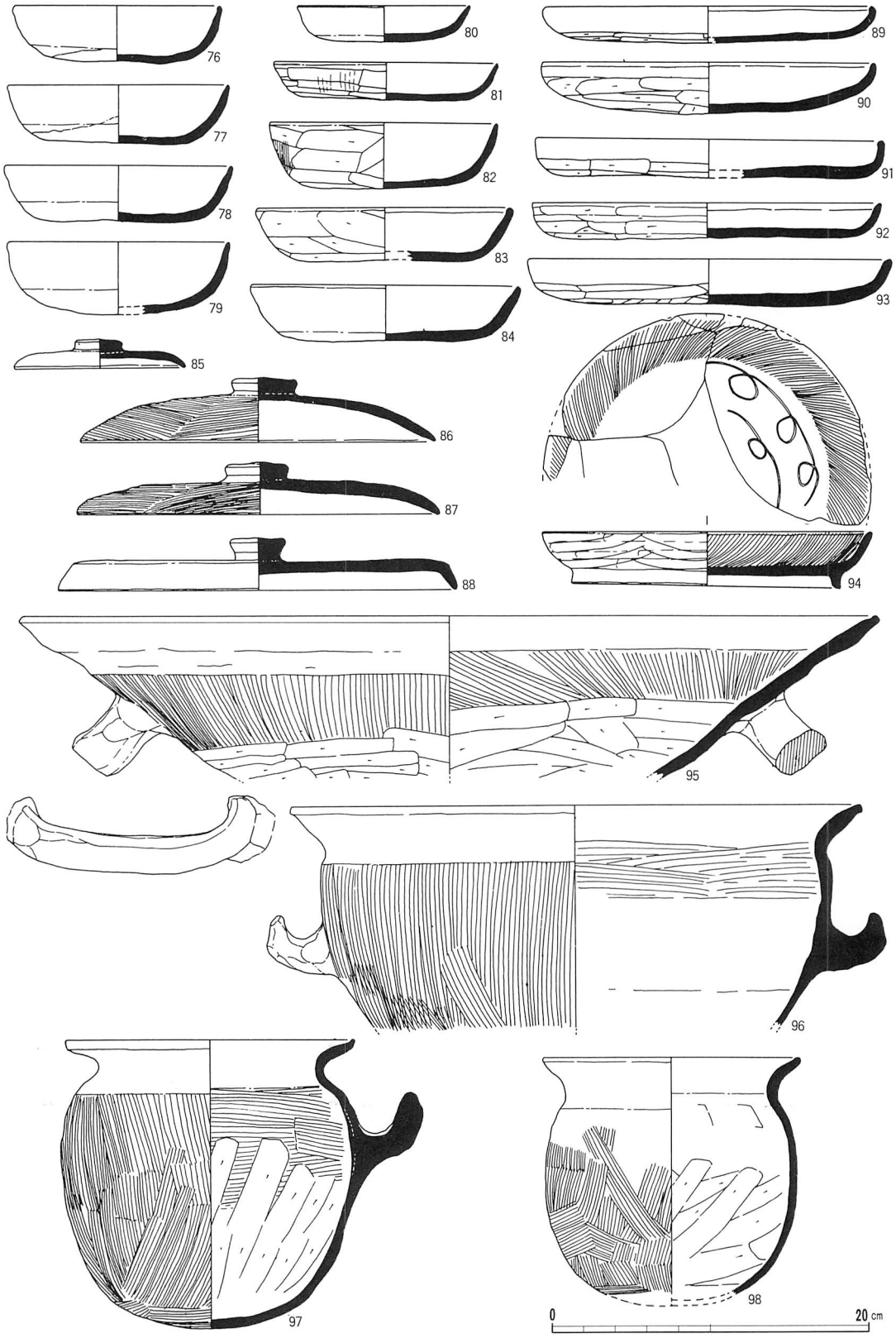
皿Ｂ (94) は、ＳＫ6225出土の (22)、(23) やＳＫ6220出土の (62) より一回り大きく、皿Ｂの大小関係が存在するものと思われる。口径20.6cm、器高3.5cmで、口縁部外面はヘラケズリ後ヘラミガキし、内面には螺線暗文や左下がりの細かい放射状暗文がみられる。

土師器蓋には、天井部が平坦で、端部を下方に折り曲げたもの (88) も新しくみられる。

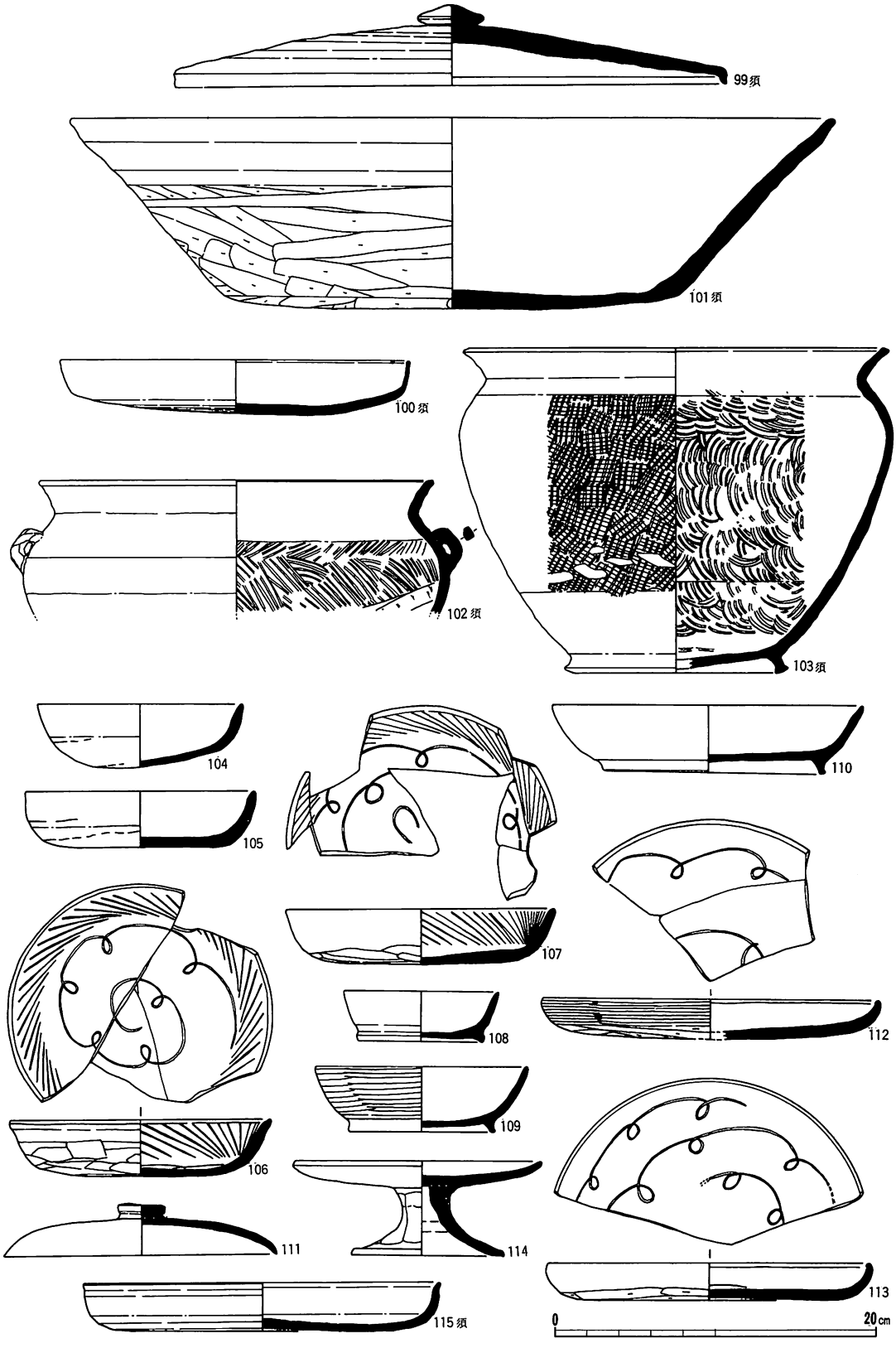
土師器把手付浅鉢 (95) は、底部から口縁部にかけ直線的に大きく開くもので、口縁部をヨコナデし、上半をハケメ調整し、下半を横方向にヘラケズリするものである。体部と直接接合できなかったが、剥落した把手は、手の平の幅ほどもある。

須恵器杯蓋 (99) は口径34.6cmの超大型品である。

須恵器大型浅鉢 (101) は、平坦な底部に、ほぼ直線的に大きく開く体部・口縁部から成り、



第23図　第88次出土遺物　ＳＫ6226；76～98



第24図　第88次出土遺物　ＳＫ6226；99～103、ＳＫ6227；104～115（102・103は１：６）

内外面を粗くヘラケズリし、口縁部をヨコナデ、内面をナデて仕上げる。口径48.0cm、器高12.0cmを測る。

甕B（102）は、口径37.4cmで、口縁部はくの字形に外反し、肩部の張りは、ＳＫ6225出土の（40）に比べ弱い。環状把手は肩部側に付く。体部最大径より上半はナデて仕上げるが、内面にはタタキメの跡がよく残る。体部外面下半はヘラケズリされるようである。

台付広口甕（103）は、口径40.2cm、器高30.4cmで、ＳＫ6228出土の（75）に比べ一回り小さく、底部と体部との境に八の字形に開き両端が肥厚する高台が付く。高台は内端で接地する。口縁の外反は（75）に比べて大きい。

Ｅ．ＳＫ6227出土土器（104～115）

ＳＫ6226と切り合い、これより新しい土坑の一括遺物である。したがってＳＫ6226に廃棄されたものが混入する可能性がある。おもなものに土師器椀・杯Ａａ・杯Ｂ・蓋・皿Ａ・高杯、須恵器皿がある。

土師器杯Ａａ（106・107）は、口径17.0cm、器高3.5cm、径高指数21で、ＳＫ6226出土の杯Ａａ（84）とほぼ同一の法量である。

土師器杯Ｂは小型のものに加え、口径19.3cmの大型のもの（110）もみられる。

土師器皿（112・113）は、いずれも口縁部が内弯するもので、底部に螺施暗文がみとめられる。（112）は、口縁部外面をヘラケズリ後ヘラミガキする。

Ｆ．ＳＫ6210出土土器（116～155）

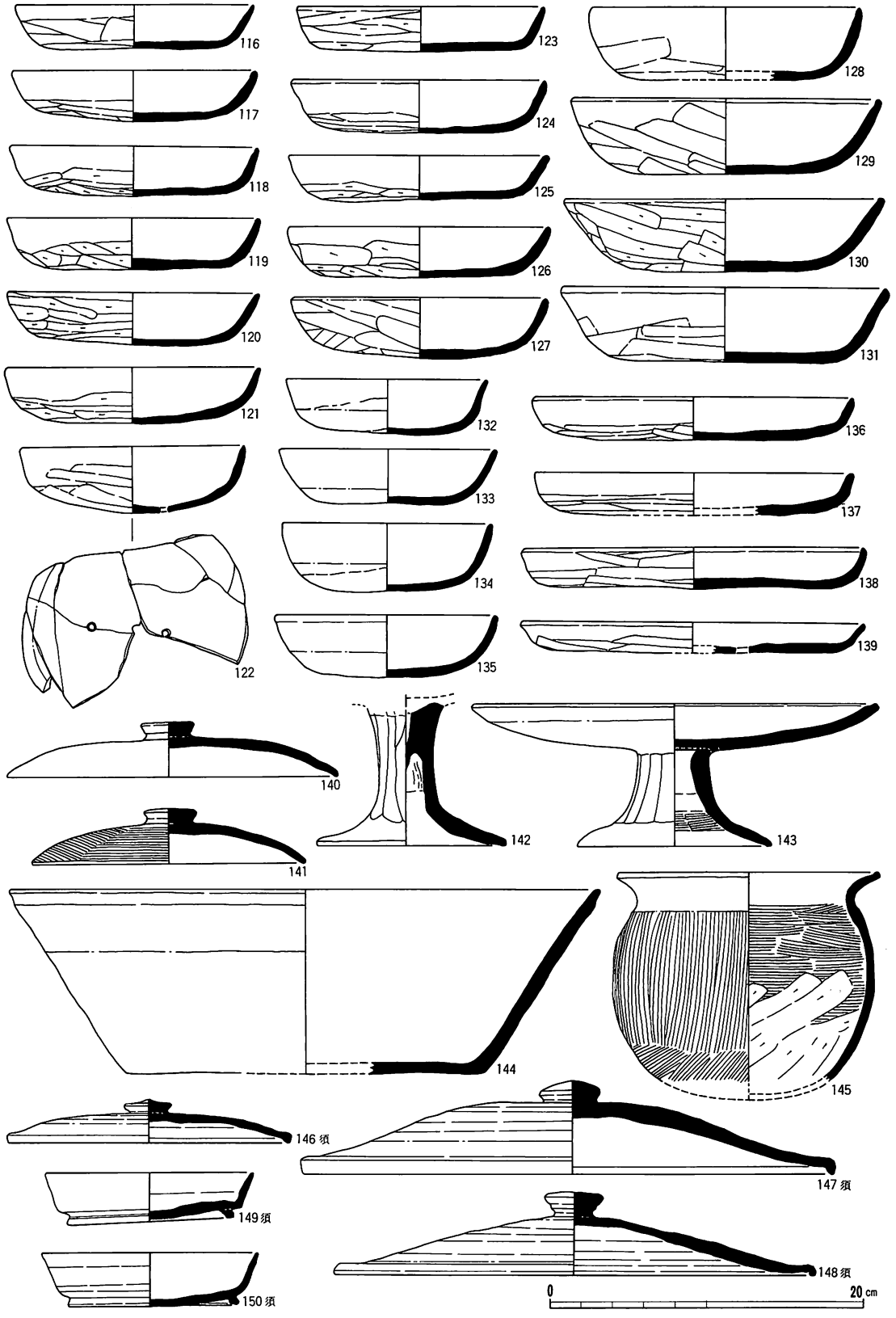
単一の土坑で、しかも遺物の大半が埋土下層からの出土であるので、良好な一括資料とみなし得る。

おもな器種に土師器椀・杯Ａａ・杯Ａｂ・蓋・皿Ａ・高杯・鉢・甕、須恵器杯・蓋・無台盤・長頸瓶・大型浅鉢などがある。

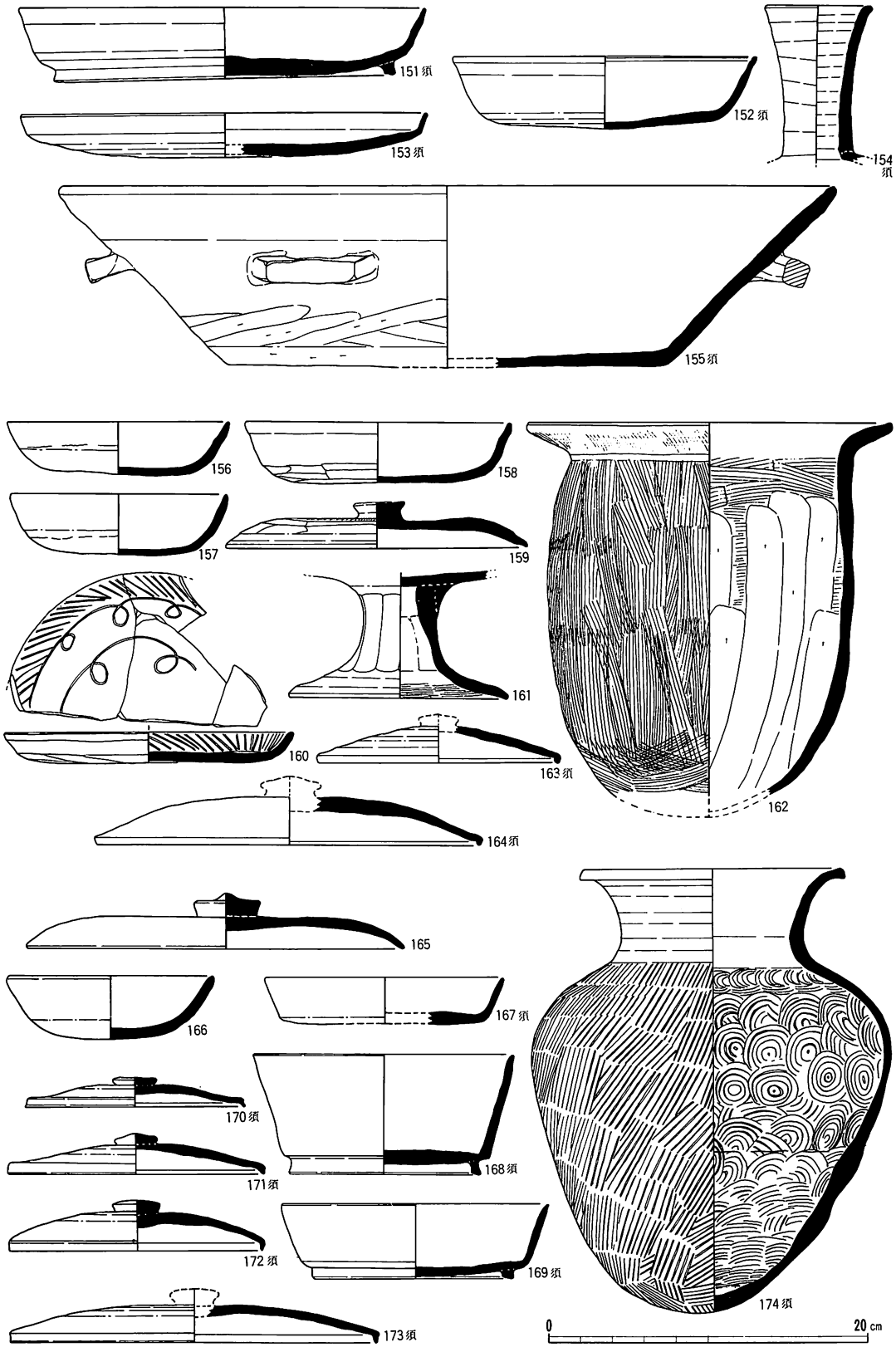
土師器椀（132～135）は、口径13.0cm～14.4cm、径高指数26～33を示し、浅いものや深いものがあり、これまで述べてきたものとあまり変化はない。

土師器杯Ａには、径高指数24以上の深い杯部を呈するもの杯Ａｂ、径高指数17～23の浅い杯部を呈するもの杯Ａaがある。それぞれ法量に応じて杯ＡｂⅠ～Ⅲ、杯ＡａⅠ～Ⅲの３種がある。口径17.4cm～20.4cmの（128～130）が杯ＡｂⅠに、口径16.6cmの（127）が 杯ＡｂⅡに、口径14.5cmの（122）が杯ＡｂⅢに、口径21.0cmの（131）が杯ＡａⅠに、口径16.5cm～16.8cmの（123～126）が杯ＡａⅡに、口径15.4cm～16.2cmの（116～121）が杯ＡａⅢにそれぞれが該当しよう。なお杯ＡａⅡとＡａⅢとは、ＡａⅠとＡａⅡとのような明瞭な法量差はない。器面の調整は杯Ａａ、杯Ａｂともｃ手法が50％以上で、ｂ手法でもｃ手法に近いものである。

皿Ａ（136～139）は、口径22cm前後のもの（138・139）と、これよりやや小さい口径20.4cm



第25図　第88次出土遺物　ＳＫ6210；116～150



第26図　第88次出土遺物　ＳＫ6210；151～155、ＳＫ6221；156～164
ＳＫ6215；165～174（174は１：６）

～21.2cmのもの（136～138）があるが、明瞭な法量差は認め難い。器面の調整はｂ手法とｃ手法がみられる。１点だけ（139）のように、口縁部が外反するようにヨコナデされて、平安型の皿の口縁部に似たものが認められる。またこの皿には、杯（122）と同様、底部に小さな穿孔がある。

なお暗文については、土師器杯・皿類とも器面の残り具合にもよるが、明瞭に認められたものはない。

高杯は、脚柱部の短いもの（143）のほか、これよりやや長いもの（142）もみられる。ヘラによる面取りは、それぞれ14面、15面を数え、幅の狭いものである。

土師器鉢（144）は、平坦な底部に直線的に開く体部・口縁部から成り、口径38.0cm、器高11.9cmの大型品である。底部は未調整で、口縁部はヨコナデし、体部は内外面ともヨコ方向の板ナデを施す。

須恵器杯には、高台の付くもの（149・150）と付かないもの（152）があり、さらに前者には、口径13.3cm～13.8cmの小型品と口径25.3cmの大型品がある。高台はいずれもやや外側へ開く角高台で、底部中央部が接地面近くまで垂れるものである。（152）は、口径19.0cm、器高4.5cmで、全体に器壁を薄く仕上げており、口縁端部内側に段状の沈線が巡るものである。形態的には、土師器杯Ａａに近似しており、これを模倣して製作されたものかも知れない。

須恵器盤（153）は、弧状の底部に鋭く上方に屈曲する口縁部が付く。口径25.5cm、器高2.8cmで、底部をロクロヘラケズリし、口縁端部は丸く仕上げる。

須恵器長頸瓶（154）は、頸部のみで体部は不明。内外にロクロメがよく残り、基部から口縁部にかけ緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、外縁帯を作らないものである。

須恵器大型浅鉢（155）は、ＳＫ6226出土の鉢（101）とほぼ法量が同じで、このタイプに一対の角ばった環状把手を取り付けたものである。

Ｇ．ＳＫ6221出土土器（156～164）

おもなものに土師器椀・杯Ａａ・蓋・皿Ａ・高杯・甕・長甕・把手付甕、須恵器杯蓋・大型浅鉢などがある。

土師器杯Ａａ（158）は、口縁端部が弱く屈曲し外反するもので、形式的に次時期の杯につながっていく特徴をもつ。

土師器皿Ａ（160）は、口径18.0cm、器高2.0cmを測り、ＳＫ6210出土の皿Ａよりも一回り小さいが、内面に螺線暗文と放射状暗文が施される。

土師器長甕（162）は、口縁部のみ大きく外側へ開き、肩や体部があまり張らないもので、口径に対し胴部が短い。

須恵器杯蓋（164）の天井部には、濃緑色の自然釉が厚くかかる。

H．ＳＫ6215出土土器（165～174）

土取りによる破壊から辛じて免れた土坑底部から出土した一群で、良好な一括資料とは言えないが、土師器よりも須恵器の出土量が多かったので敢えて取りあげた。おもなものに土師器椀・蓋、須恵器杯・杯蓋・甕Ａ・甕Ｂなどがある。

須恵器杯には、無台の浅いもの（167）、口径14.4cm、器高7.6cmで杯部が深く高台を有するもの（168）、口径16.8cm、器高4.7cmで杯部の浅い高台を有するもの（169）がみられる。

甕Ａ（174）は、小さな丸底の底部に、肩の張る体部がつき、口縁部が大きく外反するもので、口縁端部外面に内傾する面をもつ。口径24.2cm、器高42.4cmで、暗青灰色を呈する。

Ｉ．ＳＫ2798出土土器（175～196）

遺物の大半が第46次調査で出土していたものであるが、前回未報告であった土師器浅鉢・カマドや須恵器甕類の大型製品が共伴しているので、出土遺物の時期の見直しの問題もあるので再び取り上げることにした。

土師器杯Ａａ（177～179）は、口径16.0cm～16.8cmで、径高指数19～21を示す。器面の調整は３点ともｃ手法である。

土師器皿Ａは、口径21cm前後のもの（180・181）と23.8cmの大型のもの（182）がある。（182）はｂ手法であるが、（180）は、底部をナデて仕上げ、口縁部を弱く外反させる点で次時期につながる新しい要素を内包している。

土師器大型鉢には、ＳＫ6210出土の（144）のように、平坦な底部に直線ないしやや内弯気味に開く体部・口縁部がつき、外面をヘラケズリする（184）と、これより口縁の外反度が強く、上半をハケメ調整し、下半をヘラケズリするもの（185）がある。（184）が口径38.0cm、器高13.0cm。（185）が口径57.6cmである。

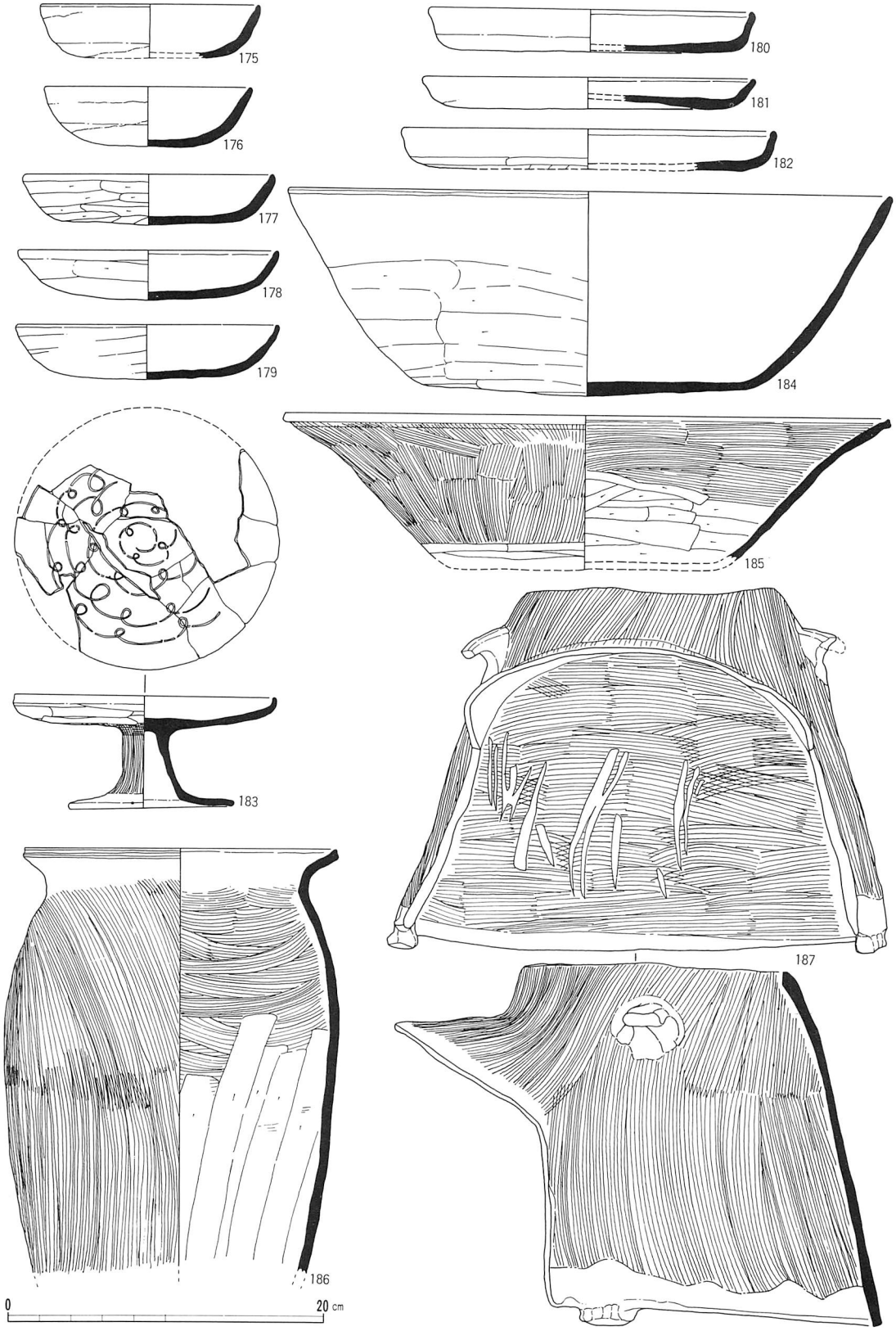
土師器高杯（183）は、口径16.8cm、器高7.1cmで、平坦な皿の外縁が上方に屈曲し、脚柱部はヘラによる面取りではなく、タテ方向のハケメが施される。

ほぼ完形の土師器カマド（187）は、鍔が比較的長く、ほぼ水平に取り付く。上面の内 径は、22cmで、内側をヘラケズリするため、上端の平坦面は６㎜ほどである。最大幅47.5cmで、器高は34.5cmである。

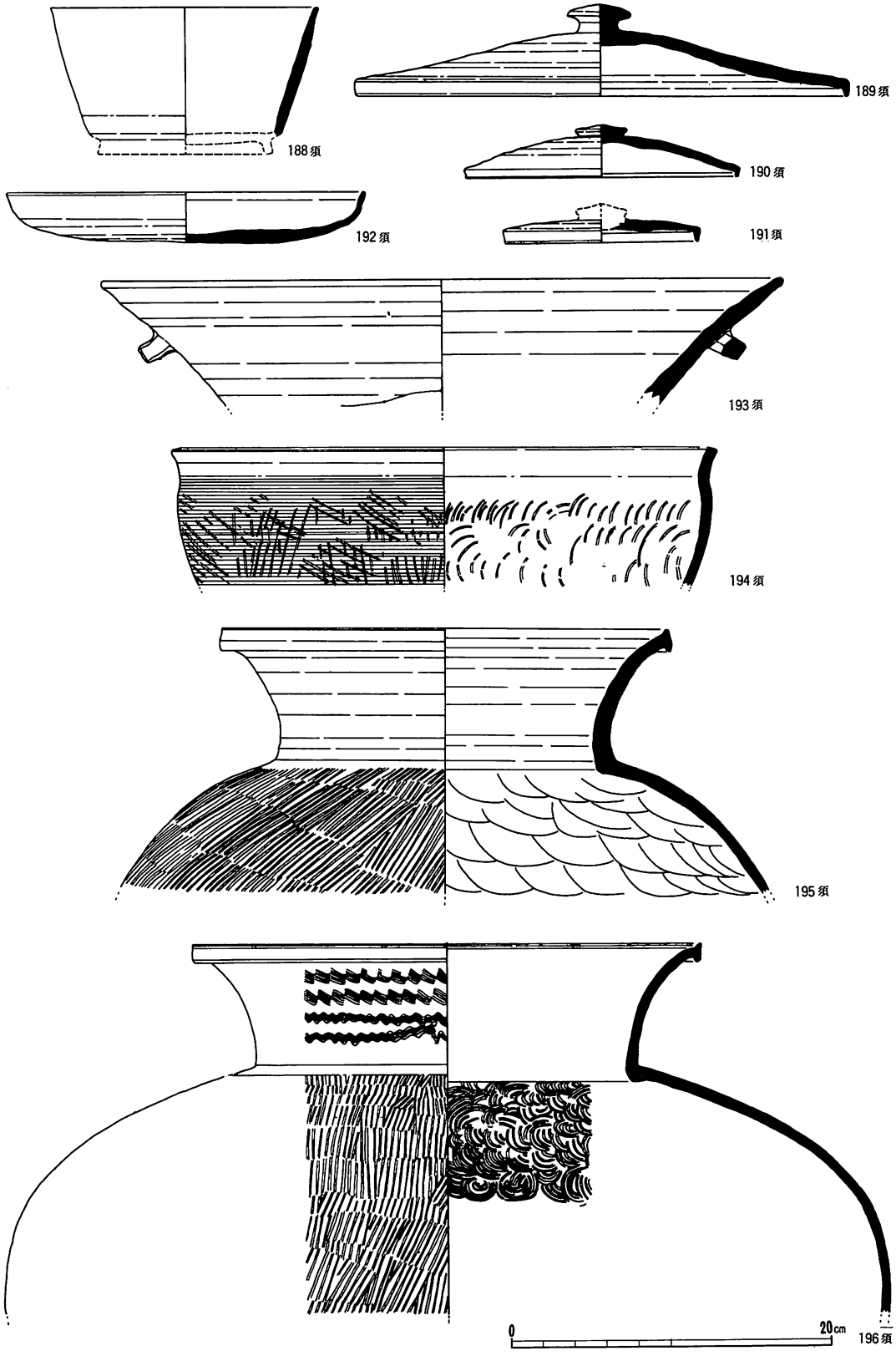
須恵器には、深い杯部を呈する杯（188）、大・中・小の杯蓋（189～191）、盤（192）、大型浅鉢（193）のほか、甕Ｂ（194）や甕Ａ（195・196）がある。

甕Ｂ（194）は、口径50cmを測る。肩がほとんどなく、わずかに外傾する短い口縁部をもつもので、体部内外面に粗いタタキメを残し、さらに外面にカキメを施す。

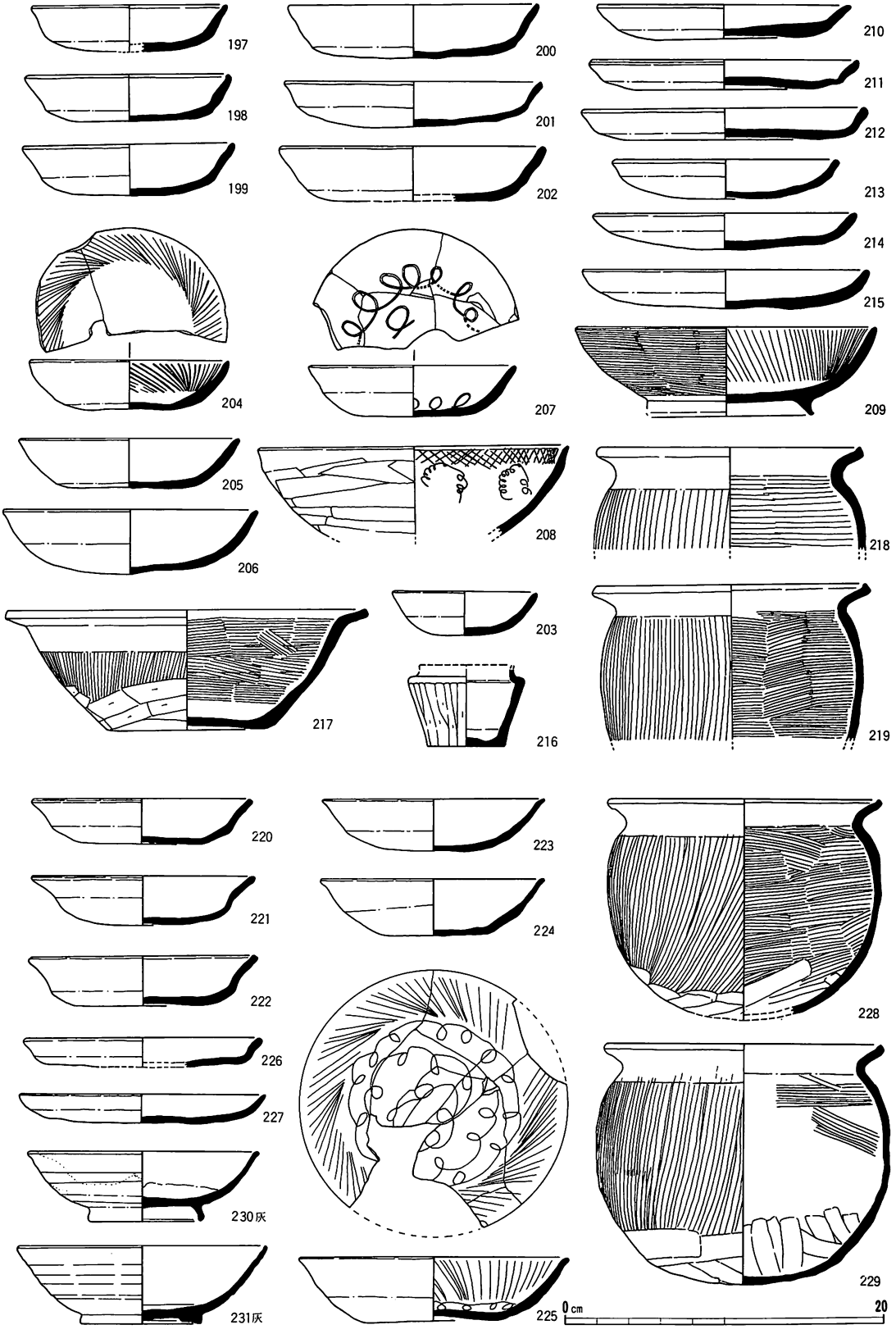
甕Ａ（195・196）の口縁端部は、いずれも上下に肥厚させ、外縁帯を設けるもので、（196）の頸には、４条の櫛描波状文が巡る。（195）は口径28.0cm、（196）は口径64.0cmの大型品である。



第27図　第88次出土遺物　ＳＫ2798；175～187（185・187は１：６）



第28図　第88次出土遺物　ＳＫ2798；188～196（194は１：６、196は１：８）



第30図　第88次出土遺物　ＳＫ6246；197～219、ＳＥ6240；220～231

J．ＳＫ6246出土土器（197～219）

平安時代初期の良好な一括資料として紹介しておく。

土師器杯には、口縁部が外反するもの（197～202）と、椀形を呈するもの（203～208）、これに高台の付くもの（209）がある。それぞれ法量に応じて少なくとも大・中・小の３種がある。外面をヘラケズリし、内面を格子目暗文や変形螺施暗文で飾る（208）は、あるいは高台の付くものかも知れない。

土師器皿も杯の口縁部の形態と呼応し、（210～212）の群と（213～215）の群の２類に分かれ、杯と同様、それぞれ大・中・小の３種がある。

K．ＳＥ6240出土土器（220～229）

黒笹90号窯期の灰釉陶器が共伴し、平安時代前Ⅱ期に位置付けられる一群である。

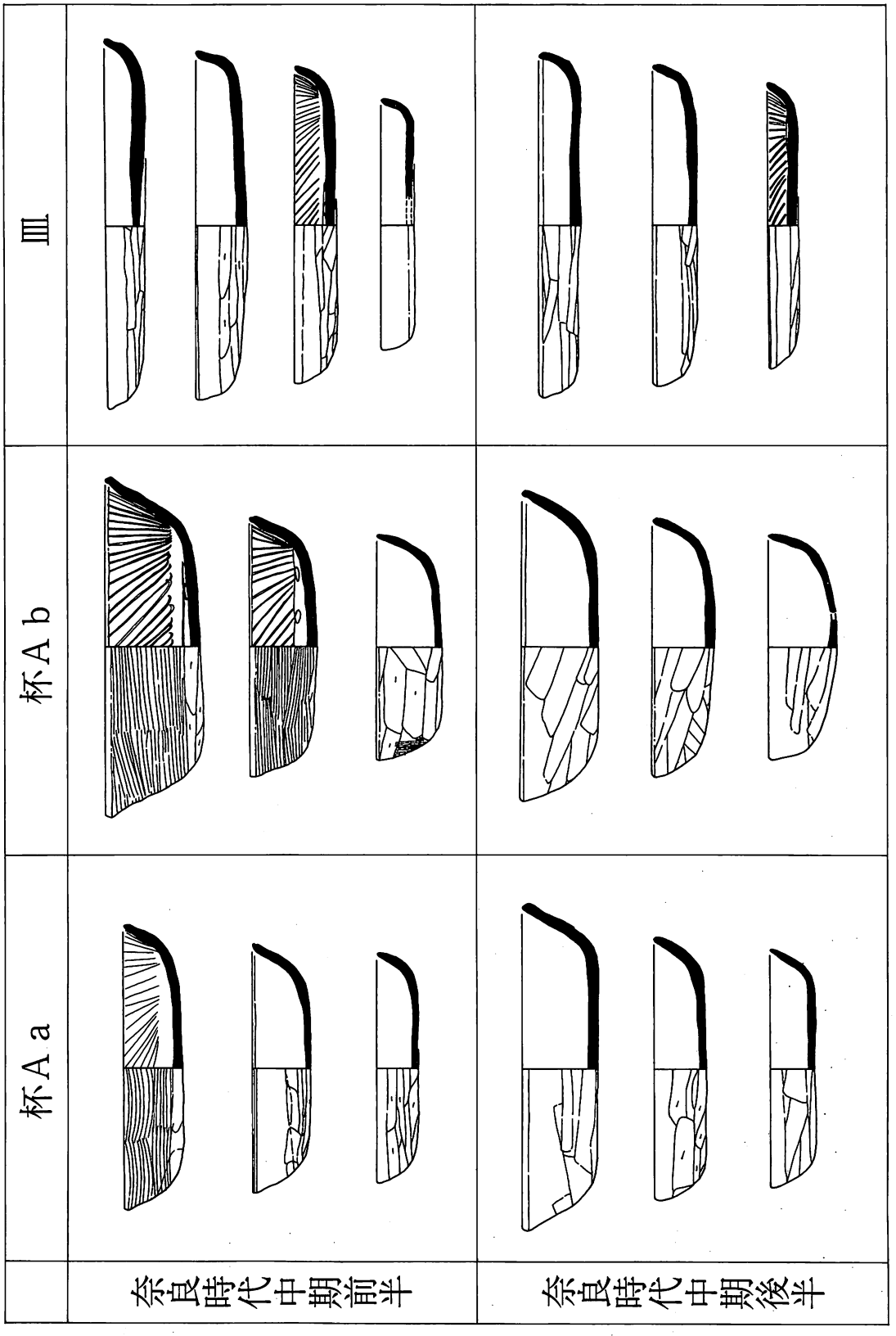
土師器杯・皿は、平安時代初期のＳＫ6246出土のものから系譜をひくすべての種類のものがみられる。ただ器壁や法量が減じ、大・中・小のセット関係は崩れている。土師器甕の器面の調整は、奈良時代のものと大きく変わっていないが、ハケメは若干粗く、体部は球形に近いものとなっている。

以上、奈良時代中期の土器の様相について主として触れてきたが、ここで編年の基準となるべく土師器杯・皿類についてまとめておきたい。共伴する須恵器は、８世紀中葉に位置付けされている岩崎25号窯式に出現をみる杯Ｂや糸切り底の杯（椀）がみられるが、杯蓋は、法量分化が著しく、無台盤についても８世紀前半の高蔵寺２号窯出土のものに類似するものもみとめられる。一方８世紀後半とされる鳴海32号窯式に普遍的にみられる底部外縁の面取り風ヘラケズリが顕著な杯Ｂや、口縁端部を外方へ引き出す盤がみられない。以上の点で共伴する須恵器は概ね岩崎25号窯式の中におさまるものと考えられる。

土師器杯は、暗文が多用化されているか否かで、ＳＫ6225・ＳＫ6220・ＳＫ6228・ＳＫ6226・ＳＫ6227出土の一群とＳＫ6210・ＳＫ6221・ＳＫ6215・ＳＫ2798出土の一群とに大き分けられる。器面の調整においても、前者の一群はｂ手法を主体としながら、ｃ手法やヘラミガキがみられるのに対し、後者の一群では、ｃ手法やこれに近いｂ手法が主体的である。法量をみてみると、径高指数24以上の杯部が深いものと、23以下の浅いものがあり、口径の大きさによってそれぞれ杯ＡｂⅠ～Ⅲ、杯ＡａⅠ～Ⅲのおよそ３つに分かれる。こうした傾向は、前者、後者とも一環して認められるが、後者の方が、中型品と小型品とにおいて法量分化が明瞭でなくなりつつあり、径高指数をみても20前後のものが多く、より偏平化が進んでいる。

土師器皿は、前者の一群も後者の一群も、法量の上で大きな変化は認められないが、後者の中に口縁部が若干外反する新しい要素がみられるものが登場する。

このほか後者の一群には、器面を丁寧にヘラミガキする小型の杯Ｂや、皿Ｂなどもみられな



第29図　奈良時代中期土師器杯・皿

い。

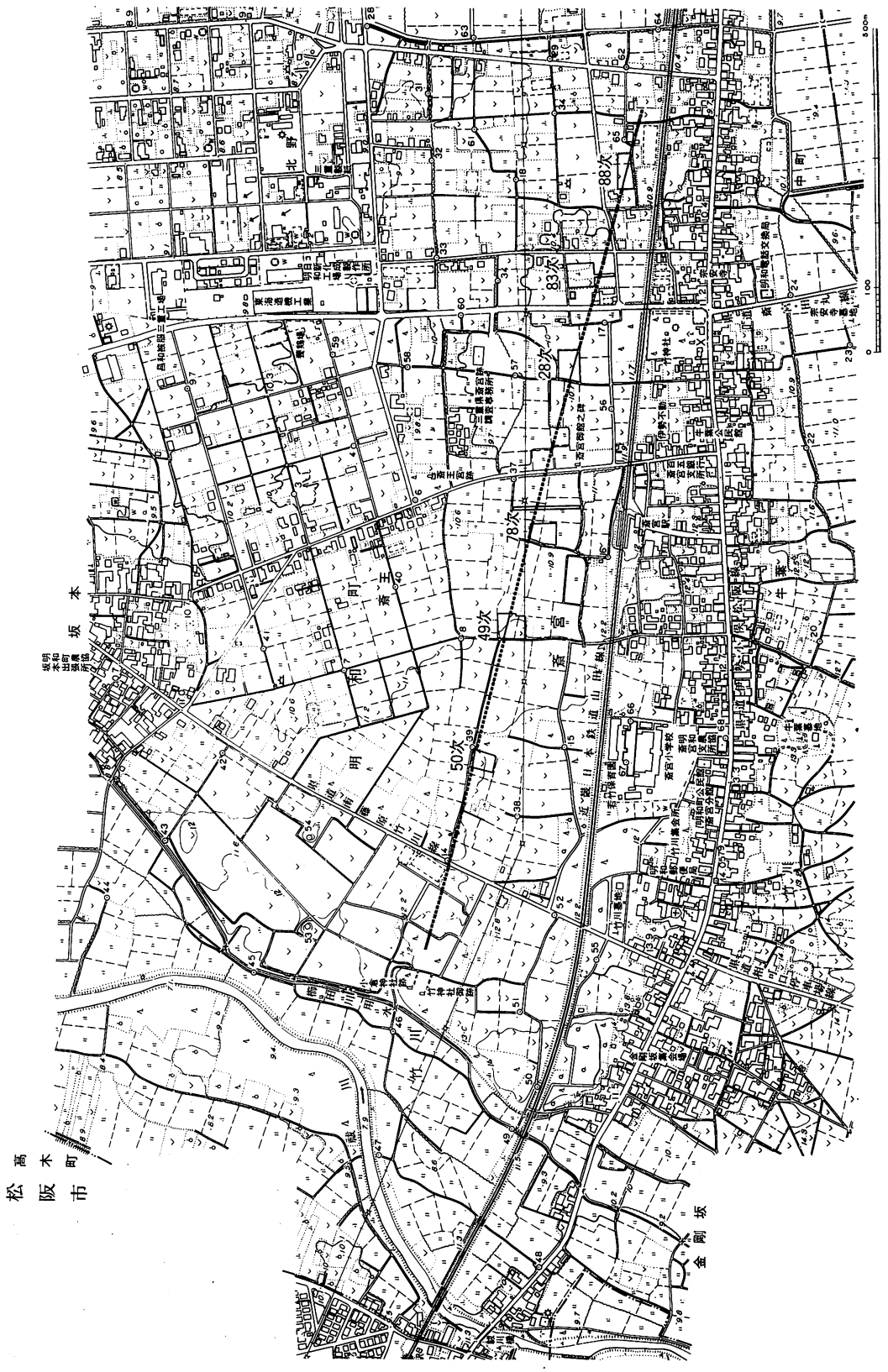
以上のような点で８世紀中葉の中でも、前者の一群の方が、後者の一群よりも古い一群であろうと考えれる。ここでは、一応前者の一群を730～750年に、後者の一群を750～770年頃と考えておきたい。

（11）まとめ

今回の調査で特に注目された遺構として、奈良時代前期の溝ＳＤ2404、大型総柱建物ＳＢ6237・ＳＢ6238、柵列ＳＡ2800、及び奈良時代中期の土坑群がある。

溝ＳＤ2404は、検討した結果、第49次・50次・78次調査で検出の溝ＳＤ170の延長線上に位置することがわかったほか、史跡東部で既に実施した第28次調査で確認のＳＤ1327や第83次調査のＳＤ5855もほぼこの延長線上にのり、溝ＳＤ170は少なくとも総延長１㎞以上にわたり、まっすぐに走ることが確認されるに至った。また第28次・83次・88次調査では、浅くて一部しか確認されていないが、ＳＤ170の南側でもこれに並走する溝の存在が 再確認された。したがってこの溝を道路の南側溝と考えるならば、両溝に狭まれた部分を道路遺構とみてまちがいないであろう。計測値は、溝の心々で8.9ｍ～9.0ｍで、造営当初の平城宮・京の造営尺である一大尺＝35.5㎝をあてはめると約25大尺に復元できる。既に足利健亮氏[5]が指摘されているように、このＳＤ170を側溝とする古道の西への延長線上には、小字の境が明瞭に残っているところや、旧参宮街道に合致する部分や、早馬瀬、駅部田といった駅制に関係する地名が残っているところから、宮道としての性格をもった伊勢神宮への道（伊勢古道）の存在が想定される。なお、溝ＳＤ170の埋土の土器は、斎宮跡土師器編年のＳＫ3000に相当し、８世紀前半には埋没が始まっており、しかも50次調査では、中層・上層からの出土が多いとされているところから、奈良時代でも早い時期に埋まったものと考えられる。しかし史跡東部の基盤目状区画の西限以西では、少なくとも平安時代後～末期までＳＤ170と同一方向の溝が存続しており、掘立柱建物の方向もこれに揃うものが認められる点に着目すれば、道としての機能は基盤目状区画の外では、この頃まで存続していたものと思われる。

次に大型掘形をもつ総柱建物について触れておきたい。第46次調査のＳＢ2780及びＳＢ2810の建物を合わせ、計４棟の倉庫と考えられる総柱建物が集中して検出されたことになる。これほどの規模をもつ総柱建物の検出例は、今のところ当地を除いてはない。これら４棟の建物は、時期を検討した結果、倉庫群を形成していたものではなく、奈良時代中期から平安時代初期の間で、順次ＳＢ2780→ＳＢ6238→ＳＢ6237→ＳＢ2810の順で建て替えられたものと思われる。一方この倉庫の機能についてであるが、奈良時代中期以降の土坑出土の土器は、多量の土師器、須恵器の食器類や須恵器甕類などの貯蔵用製品が主体をなす点や、ＳＫ2798から須恵器杯あるいは盤と思われる底部に「膳」という文字を墨書したものが出土している点、長期間一定の場


松阪市
高木町
坂本
明和町
金剛坂
竹川
宮前
宮町
中町
牛葉
北野
明和町役場
明和町農業委員会
明和町教育委員会
明和町農業共同組合
明和町農業共同組合
明和町農業共同組合

所に倉庫としての機能をもった大型総柱建物を維持せねばならなかった必然性等を考慮すれば、これら4棟の建物を膳部司にかかわる、食器類や穀物などを保管する倉庫とみなすことも可能であろう。

柵列ＳＡ2800については、南へ12間以上延びることが確認されたが、残念ながらこれに取り付く門や、ＳＢ2790以外、柵内の建物は検出されなかった。この柵列と柱間も同じで柱掘形の規模もよく似た柵列が、これより約165ｍ西で第44次調査[6]のＳＡ1411として確認されているが、柱間2.96ｍで計るとこれに合わないところから、両柵列はそれぞれ別の区画を形成するものと考えられる。なお、ＳＡ2800の東西方向の柵列と並行する区画溝ＳＤ2400との関係については、目下方向がＥ４°Ｎで同じであるところから同時期と考えているがＳＡ2800が西へ折れて約41ｍのところに南北方向の区画溝が想定されるところから、次年度の調査でここに区画溝が検出されればその前後関係については明らかになるであろう。もし区画溝が検出されなかった場合は、一辺120ｍの溝による区画とは異なる新たな 柵列による区画を鍛冶山地区では想定せねばならないであろう。

この柵列の東側では、これとほぼ同時期と思われる３間×２間の小規模な建物が最も多い時で数棟建ち並ぶが、西加座地区で検出されている同時期の官衙を構成する中心的な建物群とは比ぶべくもない。

遺物では、斎宮跡土師器編年の奈良時代中期の標式遺構となっていたＳＫ1098以外にこの時期の良好な土坑一括資料が得られた。今回、土師器杯・皿の法量変化や器面の調整法の変化に着目し、奈良時代中期の土器を750年を境として、中期前半の一群と中期後半の一群とに編年を試みた。なかでも中期後半と考えた一群が現在奈良時代末期～平安時代初期と考えている一群とどうかかわるのか、あるいは、両時期を埋める土器群がいかなる様相を呈するのかは、今後の課題である。

〔注〕

① 第46次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』

② 第21-1次調査『斎宮跡発掘調査概報Ｉ』三重県教育委員会1979

③ 第41次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』

④ 楢崎彰一・斎藤孝正『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会1984

⑤ 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道』第一巻1988

⑥ 第44次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』

掘立柱建物・塀一覧表

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第86次調査（6AFH－F・G・H）								
6000	4×2	E 4°N	9.6	5.2	2.4	2.6	奈良後	SB6037より古 SB6040より古
5920	5×2	E 4°N	12.5	4.8	2.5	2.4	平安初	第84-2次調査で検出
6020	5×3	E 4°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	南面廂　廂柱間2.7m
6021	5×2	E 4°N	12.5	4.8	2.5	2.4	〃	
6028	(3)×2	E 3°N	－	3.8	2.0	1.9	〃	
6037	(3)×2	E 4°N	－	4.8	2.5	2.4	〃	
6040	4×2	E 4°N	－	5.2	2.4	2.6	〃	SB6037より古
6055	(4)×3	E 3°N	－	4.8	2.2	2.4	〃	南面廂　廂柱間2.4m
6076	(1)×2	N 3°E	－	3.8	－	1.9	〃	
5924	(4)×2	E 4°N	－	5.0	2.4	2.5	平安前Ⅰ	第84-2次調査で検出 SB6051より古
6051	(4)×2	E 0°	－	4.6	2.2	2.3	〃	
6063	3×2	E 6°N	6.6	3.8	2.2	1.9	〃	
6068	(2)×2	E 2°N	－	3.8	2.2	1.9	〃	
6077	(1)×2	N 2°E	－	3.8	－	1.9	〃	
6010	(5)×2	E 4°N	－	4.6	2.3	2.3	平安前Ⅱ	
6052	(4)×2	E 0°	－	3.8	2.0	1.9	〃	
6019	3×(2)	N 2°W	5.7	－	1.9	1.9	〃	
6022	(2)×2	E 2°N	－	3.6	1.7	1.8	〃	
6023	(2)×2	E 3°N	－	4.8	2.4	2.4	〃	
6024	(3)×2	E 2°N	－	3.7	1.8	1.85	〃	
6025	(1)×2	E 2°N	－	4.0	－	2.0	〃	
6029	3×2	N 3°W	6.0	3.4	2.0	1.5 1.9	〃	柱間不揃い
6067	(1)×2	E 0°	－	3.6	－	1.8	〃	
6074	(4)×2	E 4°N	－	－	2.4	2.2	〃	
6075	(2)×(1)	E 3°S	－	－	2.0	－	〃	
6079	3×(2)	N 0°	6.0	－	2.0	2.0	〃	SB6019より古
6080	(3)×2	E 2°N	－	4.4	2.4	2.2	〃	
6016	3×2	E 3°N	5.7	3.9	1.9	1.85	平安中	
6026	3×2	N 0°	5.4	3.4	1.8	1.7	〃	
6036	(3)×2	E 3°N	－	3.8	2.0	1.9	〃	
6038	3×2	E 7°N	4.5	3.5	1.5	※	〃	※梁行西3間（柱間1.17） 梁行東2間（柱間1.6＋1.9）
6057	3×2	E 2°S	6.0	3.9	2.0	1.95	〃	
6059	(2)×2	E 7°S	－	3.8	2.4	1.9	〃	
6069	(2)×2	E 3°S	－	3.6	2.0	1.8	〃	
6078	(4)×(1)	E 2°N	－	－	1.8	－	〃	

ＳＢ	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時　期	備　　考
					桁行	梁行		
第87次調査（６ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ）								
6090	６×３	Ｅ９°Ｎ	11.5	4.8	1.92	1.6	奈良前	ＳＢ6098より
6091	４×２	Ｅ９°Ｎ	8.0	4.0	2.0	2.0	〃	
6135	４×２	Ｎ13°Ｗ	7.7	4.0	1.92	2.0	〃	
6143	４×－	Ｎ７°Ｅ	4.0	－	2.0	－	〃	
6123	(4)×２	Ｎ９°Ｅ	－	4.0	2.7	2.0	奈良中	ＳＢ6121より新しい
6124	４×２	Ｅ２°Ｓ	8.0	4.0	2.0	2.0	〃	ＳＢ6121･6130より新しい
6092	３×３	Ｎ３°Ｅ	4.3	4.0	1.43	2.0	奈良	総柱、ＳＢ6098寄り新しい
6109	(3)×－	Ｎ８°Ｗ	－	－	1.5	－	〃	
6112	(3)×－	Ｎ４°Ｅ	－	－	1.5	－	〃	
6116	(5)×３	Ｎ４°Ｅ	－	4.8	1.8	1.6	〃	ＳＫ6117より古い
6158	５×２	Ｅ11°Ｓ	9.4	4.2	1.9	2.1	〃	
6201	(3)×－	Ｅ16°Ｎ	－	－	2.0	－	〃	
6131	４×３	Ｅ８°Ｓ	8.6	6.1	2.15	3.05	平安後Ⅱ	総柱、柱穴に川原石南東隅土拡
6155	４×２	Ｅ11°Ｓ	8.6	4.6	2.15	2.3	〃	
6157	３×(2)	Ｎ13°Ｅ	7.4	－	2.47	2.4	〃	
6159	３×２	Ｎ13°Ｅ	6.3	4.4	2.1	2.2	〃	ＳＫ6161・6163より古い
6160	３×２	Ｅ12°Ｓ	6.0	4.1	2.0	2.05	〃	ＳＫ6161より古い
6106	３×２	Ｅ７°Ｓ	7.0	4.1	2.33	2.05	平安末	
6111	(4)×２	Ｅ13°Ｎ	－	2.8	1.5	1.4	〃	
6150	４×２	Ｅ９°Ｓ	9.6	4.2	2.4	2.1	〃	
6170	３×２	Ｅ６°Ｓ	6.3	3.9	2.1	1.95	鎌倉前	四面廂　廂柱間、東2.2、南1.7 西2.0、北1.9
6174	４×３	Ｅ４°Ｓ	8.3	5.3	2.07	1.77	〃	ＳＢ6170より新しい 柱穴に川原石
6119	４×３	Ｅ５°Ｓ	8.1	5.8	2.02	1.93	鎌倉中	総柱、柱穴に川原石
6120	３×３	Ｅ３°Ｓ	6.3	4.7	2.1	2.35	〃	総柱、柱穴に川原石 南東隅土拡
6134	３×－	Ｅ６°Ｓ	6.3	－	2.1	－	鎌倉後	
6162	３×２	Ｎ９°Ｅ	6.1	3.6	2.03	1.8	〃	
6165	５×５	Ｎ12°Ｅ	8.6	8.3	1.72	1.66	〃	総柱、柱穴に川原石 南東隅土拡
6180	３×３	Ｅ８°Ｓ	5.9	5.3	1.97	1.77	〃	総柱、柱穴に川原石 ＳＢ6186より新しい
6185	４×２	Ｅ５°Ｓ	8.6	3.9	2.15	1.95	〃	
6186	３×２	Ｎ10°Ｅ	5.2	3.7	1.73	1.85	〃	ＳＢ6180より古い
6187	３×２	Ｎ12°Ｅ	5.2	4.0	1.73	2.0	〃	柱穴に川原石
第88次調査（６ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ）								
2780	４×３	Ｅ５°Ｎ	7.3	6.1	1.83	2.43	奈良中	総柱建物
6237	３×２	Ｅ３°Ｎ	6.0	4.9	2.0	2.45	奈良後	総柱建物ＳＢ6238より新しい
6238	３×３	Ｅ３°Ｎ	5.7	5.2	1.9	1.73	〃	総柱建物
6232	３×２	Ｎ０°	6.0	3.9	2.0	1.95	平安初	ＳＢ6233より新しい
6233	３×２	Ｎ３°Ｗ	5.7	3.6	1.9	1.8	〃	
6234	３×２	Ｅ１°Ｓ	6.3	4.2	2.1	2.1	〃	ＳＫ6235より新しい

ＳＢ	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時　期	備　　考
					桁行	梁行		
6241	3×2	E 3°N	5.7	3.7	1.9	1.85	平安初	
6242	3×2	E 3°N	6.1	4.0	2.03	2.0	〃	ＳＢ6241より新しい
2790	4×2	N 4°W	8.9	4.4	2.23	2.2	〃	
2391	3×2	E 3°N	5.5	3.8	1.83	1.9	〃	
2800		N 4°W	－	－	－	－	〃	柵列、柱間2.96m
6251	(2)×3	E 1°N	－	7.2	1.7	2.3	平安前Ⅰ	南面廂付建物　廂柱間2.6m
2390	3×2	E 1°N	5.8	4.0	1.93	2.0	平安前Ⅱ	ＳＢ2391より新しい
6219	3×2	E 4°N	5.6	3.3	1.87	1.65	不明	
2407	(4)×－	E 3°S	－	－	1.9	－	〃	
2405	(2)×2	E 0°	－	4.1	2.4	2.05	〃	ＳＫ2402より新しい

竪穴住居一覧表

ＳＢ	規　模(m)	長軸方向	深さ(cm)	桂穴	カマド	時　期	備　　考
第87次調査（6ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ）							
6098	4.0×3.2	E 7°S	20	－	東壁	奈良前期	ＳＢ6090・6092より古い
6099	4.0×3.5	E 7°S	6	－	東壁	〃	ＳＢ6098より新しい
6100	2.9×2.6	N14°E	16	－	北壁	〃	
6105	4.5×3.6	E11°S	15	－	東壁	〃	ＳＢ161より古い
6121	3.1×2.8	N 9°W	20	－	北壁	〃	ＳＫ6118より古い
6125	4.3×4.0	N 9°W	20	－	北壁	〃	
6130	5.1×3.9	E 8°S	30	－	北壁	〃	ＳＫ6128より新しい
6146	－×－	E 7°N	10	－	－	〃	
6168	4.1×－	N 4°W	6	－	東壁	〃	
161	3.3×3.3	E 6°S	25	－	東壁	〃	
6144	3.1×－	E 7°N	－	－	－	奈良	

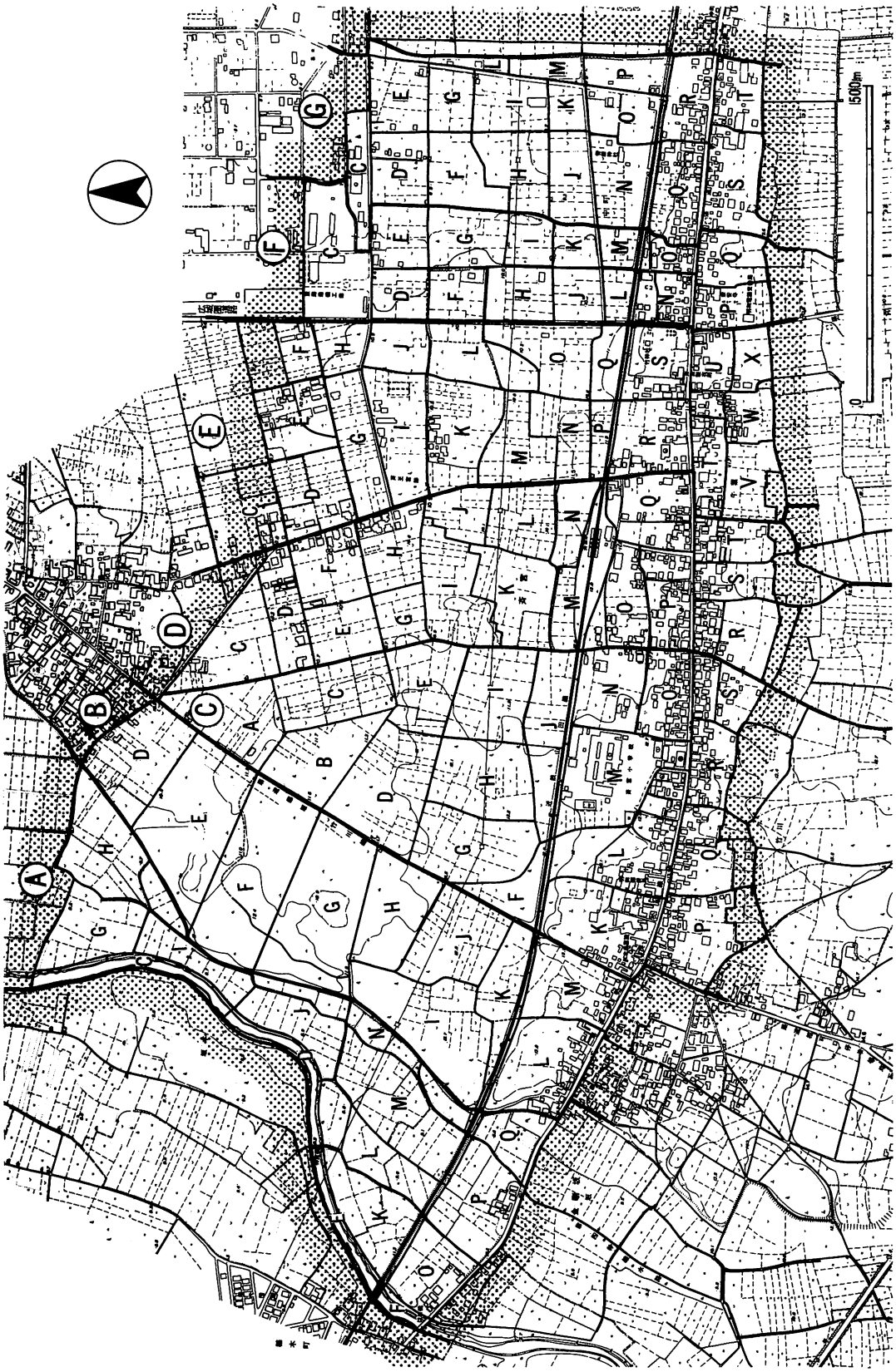
斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区
1	S45	試掘
2	46	古里A地区
3		B地区
4	47	C地区
5	48	D地区
6－1		Aトレンチ
6－2		Bトレンチ
6－3		Cトレンチ
6－4		Dトレンチ
6－5		Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1		Fトレンチ
8－2		Gトレンチ
8－3		Hトレンチ
8－4		Iトレンチ
8－5		Jトレンチ
8－6		Kトレンチ
8－7		Lトレンチ
8－8		Mトレンチ
8－9		Nトレンチ
8－10		Oトレンチ
8－11		Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2		Rトレンチ
9－3		Sトレンチ
9－4		Tトレンチ
9－5		Uトレンチ
9－6		Vトレンチ
9－7		Wトレンチ
9－8		Xトレンチ
9－9		Yトレンチ
9－10		Zトレンチ
10		広域圏道路
11－1		西加座2661－1（山中）
11－2		〃 2681－1（山名）
11－3		東前沖2483－2（前田）
11－4		下 園2926－9（吉木）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2		2Bトレンチ
12－3		2Cトレンチ
12－4		2Dトレンチ
13－1		西加座2436－7（浜口）
13－2		〃 2436－4（中村）
13－3		古 里3283（村上）
13－4		楽 殿2916～2917（松井）
13－5		御 館2974－1（川本）
13－6	51	中垣内375－1（南）
13－7		東 裏328（小川）
13－8		西加座2771－1（細井）
13－9		〃 2773（細井）
13－10		東 裏362－1（児島）
13－11		西加座2681－1（浮田）
13－12		〃 2721－3，2724－2（森川）
13－13		東前沖2506－2（宮下）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2		2Fトレンチ
14－3		2Gトレンチ
14－4		2Hトレンチ
14－5		2Iトレンチ
15		斎宮小学校
16－1		竹川町道A
16－2		〃 B
16－3		〃 C
16－4		〃 D
16－5		〃 E
16－6		〃 F
17－1		竹神社社務所
17－2		竹神社防火用水
17－3		西加座2721－6（西沢）
17－4		楽 殿2894－1（中川）
17－5		〃 2895－1（西口）
17－6		出在家3237－3（吉川）
17－7		〃 3237－1（里中）
17－8		楽 殿2894－1（西村）
17－9		東海造機
18	53	6AEL－E・I（下園）
19		6AEN－M・N・O（御館）
20		6AEO－I・J（柳原）
21－1		6AGN－B（鍛冶山、中山）
21－2		6AFI－D（西加座2711-2,2717-4他、山路）
21－3		6AFD－D（西前沖2649－1、大西）
21－4		6AFH－F（西加座2678，2679－3、森下）
21－5		6AGD－K（東前沖、渡部）
21－6		6ACA－T（古里3269－2、中西）
21－7		6AFE－F（東前沖2631－1、鈴木）
21－8		6AEG－A（楽殿2909－3、大西）
21－9		6AED－R（篠林3218－3、宇田）
22－1		6AGU
22－2		6AGU
22－3		6AGW
23	54	6AEL－B（下園）
24		6AGF－D（西加座）

次	年度	調査地区
25－1	54	6ADP－K（牛葉3029-1、三重土地ホーム）
25－2		6ACA－Y（古里3270、脇田）
25－3		6ADD－F（篠林3139－3、池田）
25－4		6AER－H（牛葉3014、牛葉公民館）
25－5		6AGN－H（鍛冶山2392、丸山）
25－6		6AFH－A（西加座2675－5、谷口）
25－7		6AEK－V（下園2926－10、奥田）
25－8		6AFC－D（西前沖2064－5、山本）
25－9		6ACN－C（広頭3387－1、北出）
25－10		6AEV－A（鈴池339－1、永島）
25－11		6ACF－B（東裏364－1、沢）
25－12		6AEE－Y（楽殿2892－3、山本）
25－13		6AFJ－E（西加座2766－1、山内）
26－1		6AFR（中西）
26－2		6AEX～6ACQ（鈴池、木葉山、南裏）
26－3		6AEV・W・X（鈴池）
26－4		6ACR（木葉山、南裏）
27		6ACG－S・T（東裏）
28		6AEO－D（柳原）
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W（中垣内）
31－1		6ADO－M（内山3038－13、岩見）
31－2		6ACP－I（南裏227－2、鈴木）
31－3		6ABD－A（古里588－4、北藪）
31－4		6ADQ－T（牛葉3018－2、百五銀行）
31－5		6ACC－G（塚山3338－3、水谷）
31－6		6ABO－X（古里576－1、池田）
31－7		6AGI－L（東加座2427－1、竹内）
31－8		6ACN－G（広頭3388－1・5・8・9、森）
31－9		6AGD－L（北野2487－1、中川）
31－10		6ADM－O（内山3043－3、斎宮駅）
31－11		6ADT－I（木葉山304－2、澄野）
31－12		6ADT－J（木葉山304－7、宇田）
32		6ACE－D・E・F（塚山）
33		6ADE－C・D他（篠林）
34		6AFK－F・G・H（西加座）
35		6APE他（西前沖）
36	56	6ABI－F（中垣内）
37－1		6AFC－M（西前沖2064、日本経木）
37－2		6ADQ－R（牛葉3021－2、野田）
37－3		6AFC－F（西前沖2604－6、押田）
37－4		6AFC－M（西前沖2604、日本経木）
37－5		6AFC－G（西前沖2064－7、中村）
37－6		6ABD－A（古里588－2、北藪）
37－7		6AEC－M（苅干2861－2、斎王公民館）
37－8		6ADR－P（木葉山128-8・13・14、富山）
37－9		6AGK－E（東加座2355－1、竹内）
37－10		6AED－O（楽殿3217－1、渡部）
37－11		6ADN－O（内山3043－3、斎宮駅）
37－12	56	6AFH－J（西加座2681－1・3・4、渋谷）
37－13		6AGK－F（西加座2385-3, 2386-3、竹内）
38		6ACD－S（塚山）
39		6ABD－R・S・T（古里）
40		6AGH－L・M（東加座）
41		6AGJ－J他（斎宮地内）
42－1	57	6AEI－D・F（楽殿）
42－2		6AEK－A・B（楽殿）
43－1		6ADC－C（出在家3235－2、永田）
43－2		6ADT－B（木葉山308－1、山本）
43－3		6ACP－T（南裏241－1、辻）
43－4		6ADS－D（牛葉123－3、西山）
43－5		6ADE－D（篠林3220－3、澄野）
43－6		6AGE（東前沖、町道側溝）
43－7		6ABD－F（古里588－6、今西）
43－8		6ADQ－H（牛葉3025－2、大西）
44		6AFL－A・B（鍛冶山2759－1、他）
45		6AEG－P・Q（楽殿2904－2、他）
46		6AGN－C・D（鍛冶山2737－1、他）
47		6ADJ－D・G他（西加座、御館、宮ノ前、上園）
48－1	58	6ACM－M（広頭3385、斎宮小）
48－2		6ADP－Q（牛葉3033－1・2、吉田）
48－3		6ABL－M（中垣内434－6、西川）
48－4		6AGL－B（東前沖2480、倉田）
48－5		6AGD～6AFE（東前沖、町道側溝）
48－6		6AGC－A（西前沖3550－1、今西）
48－7		6ADT－H（木葉山307、森西）
48－8		6ACL－E・F・G（東裏334－15、他）
48－9		6AEV－J（鈴池341－1、乾）
48－10		6AGT（牛葉、町道側溝）
48－11		6ADP－E（鍛冶山2351-1, 2352-1、柳原）
48－12		6AFC－H（西前沖2604－8・9、清水）
48－13		6ACM－O（東裏、斎宮小）
48－14		6AET（牛葉、町道側溝）
49		6ADI－D・U・V・W・X（上園3083、他）
50		6ACH－H（東裏294, 297、山本）
51		6AFF－D（西加座2663-1・4, 2664、森下）
52		6AGF－D（西加座2703、他）
53－1	59	6ACM－P（東裏284、体育館）
53－2		6ACA－M（古里3280－2、中西）
53－3		6ABE（古里573－2、永納）
53－4		6ACL－S（東裏271－1、田所）
53－5		6ACR（木葉山97－5、田中）
53－6		6AGO（鍛冶山、町道側溝）
53－7		6ADD－U（篠林3147－3、野呂）
53－8		6AGE－O（東前沖2470－2、上田）
53－9		6ACS－O（木葉山95－2、浅尾）
53－10		6ACA－R（古里3267－1、西川）
53－11		6ADR－W（木葉山131－7、西村）

次	年度	調査地区
53－12	59	6ABL－K（中垣内464－2、沢）
53－13		6ADQ－L（牛葉3022、辻）
53－14		6ACM－O（東裏287－3、体育庫）
53－15		6AFK－C・D（西加座2721－1、鈴木）
54		6AFE－N（西前沖2630、他）
55		6AEN－P（柳原、御館2785－1、他）
56		6ACH－S（東裏289－1、他）
57		6AGF－H・I（東加座2441、他）
58－1	60	6AFK－C・D（西加座2721－1、鈴木）
58－2		6AFH－N（西加座2681－8、三村）
58－3		6ACM－N（東裏3385－2、斎宮小）
58－4		6ABL－A（中垣内4731－1、小家）
58－5		6ADQ－Q（牛葉、町道側溝）
58－6		6ADR－V（木葉山131－3、西山）
58－7		6AGS－G（中西611、山路）
58－8		6ABM－A（中垣内430－3 他、近鉄）
59		6ACJ－I（広頭3379－1、他）
60		6AGJ－B・D・G（東加座2450－1、他）
61		6AFF－H・I・D（西加座2663－1、他）
62		6AGI－J・K（東加座2425、他）
63		6AFG－M・N（西加座2659－1、他）
64－1	61	6ACO－H（牛葉3395－1、トーカイ）
64－2		6AGL－F（東加座2435－1、大和谷）
64－3		6ADD－A（篠林3136－1、山路）
64－4		6AGR－N（笛川2340、丸山）
64－5		6ACM－R・Q・P（東裏3385－2、斎宮小）
64－6		6ACK（東裏361－2、竹川自治会）
64－7		6AGI－G（東加座2435－2、大和谷）
64－8		6AGR－J（笛川2341－6、山下）
64－9		6ADQ－M（牛葉、町道側溝）
64－10		6ACF－A（東裏365－1、樋口）
64－11		6ACM－O（東裏3385－2、斎宮小）
64－12		6ADE－B（篠林3162－3、江崎）
65－1		6ACC－M（塚山3331－1）
65－2		6AEG－S（楽殿2908－2、他）
65－3		6AEI－L・M（楽殿2917－4、他）
66		6AGG－C（東加座2437－1、他）
67		6ABF（古里523、他）
68		6ABF（古里502、他）
69		6AGM－E～H（東加座2373、他）
70－1	62	6ACC－X（塚山3325－1、江崎）
70－2		6AEE－W（楽殿2875－2、岡田）
70－3		6ADR－I（木葉山129－5、大西）
70－4		6ACN－A・B・E・L（広頭3389－8、林）
70－5		6AEW－A（鈴池333－1、八田）
70－6		6ABL－S（中垣内430－6、奥山）
70－7		6AEE－T（楽殿577、浅尾）
70－8		6AEU・6AEX－A（牛葉、鈴池、三重県）
70－9		6AEP－C・D（御館、柳原、近鉄）
70－10	62	6AFD－B・D（西前沖2649－4、大西）
70－11		6AGO－H（鍛冶山2363－2、川合）
70－12		6ADD－F・G（篠林3158、長谷川）
70－13		6AEC－N・G（苅干、佐藤）
70－14		6ABL－R（中垣内459、北岡）
70－15		6AFD－A（西前沖2644－1、山本）
70－16		6ACB－A他（町道塚山線拡幅）
71		6ABE（古里501、他）
72－1		6ABE（古里500、他）
72－2		6ABF（古里523、他）
72－3		6ABF（古里551－2、他）
72－4		6ABF（古里528－1、他）
73		6AFF－B・C・E・G（西加座2663-5、他）
74－1		6ABF（古里523、他）
74－2		6ABF（古里522、他）
74－3		6ABE・F（古里524、他）
74－4		6ABE（古里548－1、他）
74－5		6ABE（古里543、他）
75		6AGF－C（西加座2702、他）
76－1	63	6ADB－A～D（町道塚山線拡幅）
76－2		6ADE－F・G（篠林3158、長谷川）
76－3		6ABE（古里554、明和町）
76－4		6ACK（東裏354－13、山際）
76－5		6AEE－W（楽殿577、岡田）
76－6		6ACB－A（塚山3276－1、今西）
76－7		6ACM－M（広頭3385－2、斎宮小）
76－8		6AFM－G（鍛冶山2736－3、近鉄）
76－9		6ACQ（南裏144－1、田所）
76－10		6ABD－U（古里579、池田建設）
76－11		6ABE（古里554、明和町）
76－12		6AEE（楽殿、町道下水管）
76－13		6ADD－K（篠林3143、中西）
76－14		6AEE－S（楽殿2878－3、山路）
76－15		6ABF～6ABH（中垣内、県道拡幅）
76－16		6AEK－B（下園2936－2、明和町）
76－17		6AEV－A（鈴池339－5、永島）
77		6AGJ－D（東加座2453、他）
78		6ADL（宮ノ前3054、他）
79		6AGG－A・B（東加座2440、他）
80		6AFG－F～I（西加座2696、他）
81－1	H1	6AEC～F（町道塚山線拡幅）
81－2		6ABJ、6ABK（古里、県道拡幅）
81－3		6ADS－M（木葉山137、中川）
81－4		6AED－L（楽殿2881－2、山本）
81－5		6AFQ－C（中西597－2、木戸口）
81－6		6ADD－F（篠林313、池田）
81－7		6ABL－U（中垣内430－7、川本）
81－8		6ABJ（古里、明和町）
81－9		6ACF（中垣内、三重県）

次	年	度　調　査　地　区	次	年	度　調　査　地　区
81－10	1	6ＡＤＲ－Ｖ（木葉山297、明和町）	85－1	2	6ＡＢＤ～6ＡＣＤ（古里、三重県）
81－11		6ＡＣＭ－Ｎ（広頭3385－２、明和町）	85－2		6ＡＣＡ－Ｐ　（古里3279、松本）
81－12		6ＡＥＤ－Ａ（篠林3225、中川）	85－3		6ＡＣＪ－Ｂ・Ｄ（東裏、明和町）
81－13		6ＡＣＢ　（塚山3276－19他、明和町）	85－4		6ＡＢＥ　（竹川573－1、永納）
81－14		6ＡＥＤ－Ｆ（楽殿2844－２、澄野）	85－5		6ＡＥＤ－Ｕ　（楽殿2885－２、西山）
81－15		6ＡＥＤ－Ｕ　（楽殿2885－２、西山）	85－6		6ＡＦＨ－Ｂ　（西加座、明和町）
81－16		6ＡＧ　（北野3655－１、他）	85－7		6ＡＣＢ－Ｃ　（塚山3276－３他、加藤）
82－1		6ＡＤＩ－Ｆ～Ｊ（上園3095、他）	85－8		6ＡＢＩ－Ｎ　（中垣内427－１、小林）
82－2		6ＡＤＩ－Ｋ・Ｌ（上園3100、他）	86		6ＡＦＨ－Ｆ・Ｇ・Ｈ（西加座2679－１他）
83		6ＡＦＪ－Ｃ～Ｆ（西加座2770－３、他）	87		6ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ（塚山3356他）
84－1		6ＡＦＪ－Ｇ　（西加座2764－３）	88		6ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ　（鍛冶山2411－１他）
84－2		6ＡＦＨ－Ｇ・Ｈ（西加座2679－１、他）			



第32図　斎宮跡地区表示

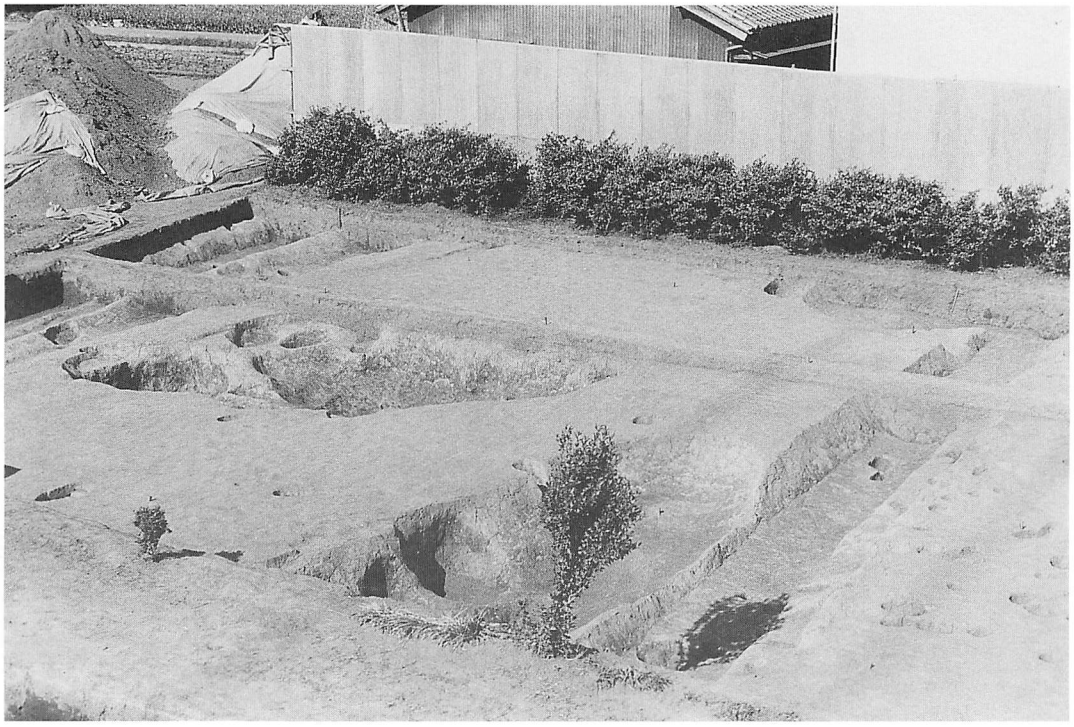
図　　版

第86次調査全景（北から）

第88次調査全景（南から）

全　　景（北から）

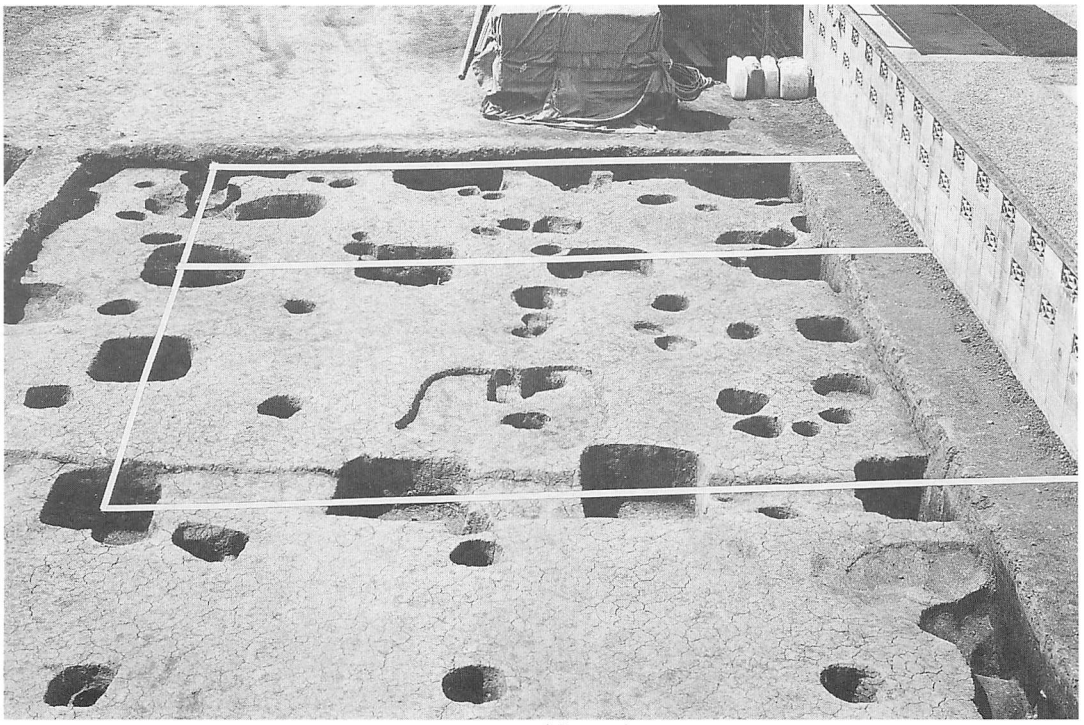
北　半　景（南から）



ＳＦ6009（南西から）

ＳＢ6000（北から）

ＳＢ6020（北から）

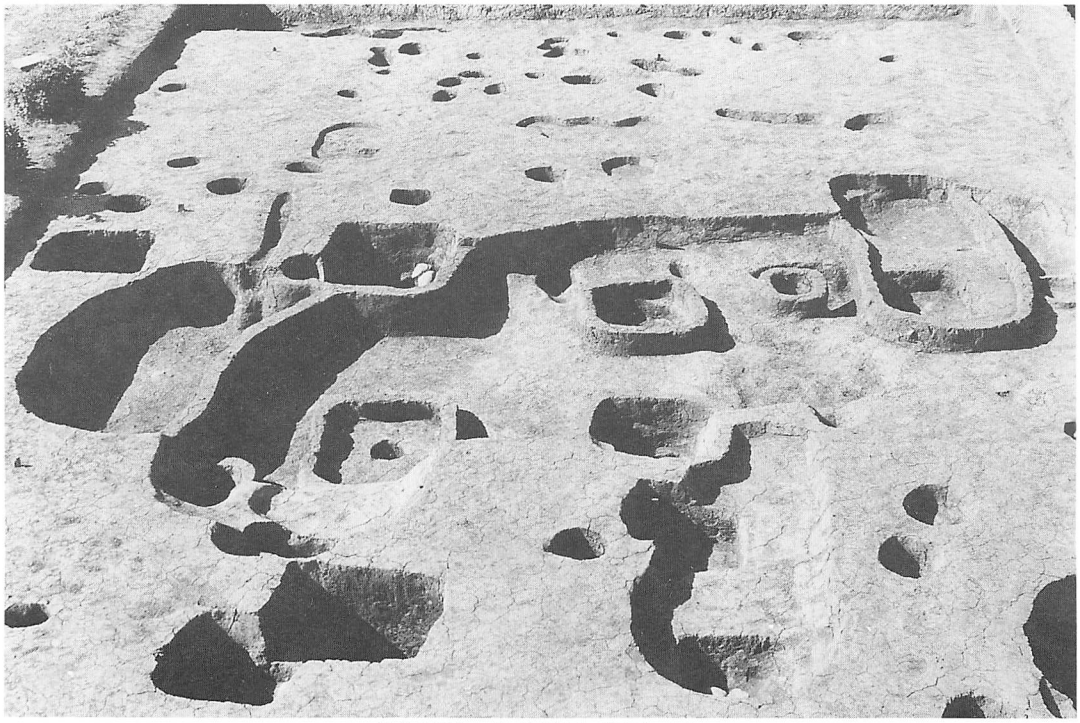


ＳＢ6055（北から）

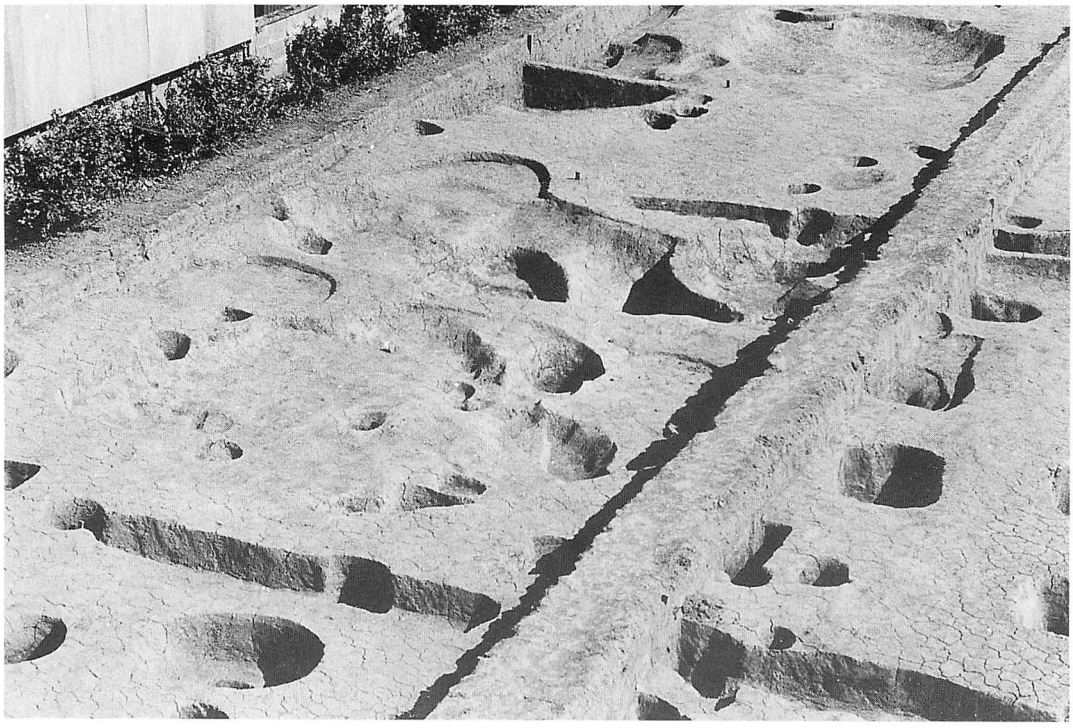
ＳＢ5924・ＳＫ6046・ＳＫ6048（北から）

ＳＢ6010・ＳＢ6050（北から）

ＳＫ6030（北西から）



ＳＫ6011～ＳＫ6015（南から）



ＳＫ6060他土坑群（北西から）

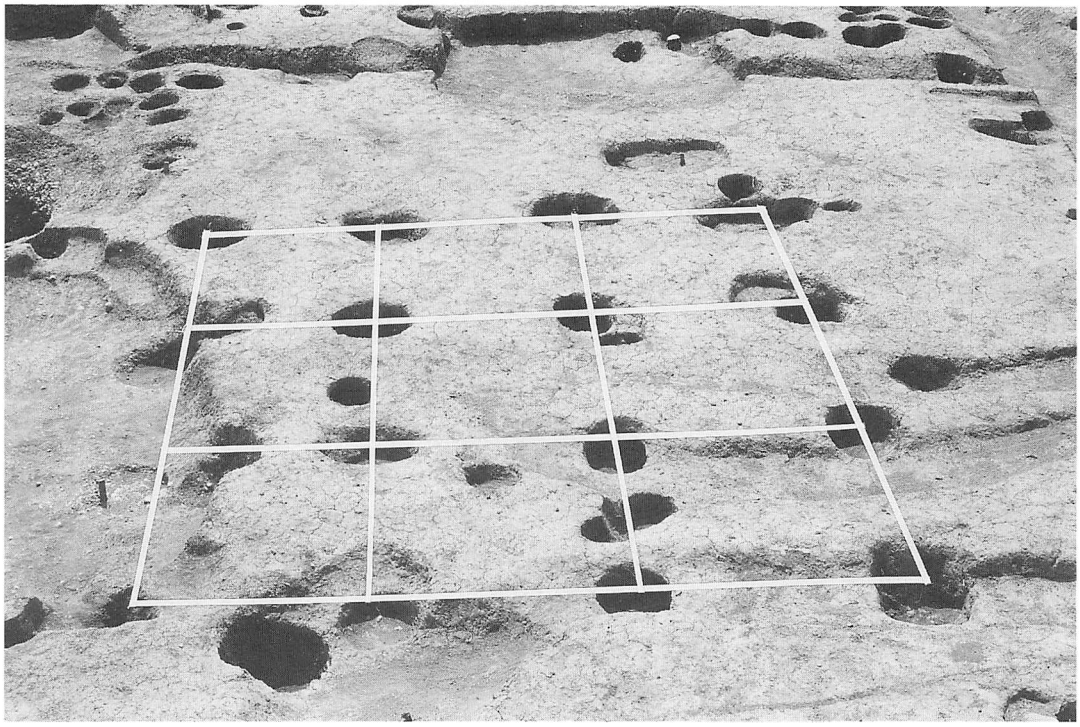
ＳＫ6005（南西から）

全　　景（北東から）

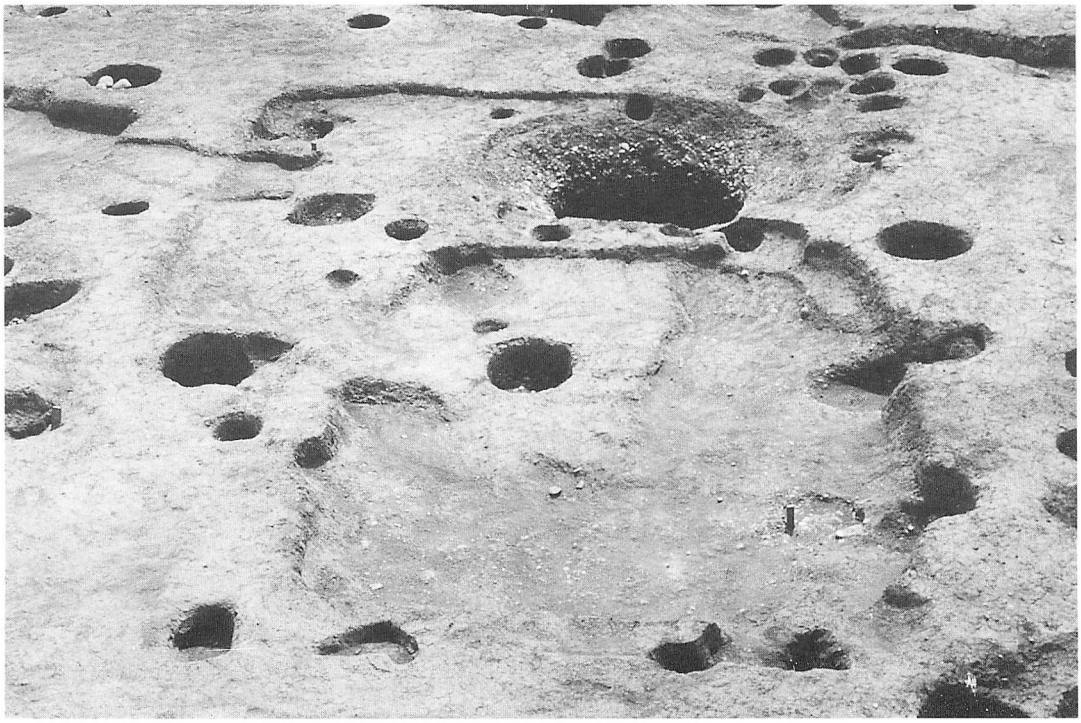
南調査区全景（西から）

ＳＢ6090（西から）

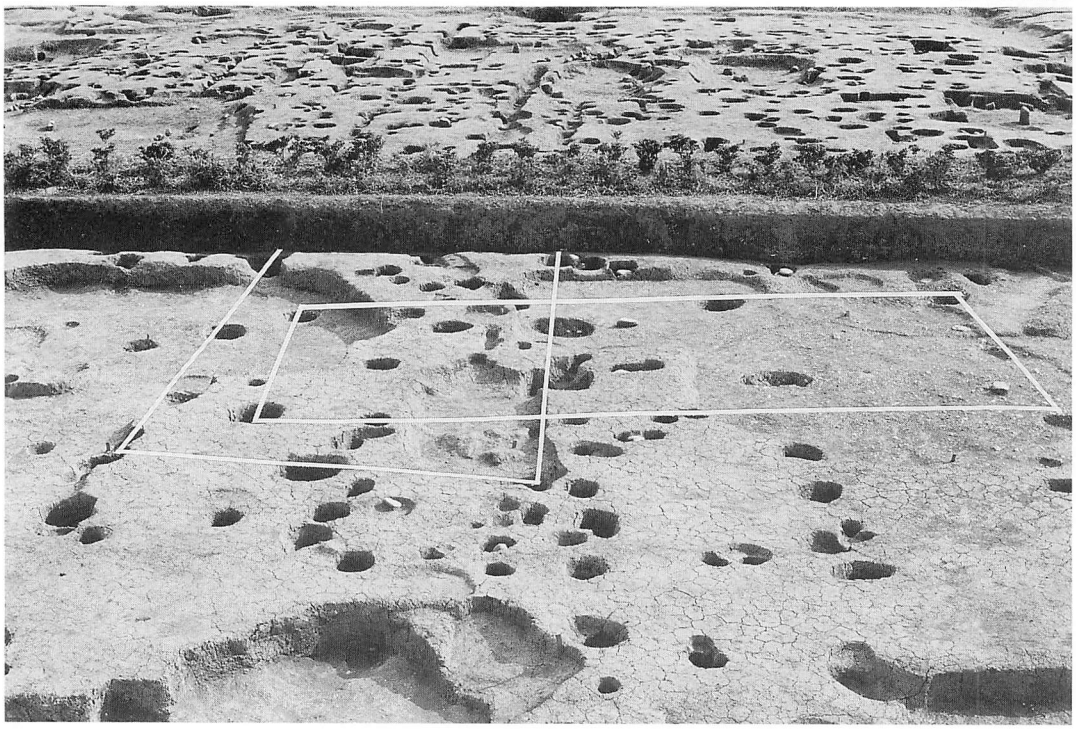
ＳＢ6090・ＳＢ6091・ＳＢ6098～ＳＢ6100（南から）



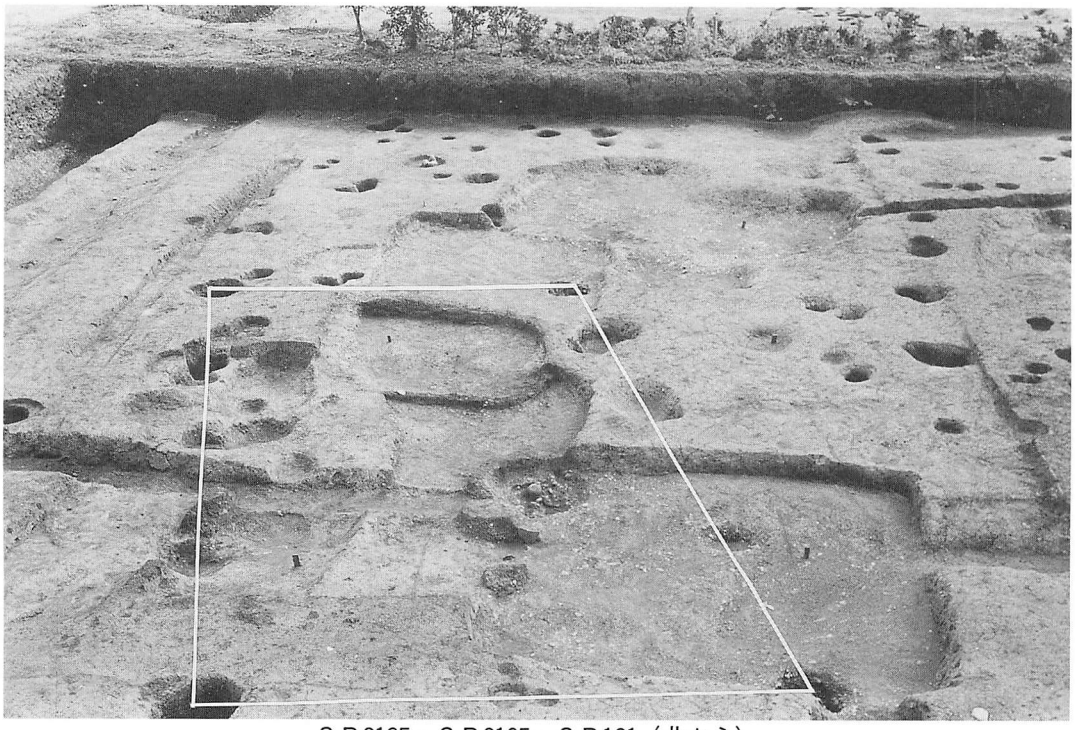
ＳＢ6092（北から）



ＳＢ6098・ＳＢ6099（北から）



ＳＢ6123・ＳＢ6124・ＳＫ6128（北から）

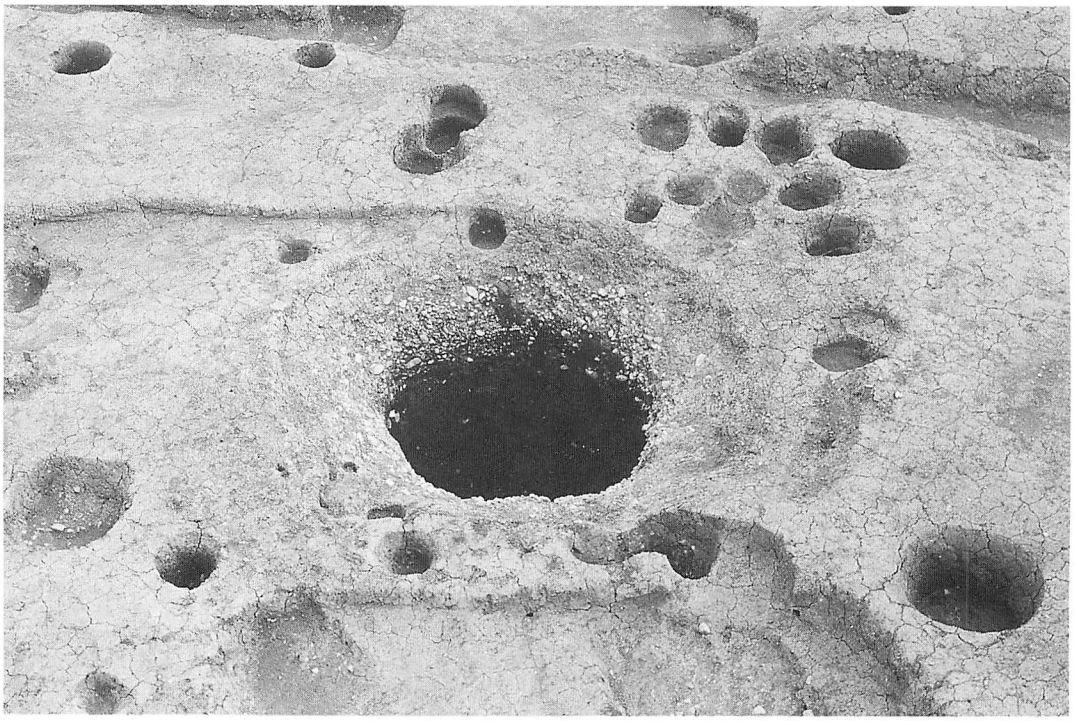


ＳＢ6135・ＳＢ6105・ＳＢ161（北から）

S B6165（北から）

S B6180（北から）

ＳＤ207（南から）

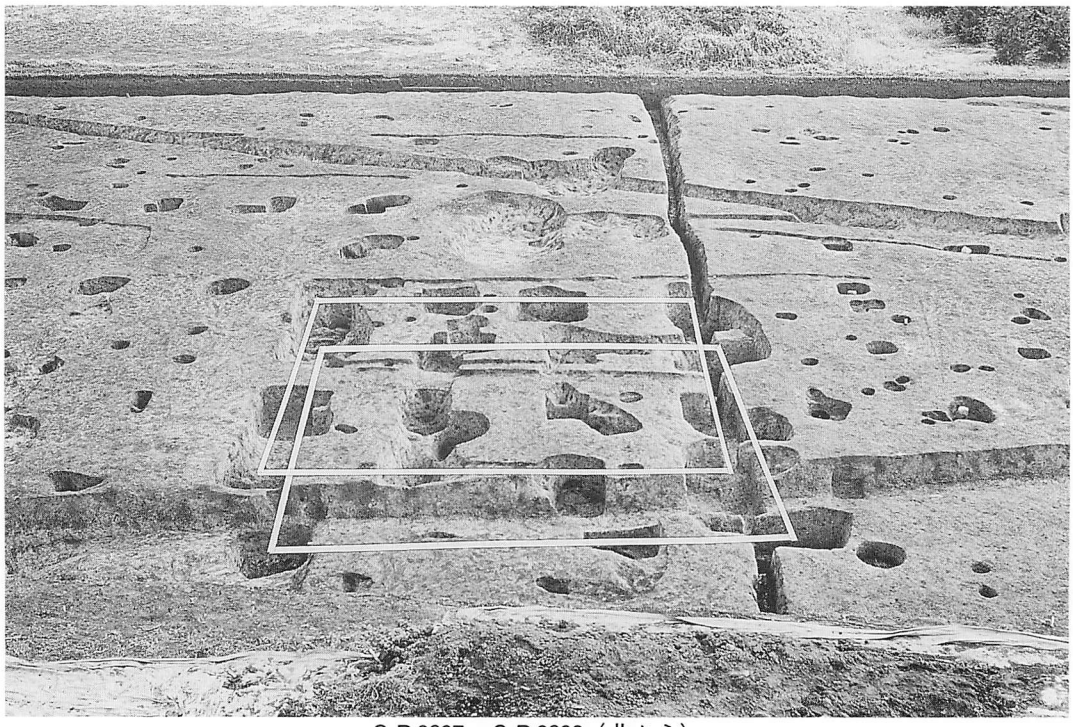


ＳＥ6101（北から）

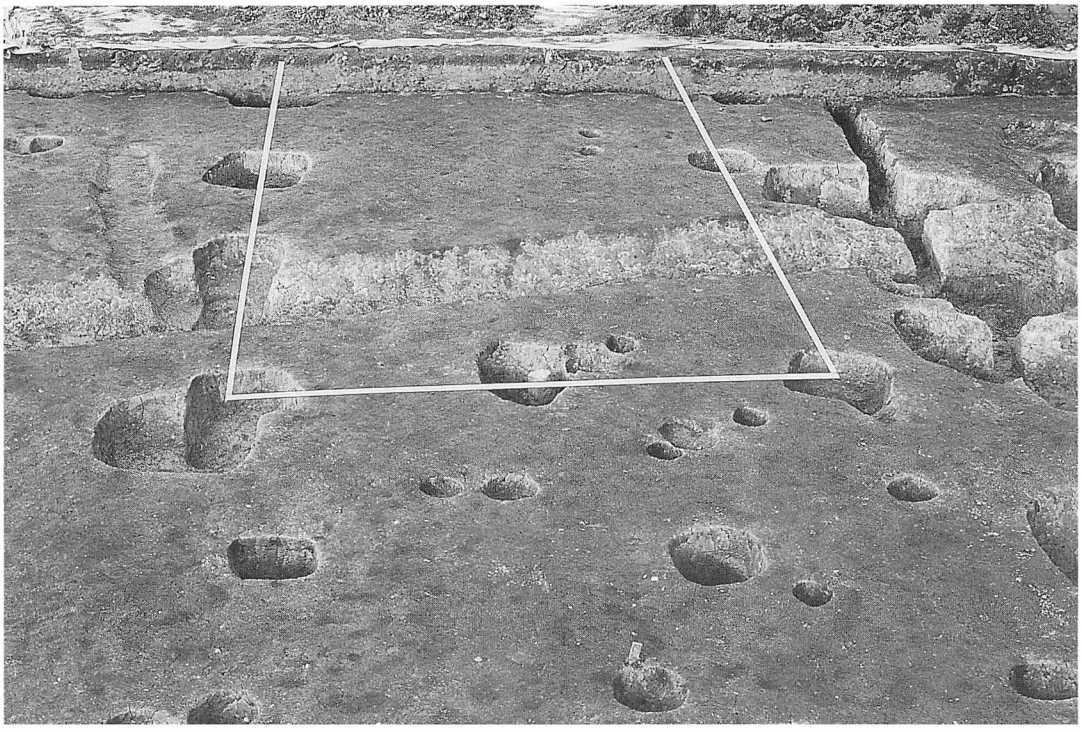
全　　景（東から）

西半景・ＳＡ2800（北から）

ＳＤ2404（東から）

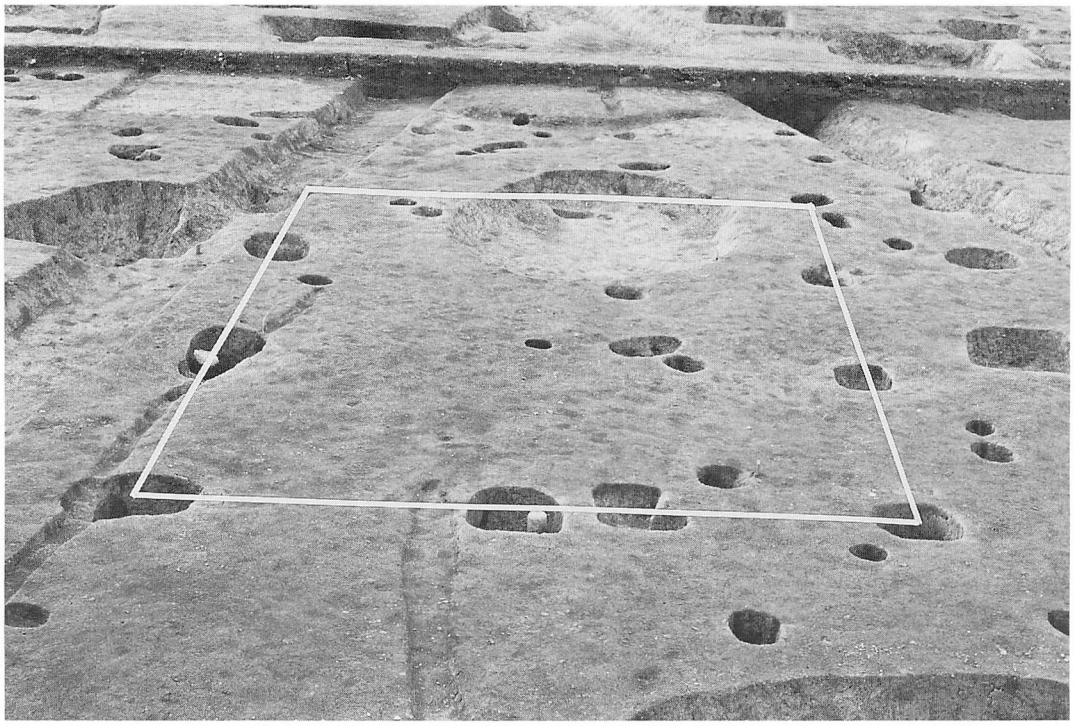


ＳＢ6237・ＳＢ6238（北から）

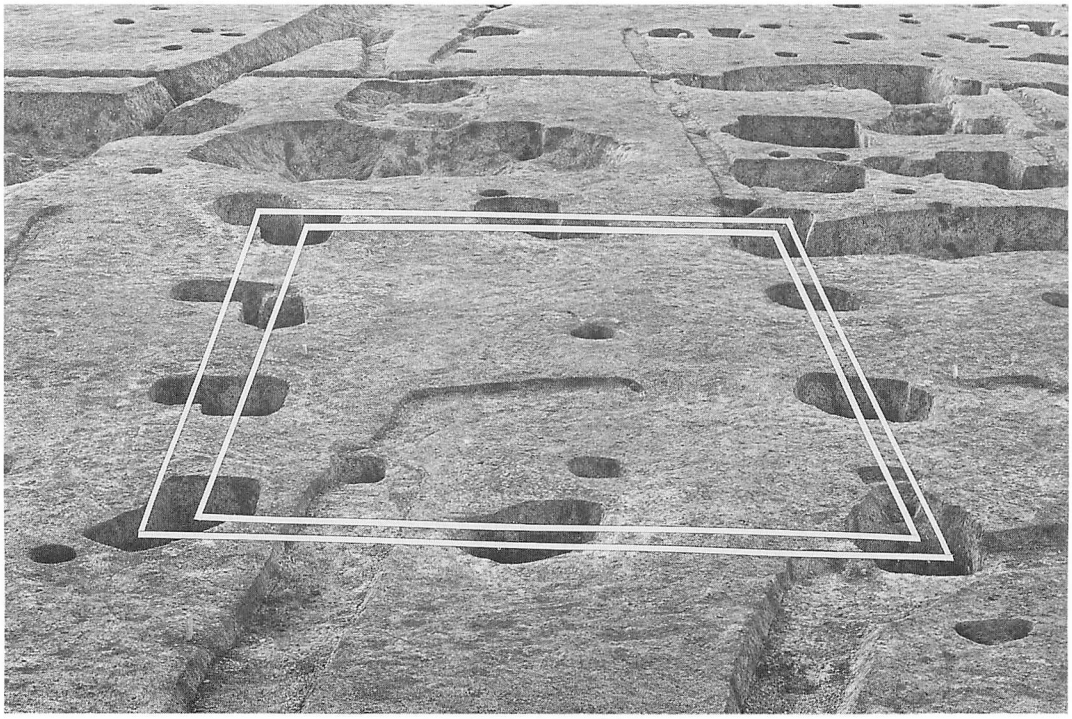


ＳＢ6233（南から）

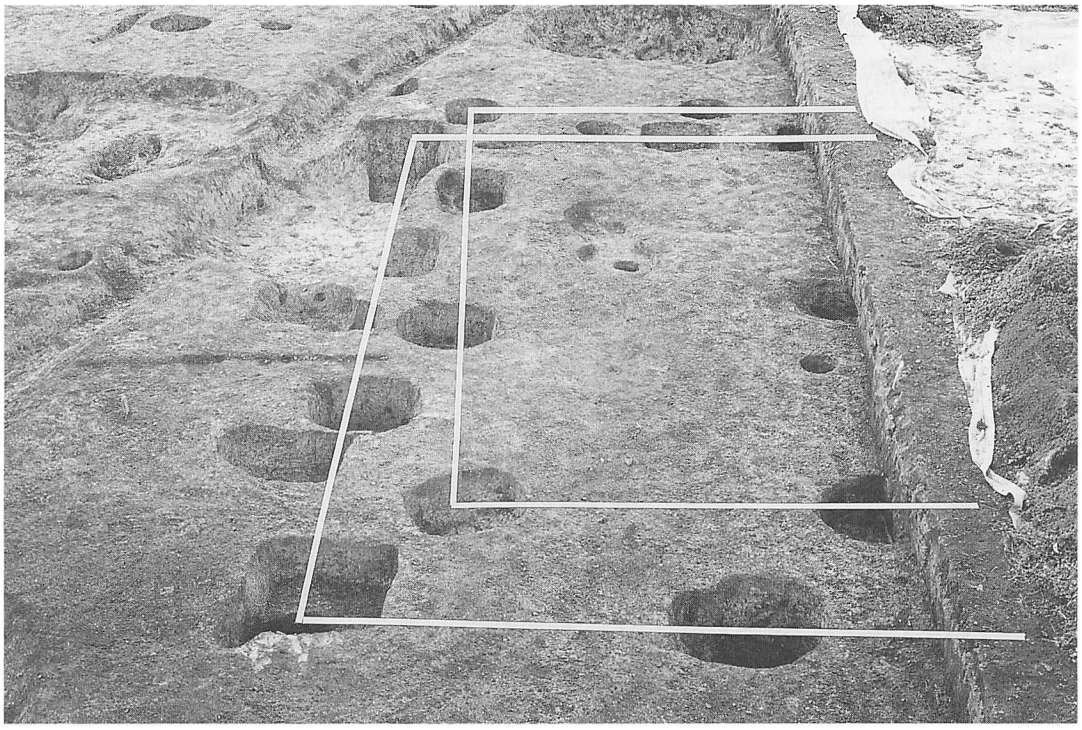
ＳＢ6232（南から）



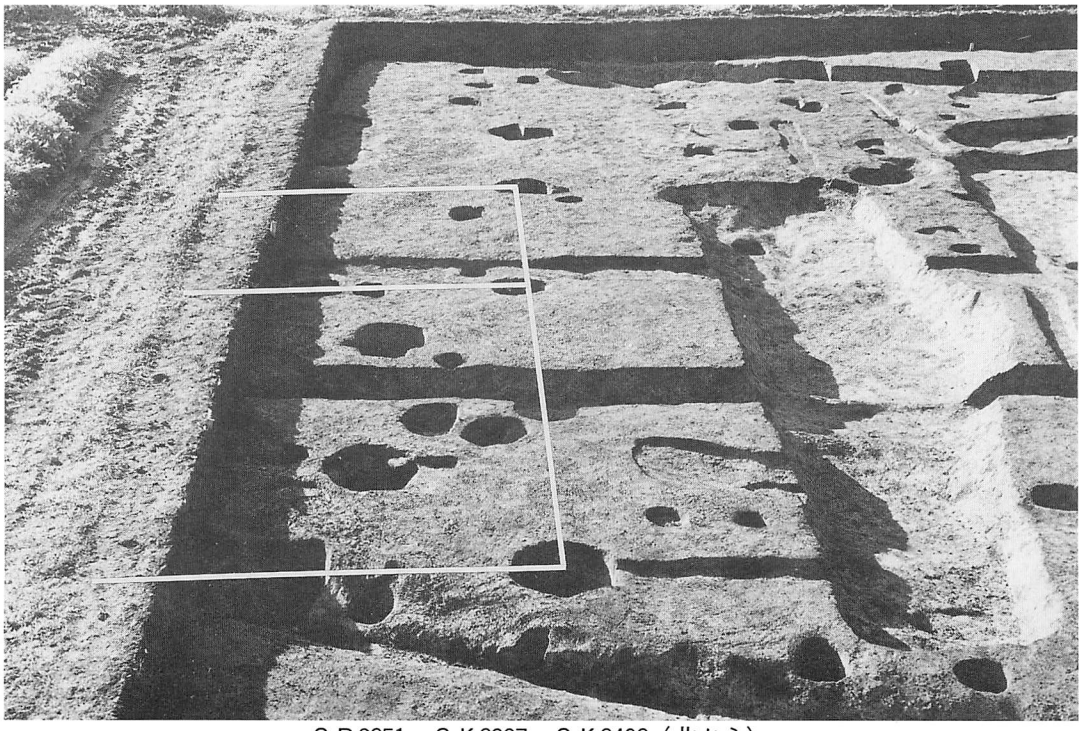
ＳＢ6234（東から）



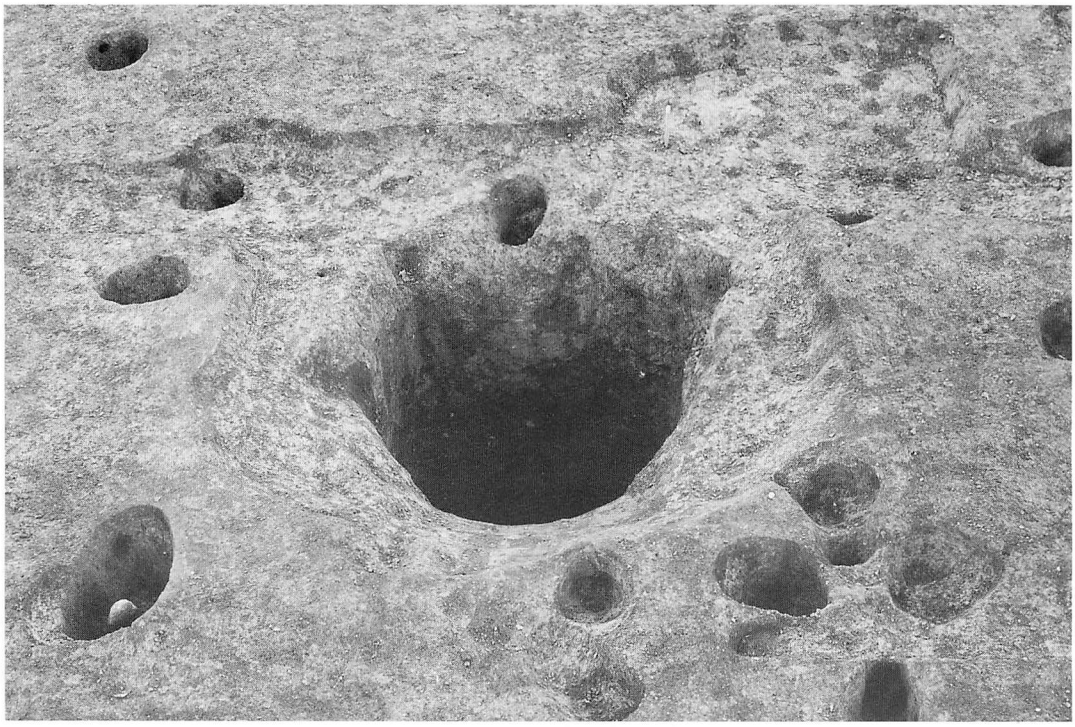
ＳＢ6241・ＳＢ6242（東から）



ＳＢ2390・ＳＢ2391（東から）

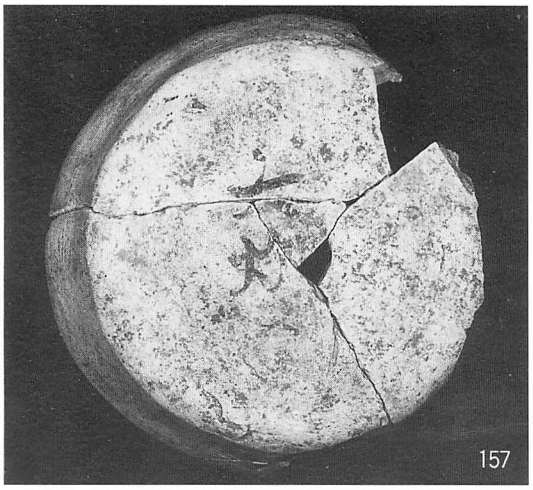


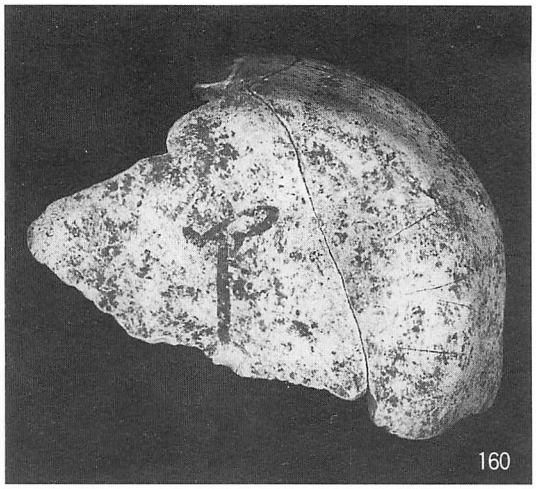
ＳＢ6251・ＳＫ2397・ＳＫ2402（北から）

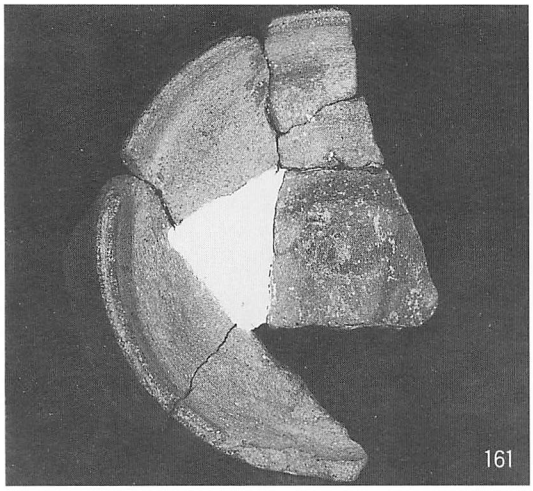


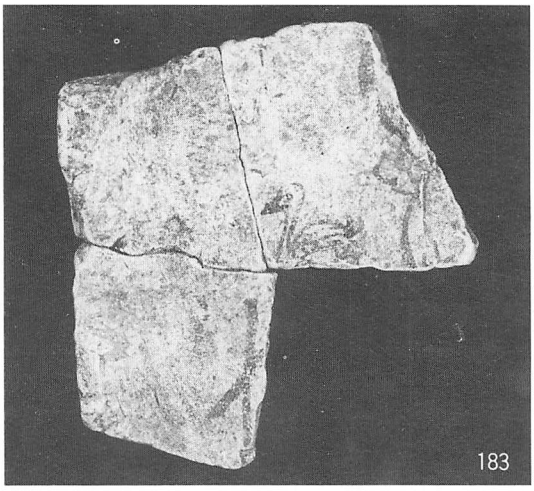
ＳＥ6240（東から）

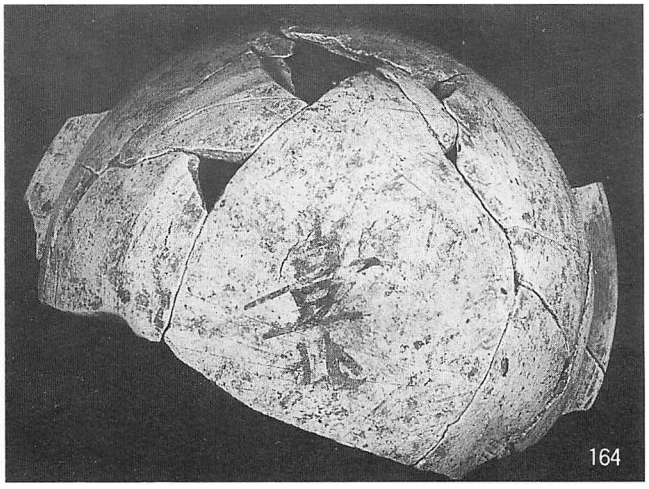
ＳＫ6226・ＳＫ6227土層断面（東から）



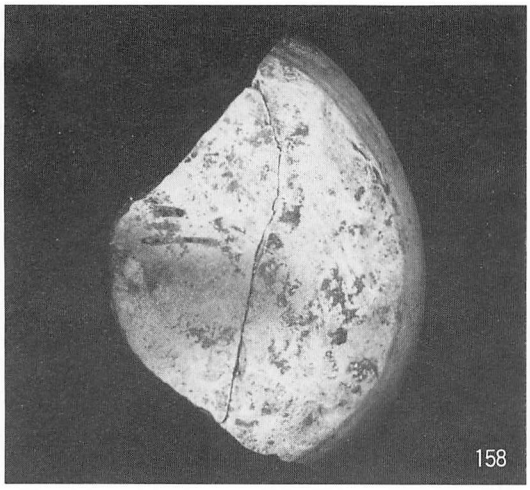


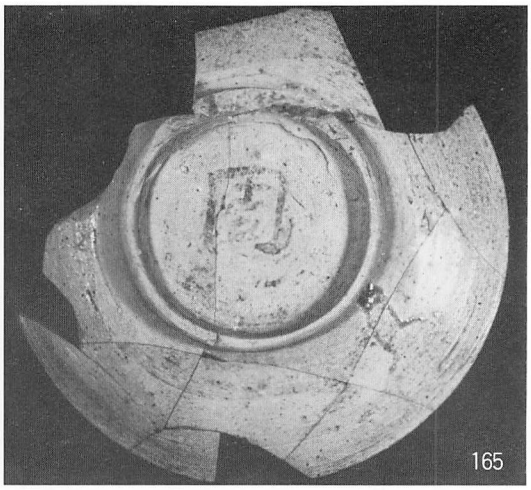


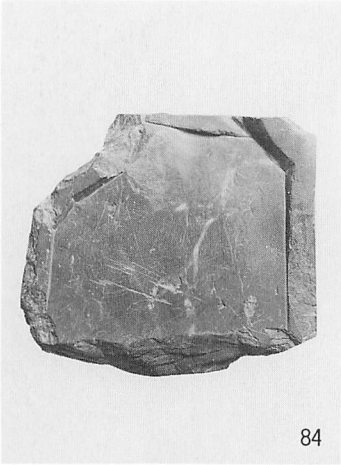


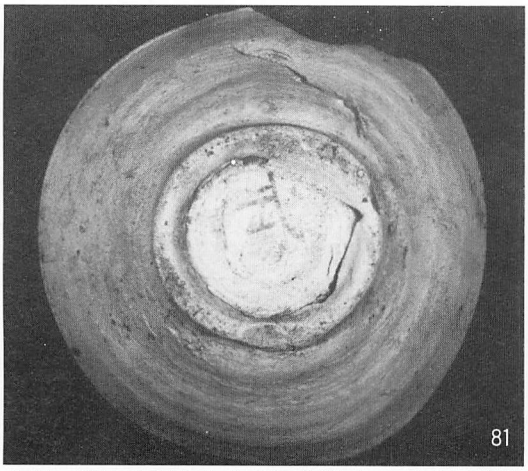


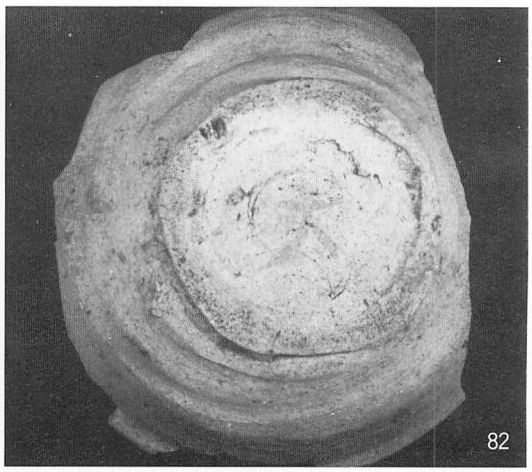
第86次調査出土墨書土器（大炊・官・府・水鳥の絵・本あるいは奉・豊兆ヵ）







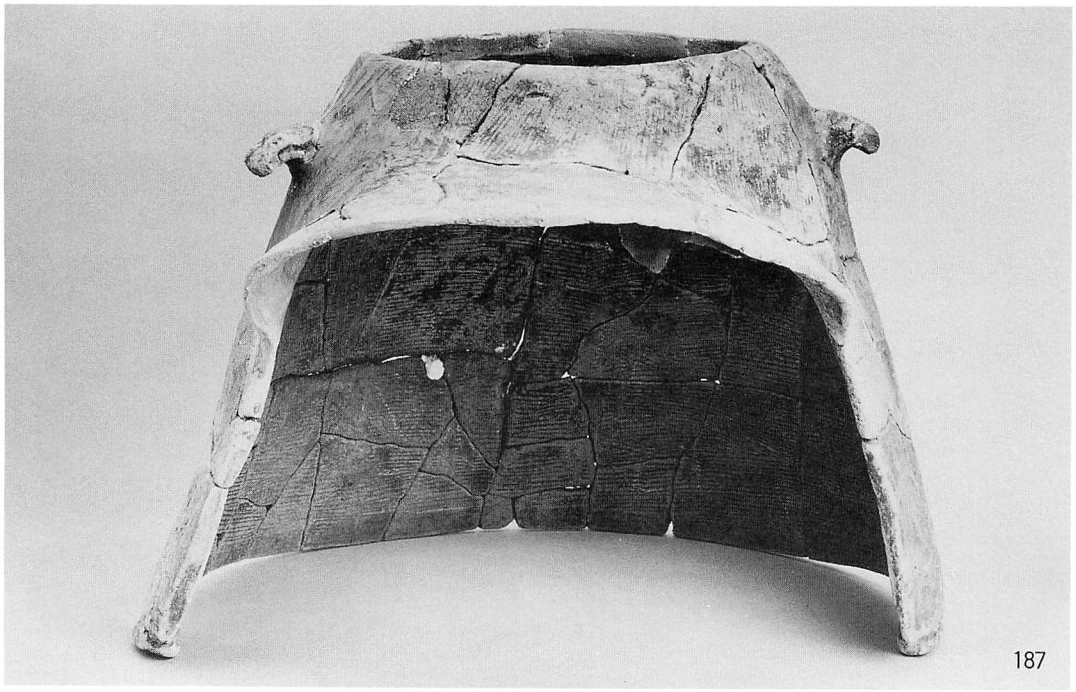




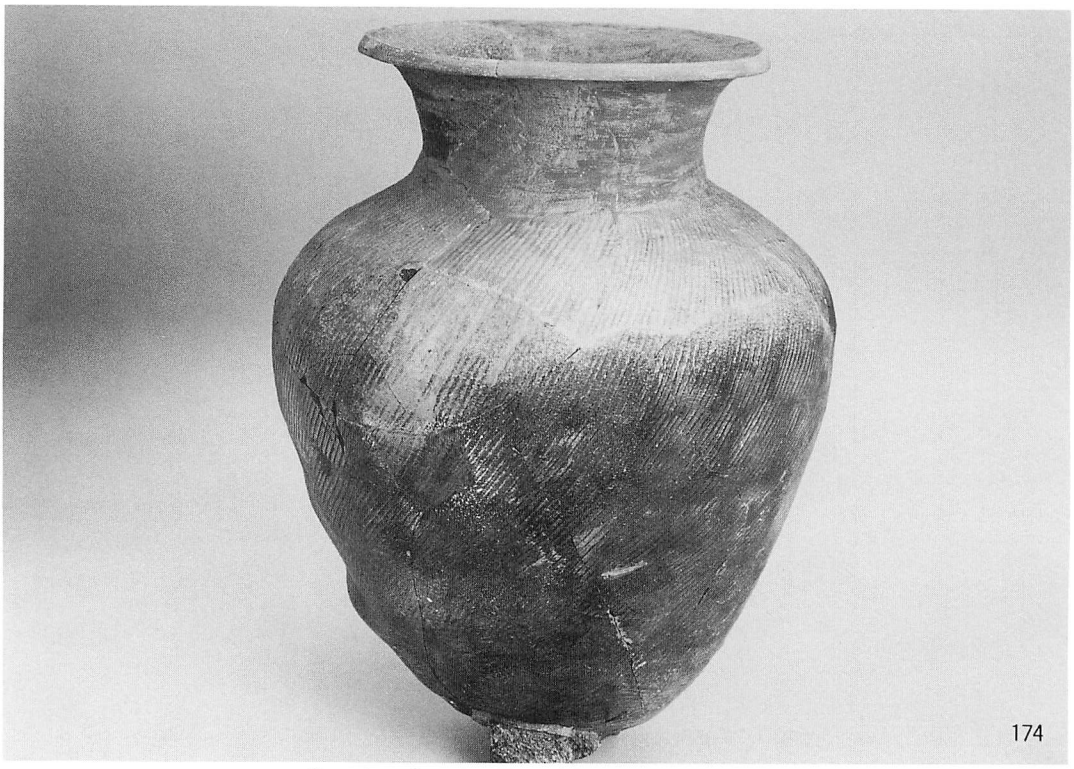
上段：第86次調査出土墨書土器（三・周）、中段：第87次調査出土石硯、陶硯、須恵器（１：３）
下段：第87次調査出土墨書土器（武・大）

第88次調査　ＳＫ6225出土土器

第88次調査　ＳＫ6210出土土器



第88次調査　ＳＫ2798出土土器（１：５）



第88次調査　ＳＫ6215出土土器（１：５）

国史跡 斎宮跡

発掘調査概報

平成3年3月30日

編集発行 斎宮歴史博物館
印　　刷 光出版株式会社

本書は、斎宮歴史博物館の許可を得て、
斎宮研究会が増刷したものである。